日田地区遺跡群発掘調査報告３
日田市埋蔵文化財調査報告書第42集

吹上Ⅰ

－３～５次調査の記録－

2003年

日田市教育委員会

吹上原台地空中写真（南西から）

吹上原台地空中写真（南東から）

吹上原台地空中写真（西から）

吹上原台地空中写真（北から）

序　　文

本市に所在します吹上遺跡は、古くから弥生時代の集落遺跡として知られ、古老から子供の頃に遊び場であったこの遺跡で、よく土器や石器を拾ったと言う話しを聞きます。

吹上遺跡はこれまでに当委員会が11次の調査を行い、弥生の人々の生活跡や墓地が発掘され、そこからは多くの遺物が出土しています。

とくに平成７年の６次調査では、王墓級と評価される甕棺墓や木棺墓が発見され、市民の大きな関心事となり、また学術的にも遺跡の重要性が一段と高まりました。

この６次調査地点は、当時の関係者のご理解やご協力によって、大分県指定史跡として文化財の指定を受けることになり、その後日田市が公有化を行い、永久的に保護されることになりました。

この調査を契機に、平成８年度からは別府大学のご協力をいただきながら、遺跡全域の確認調査を実施し、大きな成果を上げています。

本書はこうした発掘調査の内容を整理し、報告するもので、文化財の保護や地域の歴史、学術研究等にご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、調査から報告書作成にいたるまで、多大なるご指導を賜りました大分県教育委員会や指導の先生方、さらには調査へのご協力をいただきました土地所有者の皆様方に対し、心から厚くお礼を申し上げます。

平成15年３月

日田市教育委員会
教育長　後　藤　元　晴

例　　言

1．本書は、日田市教育委員会が国庫・県費の補助を受けて実施した吹上遺跡の発掘調査報告書である。
2．吹上遺跡の調査報告については分冊発行とし、本書では３次～５次調査分を『吹上Ⅰ』として刊行する。
3．各年次調査にあたっての協力者は、第１章第３節　調査組織に記した。
4．調査現場での実測者や写真撮影等の担当者については、各年次調査ごとに記している。
5．本書の巻頭カラーと各調査報告の記録に用いた航空写真は、平成14年度に九州航空に撮影委託した成果品を使用した。
6．出土遺物および図面、写真類は、日田市埋蔵文化財センターに保管している。
7．本書の執筆は調査員がそれぞれあたり、第１～４章を土居和幸、第５章を行時志郎が担当した。
8．本書の編集と構成は、土居・行時・下村智で協議し、土居が行なった。
9．題字は、日田市文化財調査委員である武石邦男氏の渾亳による。

日田市の位置

目　　次

はじめに …… 1

第１章　調査の経緯 …… 3
　第１節　これまでの調査経過 …… 3
　第２節　６次調査地点の保存までの経過 …… 6
　第３節　遺跡の公開と保護活動 …… 8
　第４節　調査組織 …… 10

第２章　遺跡の立地と環境 …… 15
　第１節　遺跡の位置と地理的環境 …… 15
　第２節　歴史的環境 …… 18

第３章　３次調査の記録 …… 27
　第１節　調査の概要 …… 29
　第２節　調査の内容 …… 31
　第３節　小　　結 …… 49

第４章　４次調査の記録 …… 70
　第１節　調査の概要 …… 72
　第２節　調査の内容 …… 74
　第３節　小　　結 …… 85

第５章　５次調査の記録 ……101
　第１節　調査の概要 ……103
　第２節　調査の内容 ……103
　第３節　小　　結 ……106

挿 図 目 次

(はじめに)

第１図　吹上遺跡調査区位置図（1/2500）…… 2

(第１章　調査の経緯)

第１図　昭和28年頃発見の甕棺墓実測図 …… 3

第２図　６次調査区の指定範囲地籍図（１/2000）…… 7

(第２章　遺跡の立地と環境)

第１図　吹上遺跡周辺の地形図（１/2500）…… 16

第２図　日田盆地の主要遺跡分布図（１/25000）…… 23～24

(第３章　３次調査の記録)

第１図　３次調査の位置（1/2500）…… 28

第２図　３次調査区の位置（１/500）……30

第３図　１トレンチ出土土器・石器実測図（１/4・１/3）…… 31

第４図　２トレンチ遺構配置図（１/100）……32

第５図　２トレンチ１号貯蔵穴実測図（１/30）…… 32

第６図　２トレンチ１号貯蔵穴出土土器実測図（１/４）…… 33

第７図　２トレンチ１～４号土坑実測図（１/30）…… 34

第８図　２トレンチ１号土坑出土土器実測図（１/４）…… 35

第９図　２トレンチ２～４号土坑出土土器実測図（１/４）…… 36

第10図　２トレンチ出土土器（１/４）と出土石器（１/３）…… 37

第11図　３トレンチ遺構配置図（1/100）…… 38

第12図　３トレンチ１号竪穴住居実測図（１/40）…… 38

第13図　３トレンチ１号竪穴住居出土土器実測図（１/４）…… 39

第14図　３トレンチピット１出土土器実測図（１/４）…… 40

第15図　３トレンチ１号貯蔵穴実測図（１/30）…… 40

第16図　４トレンチ遺構配置図（1/100）…… 40

第17図　４トレンチ出土土器実測図（１/４）…… 40

第18図　５トレンチ遺構配置図（1/100）…… 41

第19図　５トレンチ１号貯蔵穴実測図（１/30）…… 42

第20図　５トレンチ１号貯蔵穴出土土器実測図１（１/４）…… 43

第21図　５トレンチ１号貯蔵穴出土土器実測図２（１/４）…… 44

第22図　5トレンチ2号貯蔵穴実測図（1/30）…… 46
第23図　5トレンチ2号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）…… 47
第24図　5トレンチ1・2号貯蔵穴出土石器実測図（1/2・1/3）…… 48
第25図　5トレンチ2号貯蔵穴出土土製品・表採土器実測図（1/3・1/4）…… 49

（第4章　4次調査の記録）

第1図　4次調査の位置（1/2500）…… 71
第2図　4次調査区の位置（1/500）…… 73
第3図　1トレンチ遺構配置図（1/600）…… 74
第4図　1トレンチ1～4号土坑実測図（1/30）…… 75
第5図　1トレンチ5～8号土坑実測図（1/30）…… 76
第6図　1トレンチ1～4号・6号土坑、ピット1出土土器実測図（1/4）…… 78
第7図　1トレンチ1号甕棺墓実測図（1/30）…… 79
第8図　1トレンチ1号甕棺実測図（1/8）…… 79
第9図　1トレンチ1号箱式石棺墓実測図（1/30）…… 80
第10図　1トレンチ2号箱式石棺墓実測図（1/30）…… 81
第11図　1トレンチ2号箱式石棺墓出土土器実測図（1/4）…… 82
第12図　1トレンチ出土土製品・石器実測図（1/2）…… 82
第13図　1トレンチ出土縄文土器・表採土器実測図（1/4）…… 83
第14図　2トレンチ1号甕棺墓実測図（1/30）…… 84
第15図　2トレンチ1号甕棺実測図（1/8）…… 85
第16図　2トレンチ出土土器・石器実測図（1/4・1/2）…… 85

（第5章　5次調査の記録）

第1図　5次調査の位置（1/2500）…… 102
第2図　5次調査区の位置（1/500）…… 104
第3図　トレンチ出土土器実測図（1/4）…… 105

写 真 図 版 目 次

巻頭図版１　吹上原台地空中写真
巻頭図版２　吹上原台地空中写真

（第３章　３次調査の記録）
図版１　２トレンチ …… 54
図版２　２トレンチ１号貯蔵穴、１号土坑 …… 55
図版３　２トレンチ１～４号土坑 …… 56
図版４　３トレンチ …… 57
図版５　３トレンチ１号竪穴住居 …… 58
図版６　３トレンチ１号竪穴住居 …… 59
図版７　３トレンチ１号貯蔵穴 …… 60
図版８　４トレンチ …… 61
図版９　５トレンチ１・２号貯蔵穴 …… 62
図版０　５トレンチ１・２号貯蔵穴 …… 63
図版１　１トレンチ、２トレンチ１号貯蔵穴・１～３号土坑出土遺物 …… 64
図版２　２トレンチ４号土坑、３トレンチ１号竪穴住居・ピット１、
５トレンチ１号貯蔵穴出土遺物 …… 65
図版３　５トレンチ１号貯蔵穴出土遺物 …… 66
図版４　５トレンチ１号貯蔵穴出土遺物 …… 67
図版５　５トレンチ１・２号貯蔵穴出土遺物、出土石器 …… 68
図版６　出土石器 …… 69

（第４章　４次調査の記録）
図版１　１トレンチ …… 88
図版２　１トレンチ１～４号土坑 …… 89
図版３　１トレンチ２号土坑 …… 90
図版４　１トレンチ１号甕棺墓 …… 91
図版５　１トレンチ１・２号箱式石棺墓 …… 92
図版６　１トレンチ１・２号箱式石棺墓 …… 93
図版７　１トレンチ１号箱式石棺墓 …… 94
図版８　１トレンチ１号箱式石棺墓 …… 95
図版９　１トレンチ２号箱式石棺墓 …… 96
図版０　１トレンチ２号箱式石棺墓 …… 97

図版11　2トレンチ1号甕棺墓 …… 98
図版2　1トレンチ出土遺物 …… 99
図版3　1・2トレンチ出土遺物 …… 100

（第5章　5次調査の記録）
図版1　2トレンチと出土遺物 …… 107

挿入写真目次

（第1章　調査の経緯）
写真1　1次調査風景 …… 3
写真2　6次調査風景 …… 4
写真3　9次調査風景 …… 5
写真4　甕棺のスタンプ保存作業風景 …… 6
写真5　指定買上げ後の6次調査区 …… 6
写真6　1次調査現地説明会風景 …… 9
写真7　3次調査発掘調査体験風景 …… 9
写真8　6次調査現地説明会風景 …… 9
写真9　6次調査記念講演会風景 …… 9
写真0　10次調査現地説明会風景 …… 9
写真1　10次調査発掘調査体験風景 …… 9

（第2章　遺跡の立地と環境）
写真1　11次調査指導風景 …… 14
写真2　祇園原遺跡の空中写真 …… 18
写真3　小迫辻原遺跡の3基並ぶ居館遺構 …… 19

（第3章　3次調査の記録）
写真1　吹上原台地空中写真 …… 27
写真2　3次調査参加者 …… 29
写真3　1トレンチ調査作業風景 …… 31

（第４章　４次調査の記録）
写真１　吹上原台地空中写真 …… 70
写真２　１トレンチ作業風景 …… 72
写真３　２号箱式石棺墓 …… 81
写真４　２トレンチ作業風景 …… 84
（第５章　５次調査の記録）
写真１　吹上原台地空中写真 ……101

表　目　次

（はじめに）
第１表　調査年次と調査年度の対応表 …… 1

（第３章　３次調査の記録）
第１表　３次調査出土土器観察表 ……50～53
第２表　３次調査出土石器観察表 …… 53
第３表　３次調査出土土製品観察表 …… 53

（第４章　４次調査の記録）
第１表　４次調査出土土器観察表 …… 86
第２表　４次調査出土石器観察表 …… 87
第３表　４次調査出土土製品観察表 …… 87

（第５章　５次調査の記録）
第１表　５次調査出土土器観察表 …… 106

はじめに

吹上遺跡の発掘調査は次章第１節にまとめるように、主に農業関連事業に先立つ試掘・発掘調査や遺跡の確認調査を目的に進めてきた。こうした調査の経費については日田市教育委員会が国庫および県費の補助金を受けて、１・２次調査は吹上遺跡発掘調査事業として、以後の３～11次調査は日田地区遺跡群発掘調査事業の一環として、第１図に示す範囲をそれぞれ実施してきた。

今回報告するのはこうした事業で行なった調査分が対象であるが、平成７年度の６次調査はそもそも民間開発に伴う事前の発掘調査として原因者負担による委託契約に基づいたものであったが、調査地点の現状保存という経過過程のなかで、発掘調査に係わる経費の一部と整理・報告書については日田地区遺跡群発掘調査事業にて対応することとなったので本報告のなかでまとめることとした。

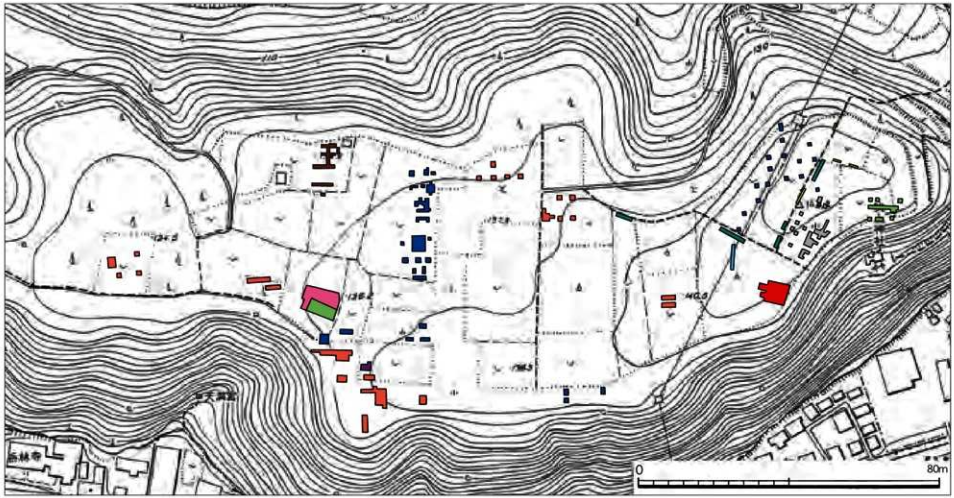
今回の調査報告書はこれまでの１～11次調査をまとめて報告することとしたが、予算的な理由により発行は分冊方式とした。報告の方法は各年次調査ごとに掲載することとし、記述については出来る限り用語や説明等の統一を心がけているが、調査担当者間にあって考え方の相違による部分についてはそのまま用いることとしている。

また、吹上遺跡での各調査はグリットやトレンチ掘りによる方法を取っていることが多く、各年次調査ごとにそれぞれの調査区の呼称を使用してきた。この点については、今回の報告書で新たな呼び名に改める予定であったが、時間的な制約もあり呼び名の変更は必要な調査区以外は行なっておらず、従来のままとした。

なお、各年次の調査年度と調査速報については下表のとおりである。

調査年次	調査年度	調　査　速　報　文　献　名
１次調査	昭和54年度	村上久和他／『吹上遺跡Ⅰ』／日田市教育委員会／1980年
２次調査	昭和55年度	村上久和他／『吹上遺跡Ⅱ』／日田市教育委員会／1981年
３次調査	昭和60年度	土居和幸／「吹上遺跡」『日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅰ』／日田市教育委員会／1986年
４次調査	昭和61年度	土居和幸／「吹上遺跡」『日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅱ』／日田市教育委員会／1987年
５次調査	平成２年度	行時志郎／「吹上遺跡（Ⅲ）」『日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅵ』　日田市教育委員会／1991年
６次調査	平成７年度	土居和幸・永田裕久編／『吹上遺跡－６次調査の概要』／日田市教育委員会／1995年
７次調査	平成８年度	土居和幸／「９　吹上遺跡（FKA）」『平成８年度（1996年度）日田市埋蔵文化財年報』／日田市教育委員会／1998年
８次調査	平成９年度	行時志郎／「15　吹上遺跡（FKA）」『平成９年度（1997年度）日田市埋蔵文化財年報』／日田市教育委員会／1999年
９次調査	平成10年度	下村智・上野淳也編／『吹上遺跡－第９次調査の概要報告－』／日田市教育委員会／1999年
10次調査	平成11年度	土居和幸・下村智編／『吹上遺跡・天満古墳-範囲確認調査に伴う概要報告-』／日田市教育委員会／2000年
11次調査	平成12年度	行時志郎・下村智／「６.吹上遺跡（FKA）11次調査-遺跡の範囲確認調査-」『平成12年度（2000年度）日田市埋蔵文化財年報』／日田市教育委員会／2001年

第１表　調査年次と調査年度の対応表



第１図　吹上遺跡調査区位置図（1/2500）

1次　2次　3次　4次　5次　6次　7次　8次　9次　10次　11次

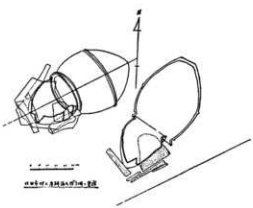
第１章　調査の経緯

第１節　これまでの調査経過

１．戦後の調査

吹上遺跡の名前が世に知られるようになったのは、昭和28年頃に別府大学の賀川光夫先生が偶然発見された大型成人用甕棺墓を調査され、その報告[注1]がなされて以後のことであろう。それによれば大型成人用甕棺墓１基は東九州における箱式石棺墓と大型甕棺墓が組み合わさった事例として紹介され、後に先の大型成人用甕棺墓のほかにも７基の合口や単棺型式の甕棺墓の調査例をまとめている[注2]。

そもそも吹上遺跡では古くから台地のほぼ全域が畑ということもあって、農作業の耕作時に多くの遺物が出土し、雨上がりには畑一面に浮いた状態で遺物を見ることができる。こうした表面散布の土器や石器を耕作者は拾い、畑の隅や農道の脇に箱式石棺墓に使用された板石などと共に寄せ集め置いている。今でも時々目にする光景でもある。このように遺跡のあちらこちらに土器片が散在する状況は早くから考古学研究者や地元郷土史家の知り得るところとなり、頻繁に現地踏査が行なわれ、これまでに数えきれない程の膨大な数の遺物が採集されており、その一部も公表されている[注3]。



第２図　昭和28年頃発見の甕棺墓実測図

なかでも、現在ではその所在ははっきりとしないが、遺跡内で採集された立岩産石庖丁の出土量は数100点にもおよぶとも言われ伝えられていて、大分県内でも屈指の大規模な弥生時代集落遺跡として周知されることとなった。

２．農業基盤整備事業に伴う調査（１・２次調査）

こうした現状にある吹上遺跡の立地する吹上台地は盆地北部の発達した台地のひとつに数えられ、以前から畑地の野菜栽培が盛んに行なわれてきた。とくに、昭和30年代に入ると北部台地上において農業生産の増大や改善を目的とした農業構造改善事業が大規模に進められた。その後の昭和40年代には第２次農業構造改善事業の範囲も市内一円へと拡がり、昭和50年代になると農業基盤改善事業の余波は吹上台地にまでもおよび、遺跡のほぼ全域を対象とした基盤整備事業が計画された。当時すでに、この遺跡には多くの集落遺構や墓地が存在するということは想定されていたところではあるが、これまでに本格的な調査が行なわれていない状況下にあって、基盤整備事業との調整にあたっては事前の試掘調査が急務となり、その結果に基づいた現状保存か開発かの選

写真１）１次調査風景

択に迫られていた。このため市教委は県教委文化課の指導・協力を得て、昭和54・55年の２ケ年間にわたって確認調査（１・２次調査）を実施することとした。

この調査では、各調査区から竪穴住居や貯蔵穴などの生活遺構や、箱式石棺墓・甕棺墓などの墳墓群が検出されると同時に多量の土器や石器、土製品などが出土した。なかでも台地平坦部を中心とする調査区では生活遺構の重複が顕著に認められた。こうした調査成果を踏まえた開発側との協議では、遺跡の重要性はもとより記録保存のための発掘調査を実施すれば数年間の期間が必要となり、また調査経費もかさむことが予想されることから最終的には事業は中止となり、遺跡の現状保存が図られることとなった。

３．農業関連等の緊急調査（３～６次調査）

こうした経過を経て、遺跡ではその後も従来通りの畑地栽培が続けられたが、昭和60年代に入ると地元地権者から農道の整備事業実施の計画が持ち上がった。こうした声に市教委では、計画の工事内容が簡易的な舗装工事であり、既存の農道を拡幅し、対象は遺跡全域におよばず一部の農道拡幅であることから、遺跡の確認をも含めた発掘調査を実施することとした。この３次調査は昭和60年度から開始した日田地区遺跡群発掘調査事業の一環として進め、貯蔵穴などの生活遺構が検出された。数年後の平成２年には再び地元から農道拡幅工事の延長の協議が持ち上がり、前回同様緊急に５次調査を行うこととしたが、対象地が平坦な場所で掘削工事とならないことから遺構の確認のみにとどめた。この調査においても貯蔵穴などの生活遺構が検出された。

また、昭和61年には畑を耕作中に人骨を副葬する甕棺墓が発見され、緊急に４次調査を実施することとなった。調査では甕棺墓のほかに箱式石棺墓２基や土坑などの遺構が検出され、箱式石棺墓からはそれぞれ１体づつの人骨が良好な状況で発見された。その後もゴボウの作付け中に土器等の発見されるケースが数回あったが本格的な発掘調査までには至らず、市教委担当職員が現地にて出土した遺物の採集を行なっている。[註4]

平成６年末にはエヌ・ティ・テイ九州移動通信網株式会社から日田無線基地局新設計画に伴う遺跡の有無の照会文章が提出され、予定地が遺跡範囲内に該当していたため、文化財保護法に基づく諸手続きを経て、委託契約を締結後の平成７年５月から６次調査を開始することとなった。調査が進む６月中頃には数基確認していた甕棺墓のうち、４号甕棺墓からはゴホウラ製貝輪を装着した人骨の発見とともに青銅製銅戈１点、鉄剣１点、勾玉１点、管玉約500個が、５号甕棺墓からはイモガイ製貝輪を装着した人骨ともに勾玉１点が、３号甕棺墓からは青銅製銅戈１点が副葬する事実が確認された。こうした弥生時代中期の墳墓事例は県内では勿論初例であり、北部九州にあっても数少ない事例であることから急遽開発者との保存の協議を行い、詳細な経過は次節にまとめるが、最終的には開発者の理解をいただき遺跡は現状保存されることとなった。

写真２）６次調査風景

４．確認調査（７～11次調査）

こうした６次調査の成果や調査区保存の結果を

踏まえ、市教委では今後の遺跡の保存対策について調査指導委員会の助言を受けながら検討を行ったところ、今後も継続した遺跡の確認調査を実施することを決めた。翌年の平成８年度はまず６次調査周辺の甕棺墓や木棺墓などの墳墓群の拡がりを目的に、６次調査地点北側の場所を選定し７次調査として、平成９年度は６次調査西側の場所を８次調査地点として実施した。両調査とも墳墓の確認までには至らず、貯蔵穴などの生活遺構の検出にとどまった。こうした結果に、６次調査の墳墓群は限定された狭い範囲内に存在することが指摘され、墳墓群が確認されたすぐ北隣の調査実施の声も上がったが、杉木が狭い範囲で植えられており地権者の伐採許可が得られず、また木の隙間の調査は危険であることから断念した。

写真３）９次調査風景

そこで、平成10年度以後の調査は遺跡全体の内容確認を主眼に置き進めることとし、調査にあたっては別府大学の協力をいただきながら進めることとなった。平成10年度の９次調査は台地の西側と東側の２つの調査地点を選択した。前者は６次調査地点に近く、台地の端部にあたることから墳墓群の発見も期待されたが貯蔵穴などの生活遺構が確認された。後者は生活遺構と重複して甕棺墓などの墳墓群を検出し、追跡調査の必要性から、翌年度に周辺部を拡張し調査を続けることとした。継続した平成11年度の10調査では前年度に検出した遺構のほかに新たに「V」字形をなす大溝を検出した。弥生時代後期末頃のこの大溝は台地を分断するように掘削されており、これまで十分に把握することの出来なかったこの遺跡の集落構造を考える意味で貴重な発見となった。

こうしたことから、次年度にはこの大溝の追跡確認を行なうべく、大溝の方向を想定した上で台地北側の調査地点を選び、11次調査を実施したところ、大溝の延長線上にあたると考えられる溝を検出することができ、さらに大溝は台地を分断することなく「T」字状に展開することが明らかとなるなど大きな成果を得ることが出来た。

このように５年におよんだ確認調査は、当初に予定した６次調査地点での墳墓群の範囲と内容確認という目的は果たすことは出来なかったが、それまで不明であった吹上遺跡での集落の存続時期やその構造の一端を窺い知る資料成果を上げることができた。

翌年度の平成13年には吹上遺跡調査指導委員会を開催したなかで、確認調査は一度終了し、これまでの調査報告書を刊行するよう助言を得て、今回の本報告書の発行する運びとなった。

以上が、吹上遺跡の発掘調査の経緯を簡単にまとめたものであるが、大雑把な流れとなっているので詳細等については各年次の調査概要を参考されたい。

註１）賀川光夫 「箱式棺を外部施設とする甕棺－大分県（豊後国）日田地方に於ける２つの例－」『考古学雑誌』
第40巻第３号　1954年

註２）賀川光夫編 「第四章　二 遺跡　14 日田盆地と周辺台地」『大分県の考古学』　1961年

註３）小田富士雄 「古代の日田･日田盆地の考古学」『九州文化史研究紀要15』　1960年
小田富士雄編 『岡為造氏収集考古資料集成』吉富町教育委員会　1983年

註４）採集した遺物については、現在日田市埋蔵文化財センターにて保管している。

第２節　６次調査地点の保存までの経過

平成７年５月１日から６次調査は開始した。順調に調査が進むなか、６月上旬には副葬遺物を保有する甕棺墓群が発見された。この事実を確認後、調査指導者である別府大学賀川光夫、福岡大学小田富士雄両先生方や大分県教委文化課職員に現地へ出向いていただき、遺跡の価値やその対策法などについての指導や助言をいただき、重要且つ保存に値する遺跡である指摘を受けた。

調査主体である市教委は直ちに内部検討を行い、調査委託期間の期限も押し詰まっていたので、委託者であるエヌ･ティ･テイ九州移動通信網株式会社に対して調査概要を伝え、今後遺跡の取扱いについて協議いただくよう協力を求めた。一方、大分県教育委員会には遺跡の取扱いについての指導を求め、結果県指定文化財として現状保存し、将来的な活用を行なうべき旨の文書通知を受け、日田市は遺跡の現状保存と文化財の指定化並びに遺跡公有化の方針を固めた。

こうしたなか、６月下旬には委託者との現状保存に関して１回目の協議を行い、遺跡保存の検討を要望した。その後再三の協議では委託者も遺跡の重要性について理解を示し、現状保存止むなしの方向での検討作業を進めることとなった。しかしながら、建設予定地が無線基地という見通しの利く場所として選定した経緯があることから、別の場所への変更設置には電波範囲の再調査の必要性と各種条件のクリアー、さらには建設後のサービス開始時期などが課題として上がった。

その後、委託者は移設場所を遺跡に隣接する市営朝日ケ丘球場付近を移転場所の候補とし、移転建設にあたっては日田市に協力を求めてきた。このことに日田市は最大限の協力を行い、最終的には９月11日に６次調査区の現状保存が決定した。

こうした協議と並行して調査期間や調査経費については県教委の指導のもと委託者と話し合いを行い、５月１日から６月30日までの契約期間のうち、甕棺墓の重要性が判明した６月16日までの調査費については委託者負担とし、その後の調査費については日田市負担とすることでまとまり、整理・報告書の作成を含めた日田市の調査費は国庫補助事業で対応することとした。

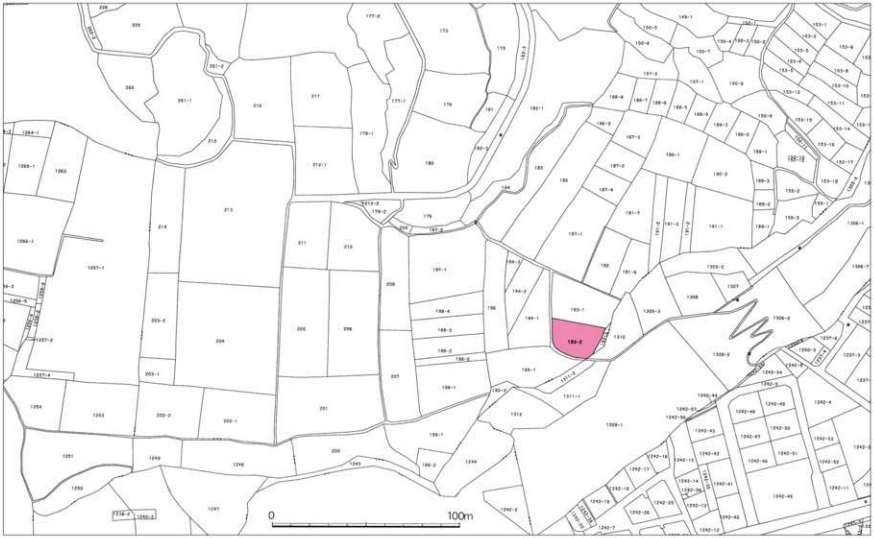
全面保存が決定し、調査終了後の遺跡の埋め戻しにあたっては、甕棺墓の棺は全て取り上げたが、墓壙の完掘は避けて棺のスタンプを残したまま埋めることとした。スタンプ痕の保存は薬剤を使ってスタンプの土を固め、乾燥後に真砂土で覆った。また、その他の遺構を含む調査区全体も真砂土で埋めた。

こうした保存経過を経た平成７年８月22日には大分県指定文化財申請書を提出し、平成８年３月29日付けで大分県指定史跡の告示が出された。これを受け日田市は平成９年１月17日に史跡地431㎡の公有化を行い、現地に案内板を設置し、現在管理を行なっている。

なお、史跡の指定範囲は第２図に示す日田市大字小迫193-2番地である。

写真４）甕棺のスタンプ保存作業風景

写真５）指定買上げ後の６次調査区



第２図　６次調査区の指定範囲地籍図（1/2000）

第３節　遺跡の公開と保護活動

吹上遺跡での11年次におよぶ調査中には、遺跡の保護や市民への調査成果の公表、教育学習機会の場の提供などを目的に、限られた時間のなかで現地説明会などの教育啓発活動を実施してきた。

以下、簡単にその活動内容について概略をまとめ、活動状況写真等を付す。

なお、こうした活動にあたっては土地地権者をはじめとする、大分県教育委員会文化課、日田考古学同好会、日田高等学校郷土史クラブ、三隈高等学校、光岡小学校、日田中央ロータリクラブなどの協力があったことを記しておく。

昭和54年８月28日　１次調査で「わたり」新聞の発行（～10月９日）
調査中に、吹上遺跡を中心とした６回のガリ版刷りの新聞を発行した。

昭和54年９月24日　１次調査現地説明会（青空教室）の開催
別府大学賀川光夫教授を招いての遺跡等の説明を行なう。

昭和56年３月29日　２次調査講演会の開催
別府大学賀川光夫教授を招いての講演会を行なった。

昭和60年12月８日　３次調査で発掘調査体験学習会の開催
光岡小学校６年生親子40名による、発掘調査体験と遺跡や遺物の話を行なった。

平成７年６月28日　６次調査成果のマスコミ発表
６次調査成果の１回目の公表を行なった。

平成７年７月２日　６次調査の現地説明会の開催
６次調査の説明を行う。大雨注意報が発令され、雷鳴轟く豪雨のなか足元には雨水が流れる山道を登って見学いただいた方は300名にものぼった。

平成７年10月11日　６次調査成果のマスコミ発表
６次調査成果の２回目の公表

平成７年10月21日　６次調査速報展の開催(～12月３日)
６次調査成果の速報展示会を催し、延981人の見学者があった。

平成７年10月22日　６次調査公開講座の開催（～12月３日）
別府大学後藤宗俊教授、九州大学田中良之教授、愛媛大学下條信行教授、西南学院大学高倉洋彰教授、熊本大学木下尚子教授を招いて、講演をいただいた。
延209人参加の参加があった。

平成７年11月26日　６次調査特別講演会の開催
福岡大学小田富士雄教授を招いての講演会を開催。63名の参加があった。

平成11年８月５日　10次調査発掘体験教室の開催
市民を対象に、親子での発掘調査体験を実施した。96名の参加があった。

平成11年８月21日　10次調査現地説明会の開催
10次調査成果を、市内外の方に公開した。50名の参加があった。

平成12年８月10日　11次調査成果のマスコミ発表
11次調査成果を公表した。

①

②

③

④

⑤

⑥

体験学習に参加して

光岡小学校六年三組　田崎　敦子

私は吹上遺跡の体験学習にでてとてもよかったと思いました。私たちの住んでいる町で実さいにはっくつをさせてもらったからです。専門の先生といっしょにスコップでと器さがしにちょうせんです。

始めは土器をわると悪いと思い、少しずつ掘ったら土器が見えてきました。生れて初めては っくつして土器が出た時は、「でた！、でた！」と大声で皆に知らせたいほどうれしかったです。

どんどん掘っていくうちにとても楽しくなったと思っていたら、そのあといくら掘っても出なくなり、少しくやしかったです。となりの人が沢山見つけているのを見て、かわってほしいなと思いました。もっともっと掘ってみたかったです。

表面に出ている土器がひろったことがなく、掘り方などは今日初めて知りました。土器がどんど掘っていろいろ予想してみると、こんなことをしらべる考古学とはとても面白いことだなと思います。実さいに掘ったりすることがとくに楽しいと思います。でもこのあとには、先生たちはみんなで研究をして考えていかねばならないので大へんなことだと思いました。

今日のはっ掘や、いろろな学習や見学から、やよい時代の人たちのくらしが、すぐ目の前にうかんでくるようです。そして考古学の興味がわいてきました。

今日の学習を今からの勉強に役立たせて、本や参考書などでつづけていきたいと思います。

今後、今日のようなは っ掘調査は出来なくても、考古学に関する学習会などがあったらぜひ参加して勉強していきたいと思います。この学習会は勉強にも役立ち、またとても楽しかったです。

⑦

① 写真 6
　1 次調査現地説明会風景
② 写真 7
　3 次調査発掘調査体験風景
③ 写真 8
　6 次調査現地説明会風景
④ 写真 9
　6 次調査記念講演会風景
⑤ 写真 10
　10次調査現地説明会風景
⑥ 写真 11
　10次調査発掘調査体験風景
⑦ 感想文
　3 次調査発掘調査体験に参加して

第４節　調査組織

各年度（年次）の発掘調査の関係者は、以下のとおりである。なお、職名は、当時のままとしている。

１次調査／昭和54年度（1979）

調 査 主 体　日田市教育委員会

調査責任者　井倉義雄（日田市教育委員会教育長）

調査指導員　賀川光夫（別府大学教授）、小田富士雄（北九州市歴史博物館主幹）、尾登一信（大分県教育委員会文化課長）

調 査 事 務　岩沢光夫（日田市立博物館長）

調 査 担 当　村上久和（大分県教育委員会文化課主事）

調　査　員　後藤宗俊（大分県教育委員会文化課文化財調査係長）、渋谷忠章（同文化課主査）

調査補助員　衛藤恭丞

作　業　員　赤尾代重、穴井三士、石橋サダエ、石丸文雄、伊藤市郎、伊藤ミヤ子、衛藤清子、小野アヤ子、小埜ツタヨ、梶原スエ子、梶原武、梶原睦次、河津荒喜、後藤昭彦、坂本英治、坂本博、坂本マサ子、杉本稲太、汐碇カズエ、滝石清、武石武義、樋口鶴子

協　力　者　坂本信光、相良恒雄、宮崎テル子、小埜文男、樋口満夫、田崎亮一、武内ユキヨ、中野一郎、伊藤年太郎、佐藤辰己、高倉芳男、長猛雄、原田勝宏、石丸邦夫、原田文利、日田高等学校郷土史部員

２次調査／昭和55年度（1980）

調 査 主 体　日田市教育委員会

調査責任者　井倉義雄（日田市教育委員会教育長）

調査指導員　賀川光夫（別府大学教授）、小田富士雄（北九州市歴史博物館主幹）、尾登一信（大分県教育委員会文化課長）

調 査 事 務　岩沢光夫（日田市立博物館長）、原田豊司（同主事補）

調 査 担 当　村上久和（大分県教育委員会文化課主事）

調　査　員　後藤宗俊（大分県教育委員会文化課文化財調査第１係長）、清水宗昭（同文化課主任）、坂本嘉弘（同主事）、吉留秀敏（同嘱託）

調査補助員　衛藤恭丞、茂和敏、土居和幸

作　業　員　赤尾代重、秋月才雄、伊藤ミヤ子、衛藤恒子、小埜アヤ子、小埜ツタヨ、小埜むつ子、梶原スエ子、梶原武、梶原彦太、梶原睦次、河津荒喜、北川とみ子、坂本安太、杉本稲太、滝石清志、武内さだ子、野内ひさ子、樋口鶴子、冷川正樹、藤原豊、安岡力造、行村太一郎

協　力　者　石橋勇、伊藤順一、伊藤寿三郎、加納政美、坂本勘一、佐藤辰己、三苫善輔、宮崎テル子、穴井通照、高倉芳男、長猛雄、原田勝宏、日田考古学同好会員、日田高等学校郷土史部員

3次調査／昭和60年度（1985）

調 査 主 体　日田市教育委員会

調査責任者　後藤英彦（日田市教育委員会教育長）～昭和60年9月30日
　　楠原芳彦（日田市教育委員会教育長）昭和60年10月1日～

調査指導員　賀川光夫（別府大学教授）

調 査 事 務　武石邦男（日田市立博物館長）

調 査 担 当　土居和幸（日田市立博物館臨時職員）

調　査　員　後藤宗俊（大分県教育委員会文化課専門員）、渋谷忠章（同文化課主査）、小柳和宏（同文化課主事）

作　業　員　伊藤文雄、加納健作、財津正記、杉本稲太、行村太一郎、行村豊、梶原百合子、高倉喜久子

協　力　者　小埜多喜生、樋口満夫、中野一郎

来　訪　者　高橋　徹、桑原幸則

4次調査／昭和61年度（1986）

調 査 主 体　日田市教育委員会

調査責任者　楠原芳彦（日田市教育委員会教育長）

調査指導員　賀川光夫（別府大学教授）、土肥直美（九州大学医学部助手）、田中良之（同医学部助手）

調 査 事 務　武石邦男（日田市立博物館長）

調 査 担 当　土居和幸（日田市立博物館学芸員）

調　査　員　後藤宗俊（大分県教育委員会文化課専門員）、清水宗昭（同文化課主査）

作　業　員　伊藤シゲコ、財津正記、坂本太助、八重津清、行時志郎、行村太一郎、行村豊

協　力　者　相良恒雄、横尾竹雄

5次調査／平成2年度（1990）

調 査 主 体　日田市教育委員会

調査責任者　楠原芳彦（日田市教育委員会教育長）

調 査 事 務　重石　巧（日田市立博物館長）、小埜サダ子（同主任）

調 査 担 当　行時志郎（日田市立博物館学芸員）

調　査　員　土居和幸（日田市立博物館学芸員）、森山敬一郎（同嘱託）

作　業　員　加納健作、坂本太助、行村太一郎、行村豊

6次調査／平成7年度（1995）

調 査 主 体　日田市教育委員会

調査責任者　加藤正俊（日田市教育委員会教育長）

調査指導員　賀川光夫（別府大学教授）、小田富士雄（福岡大学教授）、後藤宗俊（別府大学教授）、田中良之（九州大学大学院教授）、木下尚子（熊本大学助教授）

調 査 事 務　原田良伸（日田市教育委員会文化課長）、財津寅日出（同文化課課長補佐兼文化財係長）、佐々木美保（同文化課臨時職員）

調 査 担 当　土居和幸（日田市教育委員会文化課主任）、永田裕久（同文化課主事補）

調　査　員　清水宗昭（大分県教育委員会文化課主管兼埋蔵文化財第１係長）、渋谷忠章（同文化課主管兼埋蔵文化財第２係長）、山田拓伸（大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館主任研究員）、行時志郎（同文化課主事）、松下桂子（同文化課主事補）、森山敬一郎（同文化課嘱託）

作　業　員　秋吉ミユキ、石井トモ子、江藤勝義、加納健作、蒲池サチエ、島田ケサミ、山本タケ、行村豊、石井博司、金　宰賢

協　力　者　　長谷川正美

来　訪　者　池田栄史、岩永省三、小倉正五、柏原孝俊、片岡宏二、栗田勝弘、江田豊、坂田邦洋、佐藤良二郎、七田忠昭、下條信行、高倉洋彰、高島忠平、高橋徹、武末純一、中園聡、橋口達也、浜石哲也、藤田等、本田光子、溝口孝司、村上久和、山口譲治、吉留秀敏、綿貫俊一

7次調査／平成８年度（1996）

調 査 主 体　日田市教育委員会

調査責任者　加藤正俊（日田市教育委員会教育長）

調査指導員　小田富士雄（福岡大学教授）、後藤宗俊（別府大学教授）

調 査 事 務　原田俊隆（日田市教育委員会文化課長）、長尾幸夫（同文化課課長補佐兼文化財係長）、森山一宏（同文化課主任）、衛藤和美（同臨時職員）、竹原里香（同文化課臨時職員）

調 査 担 当　土居和幸（日田市教育委員会文化課主任）調査担当

調　査　員　渋谷忠章（大分県教育庁文化課主幹兼埋蔵文化財第２係長）、行時志郎（同文化課主事）、松下桂子（同文化課主事補）、永田裕久（同文化課主事補）、森山敬一郎（同文化課嘱託）

作　業　員　梶原アキエ、加納健作、桜木キエ、新川津百子、野内太一郎、野村クミ子、野村トシ子、野村義子、宮崎チカ、行村シズエ、行村ツマ子、吉田寿吉、吉田玉枝、井上とし子、宇野冨子、梶原ヒトエ、黒木千鶴子、坂本和代、佐藤美和、澁谷美智子、相良由香、瀬口さや香、平川優子、吉田千津子

協　力　者　梶原

来　訪　者　高橋徹

8次調査／平成９年度（1997）

調 査 主 体　日田市教育委員会

調査責任者　加藤正俊（日田市教育委員会教育長）

調 査 事 務　原田俊隆（日田市教育委員会文化課長）、長尾幸夫（同文化課課長補佐兼文化財係長）、森山一宏（同文化課主任）、竹原里香（同文化課臨時職員）

調 査 担 当　行時志郎（日田市教育委員会文化課主任）

調　査　員　土居和幸（日田市教育委員会文化課主任）、吉田博嗣（同文化課主事）、松下桂子（同文化課主事）、永田裕久（同文化課主事補）

作　業　員　秋吉タミエ、秋吉みゆき、猪熊忠孝、加納健作、蒲池妙子、高村笑美子、手嶋トシエ、中尾タマエ、行村ツマ子、行村豊、宇野富子、河原直美、黒木千鶴子、桑野菊美、酒井貴代美、坂本和代、平川優子、和田ケイ子

協　力　者　小埜多喜生

9次調査／平成10年度（1998）

調 査 主 体　日田市教育委員会

調査責任者　加藤正俊（日田市教育委員会教育長）

調査指導員　賀川光夫（別府大学名誉教授）、小田富士雄（福岡大学教授）、田中良之（九州大学大学院教授）、金宰賢（同大学大学院助手）、本田光子（別府大学助教授）

調 査 事 務　原田俊隆（日田市教育委員会文化課長）、石井英信（同文化課課長補佐兼文化財係長）、佐々木豊文（同文化課主査）

調 査 担 当　土居和幸（日田市教育委員会文化課主任）、行時志郎（同文化課主任）、下村　智（別府大学助教授）、吉田和彦（同附属博物館学芸員）

調　査　員　渋谷忠章（大分県教育庁文化課主幹兼文化財管理係長）、坂本嘉弘（同文化課埋蔵文化財第1係長）、高橋　徹（大分県立歴史博物館主幹研究員）、吉田博嗣（同文化課主事）、永田裕久（同文化課主事補）、山路康弘（同嘱託）

作　業　員　安藤将司、上野淳也、河津志保、下田智隆、下東嘉也、杉森久恵、田中聖二、藤野美音、細川賢一郎、松竹智之、山本哲也、米村大（以上、別府大学生）、秋吉タミエ、秋吉みゆき、猪熊忠孝、加納健作、蒲池妙子、高村笑美子、手嶋トシエ、中尾タマエ、行村ツマ子、行村豊、安部寛子、今井由美子、小埜和美、黒木千鶴子、田中静子、聖川暢子、松尾優子

協　力　者　野内豊彦、宮崎信行

来　訪　者　石井芙美子、大森円、栗焼憲児、桑野洋輔、佐藤勝、清水宗昭、橘昌信、原田勝宏、舟橋京子、山田元樹、村上久和

10次調査／平成11年度（1999）

調 査 主 体　日田市教育委員会

調査責任者　加藤正俊（日田市教育委員会教育長）

調査指導員　賀川光夫（別府大学名誉教授）、小田富士雄（福岡大学教授）

調 査 事 務　原田俊隆（日田市教育委員会文化課長）、石井英信（同文化課課長補佐兼文化財係長）、佐々木豊文（同文化課主査）、美野寿美香（同文化課臨時職員）

調 査 担 当　土居和幸（日田市教育委員会文化課主任）、行時志郎（同文化課主任）、下村　智（別府大学助教授）

調　査　員　渋谷忠章（大分県教育庁文化課課長補佐兼埋蔵文化財第１係長）、坂本嘉弘（同文化課主幹）、高橋　徹（大分県立歴史博物館主幹研究員）、吉田博嗣（日田市教育委員会文化課主任）、若杉竜太（同文化課主事）、五十川雄也（同文化課嘱託）、森山敬一郎（同文化課嘱託）

作　業　員　小野雄大、神山淳、京極徳子、後藤晃一、坂下千帆、佐藤真人、下田智隆、内藤祐介、藤野美音、米村大、松竹智之（以上、別府大学大学院生、学生）、綾部豊

協　力　者　宮崎信行

来　訪　者　甲元眞之

11次調査／平成12年度（2000）

調 査 主 体　日田市教育委員会

調査責任者　加藤正俊（日田市教育委員会教育長）～平成12年11月14日
後藤元晴（日田市教育委員会教育長）平成12年11月15日～

調査指導員　賀川光夫（別府大学名誉教授）、小田富士雄（福岡大学教授）、下村　智（別府大学助教授）

調 査 事 務　原田俊隆（日田市教育委員会文化課長）、石井英信（同文化課課長補佐兼文化財係長）、佐々木豊文（同文化課主査）、江田香織（同文化課臨時職員）

調 査 担 当　行時志郎（日田市教育委員会文化課主任）

調　査　員　渋谷忠章（大分県教育庁文化課課長補佐兼埋蔵文化財第１係長）、吉田博嗣（同文化課主任）、若杉竜太（同文化課主事）、渡邉隆行（同文化課主事補）

作　業　員　秋吉みゆき、猪熊ヨネ、高村笑美子、手嶋トシエ、中尾タマエ、行村シズエ、岡清和、北川貴洋、杉森久恵、手柴智晴、橋本樹里、平ノ内麻里子、朴智鈴、藤本永吉、森島晋太郎、吉田朋史（別府大学大学院生、学生）

協　力　者　赤尾宗重、熊谷光芳、坂本林次郎

来　訪　者　本田光子、遠部慎

写真１）11次調査指導風景

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　遺跡の位置と地理的環境

吹上遺跡は日田市大字小迫・渡里・友田といった３つの大字境に所在し、現在では小迫町、吹上町、北友田一丁目の３町に該当する。

遺跡のある日田市は大分県の西部に位置し、北部九州のほぼ中央部にあたり、西は福岡県との県境をなす。市の境界は東が福岡県浮羽郡浮羽町や朝倉郡杷木町、同宝珠山村、田川郡添田町と、北は下毛郡山国町と、東は玖珠郡玖珠町や日田郡天瀬町と、南は日田郡大山町や同前津江村とそれぞれ接している。現在の市域は南北24.8km、東西22.3km、面積約269平方km、人口は約65,000人の四方を山々に囲まれた小都市を形成している。

この日田市を中心に西へ向かえば福岡県久留米市や太宰府市、福岡市などの都市圏へと通じ、北へ向かえば北九州市や中津市、宇佐市などの周防灘沿岸部に達し、東へ向かえば湯布院温泉を過ぎ別府市や大分市などの豊後水道へと抜け、南へ向かえば杖立や黒川といった温泉峡を超え阿蘇や竹田市、熊本市に到達する。こうした各交通ルートは天領地日田として栄えた江戸時代に、江戸幕府が設置した西国郡代（代官所）を中心に筑後国高良山路・久留米城路、筑前国宰府路・福岡城路、彦山路・小倉城路、豊前国宇佐宮路・中津城路、玖珠郡森営路、直入郡岡城路・肥後国阿蘇山路・隈府路・熊本城路と呼ばれる旧国の主要な地域と結ばれていた道筋にあたり、内陸部の山間にあって文字通り交通上の要衝の地としての役割を果たしていた。

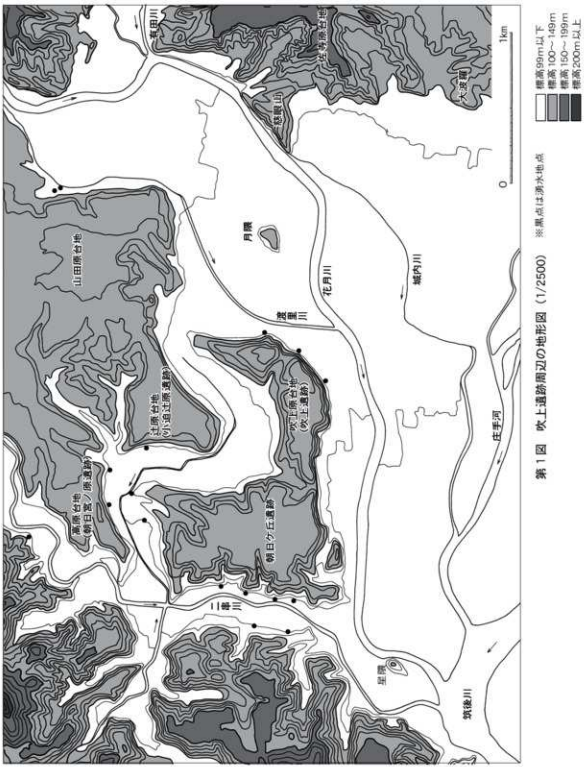
こうした四方へ広がる交通網にあって、特に東の福岡県との結びつきはより深く、現在の市民の大半は大分市へと足を運ぶよりも福岡方面に出向く割合が非常に高い。こうした要因は、市内を流れる日本三大河川の一つに数えられる筑後川の上流域に位置することや、西は筑後平野が広がることと対象的に東は九重山などの山岳地形をなしていることなどの地理的な条件が大きく左右している。

近世・近代には先の内陸交通網に加え、筑後川を媒体とした通船や筏流しによる河川交通も栄え、年貢米や材木といった物資が西へ運ばれると同時に、西からの文化を強く受け入れてきた。一方では江戸時代に西国郡代（代官所）が置かれると九州島の政治・経済の中心的な役割を担い、この時代に始まった杉の植林は日本三大美林の一つにも数えられ、日田杉の名称で一大産地として知られるようになると、日田下駄や家具の部材を作る製材所が立ち並ぶ林業の町にへと発展した。

また、豊富な筑後川の水源は、今でこそ「水郷日田」として観光のキャッチフレーズになっているが、遊船や鵜飼、鮎簗といった伝統的な文化を育んできた。さらに、日田市の大きな特徴に自然環境がある。盆地という自然構造は、夏は暑く冬は寒いという典型的な内陸型の気候を生み出している。このように日田市は、弥生時代の稲作の伝播や装飾古墳文化の流入など古代以後、西からの文化の影響を強く受けて発展してきた街で、大分県のなかにあっても伝統や文化などに独自の文化を色濃く残している。

さて、この日田市の地形を概観すると、現在の市街地にあたるのが日田盆地の沖積面で、標高は75～90mを測り、日隈・月隈・星隈と呼称される残丘が盆地内に点々と残っている。この盆地底の沖積面周囲には市内では原（はる）と呼ばれる台地が存在し、代表的なものとしては山田原、吹上原、宮原、葛原、須ノ原、町野原、佐寺原、長者原、上野原、陣ケ原などで、こうした標高約

150m前後の阿蘇４火砕流の流出により形成された溶岩台地が盆地周辺を段丘上に巡っている。こうした台地群の外側には龍体山（345m）、西の山（308m）、片峰（約500m）、大石峠（約400m）などの標高約200～600mの耶馬渓火砕流で形成された溶岩台地が占め、さらにその外輪の市の境界域には岳滅鬼山（1,036m）、大将陣山（909m）、一尺八寸山（707m）、月出山（709m）、五条殿山（834m）、釈迦岳（844m）といった標高400～1,000m級の山々が連なる。さらに遠方には



第１図　吹上遺跡周辺の地形図（1/2500）　※黒点は湧水地点

彦山（1,199m）系、久住山（1,786m）系、阿蘇外輪山（900～1,000m）が広がっている。

日田市内には幾つもの小河川が流れ込んでいる。久住山や阿蘇外輪山を源とする玖珠川や大山川は盆地東部で合流し、これに台地の合間を縫うようにして高瀬川、二串川、庄手川、花月川、串川、内河野川といった小河川が盆地内で合わさり九州最大河川である筑後川となる。筑後川はさらに西流して大肥川と合流すると筑後平野を経て有明海へと注いでいる。

こうした自然環境下にある日田盆地の北部台地上に吹上遺跡は存在している。遺跡の立地する通称吹上原台地は周辺の山田原台地や辻原台地、宮原台地などとともに盆地内では最も発達した台地群を形成している。これらの台地は千田昇氏の地形分類によれば「中位段丘１面」と呼ばれ、その説明では「中位段丘１面」は阿蘇４火砕流堆積面の下位に比高10～30mの崖をつくって分布する地形面で、主として花月川右岸一帯に広がりがあるとされる。右岸一帯の広がりとは吹上原台地や山田原台地などの周辺台地を指し示すもので、市内にみられる「中位段丘１面」のなかでは最も広範囲な地形でもある。

この発達した台地群の一角を占める吹上原台地は上面観が「L」字形をなす独立した台地で、ここから南を望めば市内一円を見渡すことが出来る。台地上での標高は約140m前後で、台地内での比高差は12m前後と高低差は余り認められず、見た目は平坦である。台地と沖積面との比高差は約40mを測り、台地西側先端部がやや緩やかに傾斜しているのを除けば概して四方は絶壁の状況を呈している。こうした台地崖面の大半は現在急傾斜地区の指定を受けており、崖面には樹木が植えられている。吹上台地の南側下には花月川が西流し、また西側下は二串川が南流しており、両河川との間には狭く細長い沖積面が伸びている。北側下は蛇行した沖積面が形成されており、この小谷に対峙して小迫辻原遺跡の所在する辻原台地と朝日宮ノ原遺跡の所在する宮原台地が立地する。

吹上台地には２つのトンネルが掘られている。東側は朝日隧道、西側は小迫隧道と呼ばれ、この隧道の通っている真上は窪んだ状況にある。台地上の現況は朝日隧道の西側は県立高校や市営野球場のほか県営・市営住宅などが立ち並び、朝日隧道から小迫隧道までの間は主に畑地栽培が行なわれており、小迫隧道から東は杉が植林されている。

この吹上遺跡もそうであるが、他の周辺台地上には水がない。第１図に示すとおり、台地周辺下では現在でも湧水地が点々と見受けられ、今でこそ水道が整備され使用頻度は減っているものの、以前までは貴重な水資源として利用されていた。

最後に、遺跡の立地する吹上台地での遺跡の範囲であるが、これまでは台地の全域を指し示したり、ある範囲に限っていた。今後、混乱を避けるために、吹上遺跡の範囲は台地のほぼ中央にある朝日隧道から東側一帯を呼ぶこととし、西側についてはすでに数次の調査が行なわれ報告書も刊行されていることから朝日ケ丘遺跡と呼称する。

（参考文献）

中島国夫 「日田盆地のなりたち」『日田市30年史』日田市　1974年

千田　昇 「日田・玖珠地域の地形－とくに台地地形について－」『日田・玖珠地域－自然・社会教育－』大分大学教育学部　1992年

原田良伸ほか　『日田市の歴史と文化財』　日田市教育委員会　1996年

土居和幸 「第２章　遺跡の立地と環境」『小迫辻原遺跡Ⅰ　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ地区編』大分県教育委員会　1999年

第２節　歴史的環境

旧石器時代

盆地内での旧石器時代の遺跡は現在20例ほどを数えるが、表面採集や発掘調査での一括資料しかなく、本格的な発掘調査は行われていない現状にある。代表的な遺跡としては吹上遺跡や長者原遺跡などでナイフ形石器などが採集されているのを始め、片峰遺跡[注1]で台形様石器、草場第二遺跡[注2]でナイフ形石器や台形様石器、三和教田遺跡[注3]Ｂ地点[注4]でナイフ形石器など、平島遺跡[注5]Ｂ区や馬形遺跡[注6]では三稜尖頭器、上野第１遺跡[注7]では剥片尖頭器がそれぞれ出土している。

縄文時代

この時代の遺跡は近年の圃場整備事業に伴う発掘調査によって増加傾向にある。竪穴住居を含む遺構は手崎遺跡[注8]で西平式期の円形住、葛原遺跡[注9]で三万田式期の隅丸方形(もしくは長方形)住が確認されており、尾部田遺跡[注10]や求来里平島遺跡[注11]Ｃ地区[注12]でも御領式や大石式の竪穴住居が検出されている。また、石ヶ迫遺跡[注13]、上野第１遺跡[注8]、大部遺跡[注9]などでは早期の集石遺構、大肥条里祝原地区[注14]では後期の集石遺構や土坑、大肥条里下河内地区[注15]では前期の集石遺構や土坑、大肥条里吉竹地区[注16]では後期の土坑、森ノ元遺跡[注17]では晩期前半代の埋甕、石ヶ迫遺跡[注13]や有田塚ヶ原遺跡[注18]などでは陥穴遺構が調査されている。このほか、牧原遺跡[注19]や三和教田遺跡[注20]Ｃ地点、隈山遺跡[注21]などでは土偶が発見されている。

弥生時代

遺跡調査例は多く、大規模な集落遺跡が吹上遺跡周辺に集中するように存在している。まず、台地上の遺跡として吹上遺跡の北側に隣接する小迫辻原遺跡[注22]や後迫遺跡[注23]では前期から後期にかけての竪穴住居、土坑、大型成人用甕棺墓、箱式石棺墓、小児用甕棺墓などが調査されている。また朝日宮ノ原遺跡[注24]では中期から後期初めの竪穴住居、土坑、大型成人用甕棺墓、小児用甕棺墓などが調査されている。また、谷ノ久保遺跡[注25]では中期の掘立柱建物が発掘されている。こうした遺跡のある台地下沖積地での調査も進み、庄手川と三隈川に挟まれた微高地上に位置する５次の調査が行なわた徳瀬遺跡[注26]では、前期後半から後期後半の竪穴住居、溝、土坑などが発掘されており、盆地内では台地上に拠点的な集落が位置するなかにあって、本遺跡は沖積地での代表的な遺跡の一つである。このほかにも、吹上遺跡南下に立地する今泉遺跡[注27]では後期の竪穴住居、小迫辻原遺跡南下に位置する本村遺跡[注28]でも後期の竪穴住居が発見され、仿製鏡の廃棄が認められている。いずれの遺跡も吹上遺跡や小迫辻原遺跡との関係が注目される遺跡である。さらに、９次の調査が行なわれた三和教田遺跡[注5]のＢ地点では環濠集落が発見され、断面逆台形の幅約５m、深さ２mの環濠内に竪穴住居のほか４間×６間の大型建物や１間×２間の掘立柱建物などが配置されていることが確認されている。

有田川や花月川を中心とする盆地北東部には、台地や丘陵上に立地する遺跡として葛原遺跡[注29]、佐寺原遺跡[注30]、祇園原遺跡[注31]があり、沖積地に位置する遺跡として平島遺跡[注32]、会所宮遺跡[注33]などが存在する。葛原遺跡では前期末から中期前半の竪穴住居や土坑などが調査され、対峙する佐寺原遺跡では前期末から後期中頃の竪穴住居、土坑、小児用甕棺墓など、また祇園原遺跡では中期後半から後期中頃の竪穴住居、掘立柱建物、小児用甕棺墓、円形周溝遺構などが発掘

写真２）祇園原遺跡の空中写真

されている。とりわけ、祇園原遺跡では３間×６間や３間×７間といった大型の建物を中心にその周囲に竪穴住居が配置され、さらに竪穴住居の平面は円から不整形な円さらに方形へと変化する過程がみられるなどこの時期の集落構造を考える上で注目される。有田川左岸段丘上の平島遺跡[注6・32]では後期後半以後の竪穴住居、掘立柱建物、溝などが調査されており、溝は弧状に巡っている。市内では数少ない環濠集落である。会所宮遺跡では中期前半の集落遺構が発掘されている。

筑後川の南部域には長者原遺跡[注34]、上野遺跡[注8]、惣田遺跡[注35]などがある。盆地南西部の長者原遺跡では後期を中心に竪穴住居や溝が確認され、このうち溝は環濠集落を形成する環濠の一部と見られている。上野第１遺跡では前期末から中期前半の土坑や小児用甕棺墓など、惣田遺跡では後期の溝がそれぞれ調査されている。

盆地西部の大肥川沿いでは大肥条里中村地区[注36]や大肥条里大肥地区[注37]などで大規模な遺跡が発見されている。大肥条里中村地区では中期の木棺墓や祭祀土坑などが調査されており、大肥条里大肥地区では中期の成人用甕棺墓群や流路が発掘され、流路からは木鎧、三叉鍬などの木製品などが出土している。遺跡のある大肥川流域沿いでのこの時代の中心的集落である。

弥生時代後期から古墳時代にかけての墳墓の調査事例としては草場第二遺跡[注4]、朝日宮ノ原遺跡D地区[注38]、平島遺跡[注31b・39]、徳瀬遺跡[注26a]、牧原遺跡[注19]などがある。草場第二遺跡は方形周溝墓、大型成人用甕棺墓や壺棺墓、箱式石棺墓などの墳墓約300基が発見されており、市内では最も大規模な墓地群である。隣接する小迫辻原遺跡で発掘された居館遺構などと同時期であることから関連性が注目される。朝日宮ノ原遺跡D地区では後期の大型成人用甕棺墓や壺棺墓とともに土壙墓が、平島遺跡D区では後期の大型成人用甕棺墓４基がそれぞれ発掘されている。徳瀬遺跡では方形周溝墓５基、箱式石棺墓４基、土壙墓６基などが調査され、方形周溝墓の主体部である箱式石棺墓には「位至三公鏡」片が副葬されていた。牧原遺跡では方形周溝墓４基、箱式石棺墓１基、土壙墓２基などが発掘され、鉄鏃や刀子などの副葬品が出土している。このほか、上野第１遺跡[注40]や元宮原遺跡、草場遺跡[注42]などでも偶然に大型成人用甕棺墓が発見されている。

古墳時代

この時代の前期の代表的な集落遺跡には、居館跡が発見された小迫辻原遺跡[注22]がある。吹上遺跡に対峙する辻原台地上に位置し、弥生時代終わりの環濠３基や方形環濠遺構などの遺構で構成され、環濠集落から居館への変遷過程が知りうる遺跡である。近年、この遺跡周辺下の沖積地では尾部田遺跡[注11]や本村遺跡[注43]が調査され、先の小迫辻原遺跡の遺構群と同時期にあたる集落が確認されている。また、手崎遺跡[注9]や夕田遺跡[注44]では布留式土器を伴う竪穴や土壙が散発的に発掘されており、該期の集落例としては数少ない資料である。

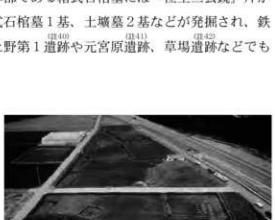


写真３）小迫辻原遺跡の３基並ぶ居館遺構

中期の遺跡には荻鶴遺跡や求来里平島遺跡[注45]がある。荻鶴遺跡は５世紀前半から中頃の鍛冶遺構とされる竪穴から鉄床石、鉄滓、高坏転用羽口、鍛造剥片などが出土し、またこの遺構付近からは関連する鉄鏃や手捏土器・石製円盤などの祭祀遺物が集中して発見されている。求来里平島遺跡では、須恵器を伴わない初現期のカマドを有する竪穴住居が検出されている。

後期の集落遺跡例は多く、平島遺跡や長迫遺跡[註46]では竪穴住居や掘立柱建物などが大規模に調査され、長迫遺跡では鍛冶を行っていたと考えられている鉄滓が出土している。さらに、西有田赤ハゲ遺跡[註47]では斜面を削りだして作られた道状遺構が、尾漕遺跡[註48]では河川と並行する道状遺構がそれぞれ調査され、三和教田遺跡B地点[註5]では水路の一部が発見されている。また、長者原遺跡[註49]では竪穴住居から製塩土器が出土している。このほかにも、大行事遺跡[註50]などの集落遺跡もある。

一方、墳墓であるがこれまでのところ日田盆地では古式の古墳や前方後円墳の存在は確認されていない。この時期の墓地遺跡の大半は前代の集落終焉後に墓地化したもので、それが継続して営まれているようである。前期から中期にかけての古墳としては小迫古墳[註51]、尾漕１・２号墳[註30・52]がある。小迫古墳は４世紀後半から５世紀前半の円墳と考えられ、主体部に粘土槨を採用したなかに木棺（割竹形木棺？）を安置し、珠文鏡、勾玉、管玉、小玉が副葬されていた。尾漕１・２号墳は前者が５世紀初め、後者２号墳が５世紀末の築造とされる。１号墳は組合式の箱式石棺を主体部とし人骨３体と素環頭太刀・刀子・櫛などが副葬されており、２号墳は単室の横穴式石室で須恵器のほか小玉が出土している。このほか、単室の竪穴式石室構造をもち、蛇行剣などが出土した姫塚古墳[註53]や仿製六獣鏡や仿製珠文鏡、玉類などが発見されている有田古墳[註54]、調査は行なわれていないが円筒埴輪が採集され径30mの円墳である薬師堂山古墳[註55]なども、この時期に築造された古墳であろう。また、大迫遺跡[註56]では５世紀後半から末の石蓋土壙墓、土壙墓、箱式石棺墓が調査され、３号土壙墓からは県内でも類例の少ない蕨手刀子が出土している。また赤迫遺跡や元宮遺跡[註57]では箱式石棺墓や石蓋土壙墓などが調査されている。

後期古墳の調査例は少ないが、朝日天神山古墳群[註58]では継続した確認調査が実施されている。長さ約30mの天満1号墳は社殿建設の際に仿製獣帯鏡・直刀・貝製雲珠などの馬具等の遺物が出土している。日田・玖珠地域最大の古墳である２号墳は長さ約60mの規模で、大型の平底壺などが出土している。この２号墳の調査当初は周溝が剣菱形に巡ると予想されたが、最終的にはこれまで考えられていた前方部と後円部が逆転し、周溝は前方後円形に巡ることが判明した。さらに、市内に４基残る装飾壁画を有する装飾古墳の調査も積極的に行なわれている。ガランドヤ古墳群[註60]は３基の古墳で構成され、６世紀後半の１号墳は赤と緑を使って複式構造の横穴式石室の玄室奥壁に円文、同心円文、舟、人物、鳥、馬などの多彩な装飾がなされている。須恵器、土師器、馬具、鉄鏃、玉類などが出土している。同じく６世紀後半の２号墳は石室の玄室奥壁に赤を下地に緑を使って同心円文、騎射像、連続山形文などの装飾が施されており、須恵器、珠文鏡、直刀、馬具、鉄鏃、玉類などが出土している。また、法恩寺山３号墳[註61]は独立した丘陵上に展開する７基の古墳群の一つで、６世紀後半築造の径約20mの円墳である。複式構造の横穴式石室の玄室奥壁と右側壁、袖石やまぐさ石などに赤を使って円文、同心円文、馬と人物、鳥などの装飾が描かれている。発掘調査では須恵器や馬具などが出土している。さらに、穴観音古墳[註64]は複式構造の横穴式石室の玄室奥壁と右側壁、前室の左右側壁に赤と緑を使って円文、同心円文、舟、両手を広げた人物、鳥などの装飾が施されており、なかでも、前室の同心円文は一部を掘り窪めるなど肥後地域の装飾技法の影響が指摘されている。この古墳は近年の調査で周溝が検出され、径約20mの円墳であったことが確認されている。

このほかに調査された後期古墳としては有田塚ケ原古墳[註30]や塔ノ本古墳[註31b]などがあり、平島横穴墓群[註63]や羽野横穴墓群[註64]、佐寺横穴墓群[註30]、北友田横穴墓群[註65]、小迫横穴墓群[註51]、夕田横穴墓群[註44]などの横穴墓群の発掘調査も実施されている。

古　代

この時期の代表的な遺跡としては小迫辻原遺跡[註66]、三和教田遺跡B地点[註5]、慈眼山瀬戸口遺跡[註67]、上野第1遺跡[註8]などがある。小迫辻原遺跡では「L」もしくは「コ」状に配置された掘立柱建物群や竪穴などが検出され、遺構からは「大領」と読める墨書土器などが数点出土している。日田の古代豪族日下部氏との関係が指摘される考古学資料である。三和教田遺跡B地点では7世紀後半から8世紀前半の掘立柱建物が調査され、この時期に伴うと考えられる円面硯が出土している。慈眼山瀬戸口遺跡では8世紀中頃から末の井戸や水汲場状遺構が確認され、これらの遺構からは「門」、「林」などと書かれた墨書土器、曲物、木製品、済櫛などが出土している。8世紀代の井戸例は太宰府でも少なく、横板井桁組の井戸枠は官人クラスの住居区に限られ、墨書土器などの遺物の出土から公的施設の存在が指摘されている。上野第1遺跡では8世紀前半から中頃の掘立柱建物、竪穴住居、土坑、道状遺構、粘土採掘土坑、水田などの遺構が調査された。これらの遺構からは「豊馬豊馬」と刻まれた石製品や転用硯などが出土している。遺構はこの時代の豪族館と考えられている。大肥条里吉竹地区[註16]では竪穴住居などが確認され、須恵器に朱墨で書かれた文字資料が出土している。

このほか長者原田迎遺跡、手崎遺跡[註68]、後迫遺跡[註9]、尾漕遺跡[註23a]、長迫遺跡[註31b・48]、石ヶ迫遺跡[註46]、馬形遺跡[註13]、クビリ遺跡[註69]などで掘立柱建物や竪穴住居などが調査されている。なかでも手崎遺跡や長迫遺跡、石ヶ迫遺跡では製塩土器が出土し、長者原田迎遺跡やクビリ遺跡では鉄滓が出土し鍛冶の存在が確認されている。また、馬形遺跡では市内では数少ない9世紀中頃から後半の2基の土壙墓が発見されている。1号墓は土師器坏に毛抜き、2号墓は木棺が据えられ副葬品に越州系青磁碗、須恵器坏、内黒土器、土師器坏のほか刀子が副葬されていた。

中　世

この時期の遺跡例はここ数年間で最も増えてきている。市内にはこの中世期の古文書が散逸などして残っておらず、日田市の中世史を語る上での多くの考古資料が蓄積されつつある。代表的な遺跡には慈眼山瀬戸口遺跡[註67]がある。この遺跡では溝、石垣状の石組、井戸、土坑状遺構などが調査され、多量の土師器、輸入陶磁器、摺鉢、火鉢、渡来銭、硯、石臼、高さ4㎝の十一面観音菩薩などが出土している。この遺跡は中世日田の豪族大蔵氏が本拠としていた場所にあたり、こうした発掘品や遺構は大蔵氏に関連する遺物や施設の一部とみられている。また、この遺跡の背後には同氏の山城が保存されており、各所に関連遺構をみることができ、一部ではあるが試掘調査が実施されている[註70]。また、近接した上ノ馬場遺跡[註71]でも関連すると考えられる遺構が検出されている。また、小迫辻原遺跡[註22]では12～15世紀の屋敷跡が発掘されており、長者原田迎遺跡[註68]、荻鶴遺跡[註45]、尾漕遺跡[註48]でも周囲を溝で囲む環溝屋敷が発見されている。このほか、朝日宮ノ原遺跡、森ノ元遺跡、会所宮遺跡、惣田遺跡[註35]、大行事遺跡[註50]などでは竪穴住居や掘立柱建物、土坑などが発掘されている。

一方、中世墓の調査事例も増加してきている。これまでの発掘例としては小迫辻原遺跡[註22-66]、朝日宮ノ原遺跡[註24]、小迫墳墓群[註51]、尾漕遺跡[註30]、手崎遺跡[註9]、慈眼山瀬戸口遺跡[註67]、寺内遺跡[註72]、徳瀬遺跡[註26-c]、森ノ元遺跡[註17]、尾漕遺跡[註48]、川原田遺跡[註50]などである。とくに朝日宮ノ原遺跡4号墓では炭敷きの上に木棺をすえ、被葬者の胸部には念珠を頭部の棺外には青磁碗・合子・湖州鏡・和銭・竹篦などの副葬品を納めていた。また尾漕遺跡A区2号墓には鉄鍋や300枚を越える六道銭などが副葬されていた。

また、中世の塚の調査も行なわれている。牧原遺跡内に残る牧原千人塚[註19]は、頂上に高さ約2.8mの四面に梵字が刻まれた角塔婆が立てられた15m×14m四方の高さが約2mの塚であることが確認

されている。このほか、市有形文化財の指定を受けている真和３年（1347）の銘が記された元大原宮の宝篋印塔の調査[註74]も行なわれ、造立年代を示す遺構や遺物が発見されている。元宮遺跡の調査[註58]では14世紀後半代の笠塔婆が構築されている塚が発掘されている。

近　世

この時期の調査例として牧原遺跡[註19]において小国街道の一部の発掘が行われ、後藤家墓地[註75]や祇園原遺跡[註31ａ]では近世墓、山口遺跡[註76]では近世建物の調査が行われている。

また、国史跡咸宜園跡の塾跡の調査[註77]や、江戸幕府が設置した永山布政所（代官所）の調査[註78]も行なわれ、次第に江戸時代の日田の様子が明らかになりつつある。

註１）橋昌信編『大分県旧石器時代遺跡分布図』別府大学付属博物館　1986年

註２）吉留秀敏「第二章　旧石器時代　第三節　大分の旧石器時代遺跡　六　筑後川上流域」『大分県史　先史篇Ⅰ』大分県　1983年

註３）表面採集され、遺物は日田市埋蔵文化財センターに保管されている。

註４）高橋徹編『草場第二遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（1）大分県教育委員会　1989年

註５）永田裕久編「三和教田遺跡Ｂ地点」『平成６年度（1994年）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　1996年

註６）行時志郎編『平島遺跡Ｂ区』日田市埋蔵文化財調査報告書第４集　日田市教育委員会　1991年

註７）土居和幸・行時志郎・永田裕久編『馬形遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第16集　日田市教育委員会　1995年

註８）田中裕介編『日田市高瀬遺跡群の調査３　上野第１遺跡』一般国道210号バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ　大分県教育委員会　2001年

註９）田中裕介編『日田市高瀬遺跡群の調査２　手崎遺跡・大部遺跡』一般国道210号バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ　大分県教育委員会　1998年

註10）土居和幸編『葛原遺跡』『平成８年度（1996年）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　1998年

註11）行時志郎編『日田条里上手地区Ⅱ・高瀬条里永平寺地区・尾部田遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第34集　日田市教育委員会　2001年

註12）土居和幸編『求来里平島遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第38集　日田市教育委員会　2002年

註13）行時志郎編『石ヶ迫遺跡』『平成７年度（1995年）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　1997年

註14）渡邊隆行編『大肥条里祝原地区』『平成11年度（1999年）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　2001年

註15）渡邊隆行編『大肥条里下河内地区』『平成12年度（2000年）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　2001年

註16）若杉竜太編『大肥条里吉竹地区』『平成13年度（2001年）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 2002年

註17）行時志郎編『森ノ元遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第13集　日田市教育委員会　1998年

註18）行時志郎編『有田塚ヶ原遺跡』『平成７年度（1995年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　1997年

註19）松下桂子編『牧原遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第12集　日田市教育委員会　1997年

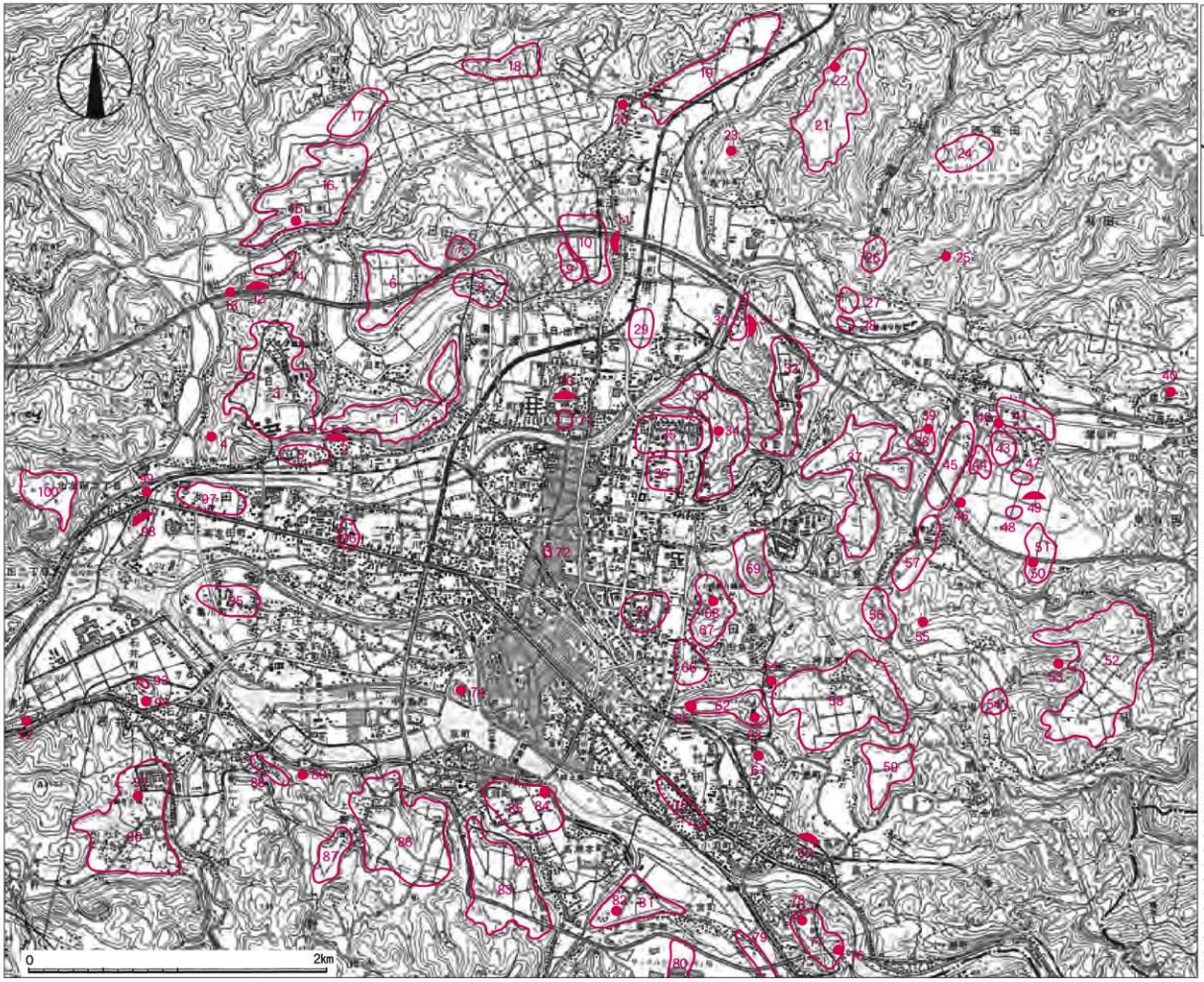
註20）吉田博嗣編『三和教田遺跡Ｃ地点』大分県文化財調査報告書第98輯　大分県教育委員会　1997年

註21）賀川光夫著『大分県の考古学』吉川弘文館　1971年

註22）田中祐介編『小迫辻原遺跡写真図版編』九州横断自動車道建設関係埋蔵文化財発掘調査報告書10 大分県教育委員会　1998年

田中裕介・土居和幸・行時志郎編『小迫辻原遺跡Ⅰ　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ区編』九州横断自動車道建設関係埋蔵文化財発掘調査報告書10・日田市埋蔵文化財調査報告書第15集　大分県・日田市教育委員会　1999年

土居和幸編『小迫辻原遺跡Ⅱ　Ｈ区編』日田市埋蔵文化財調査報告書第15集　日田市教育委員会　2000年



1. 吹上遺跡
2. 北友田横穴墓群
3. 朝日ヶ丘遺跡
4. 鳥越古墳
5. 今泉遺跡
6. 小迫辻原遺跡
7. 草場第2遺跡
8. 本村遺跡
9. 草場遺跡
10. 後迫遺跡
11. 羽野横穴墓群
12. 小迫横穴墓群
13. 小迫古墳
14. 尾部田遺跡
15. 朝日天神山(天満)古墳群
16. 朝日宮ノ原遺跡
17. 岩崎遺跡
18. 谷ノ久保遺跡
19. 三和救田遺跡
20. 用松中村古墳
21. 葛原遺跡
22. 葛原古墳
23. 礒ヶ迫古墳群
24. 西有田赤ハゲ遺跡
25. 有田古墳
26. 大行事遺跡
27. 内ノ下遺跡
28. 川原田遺跡
29. 日田条里上手地区
30. 夕田遺跡
31. 夕田横穴墓群
32. 佐寺原遺跡
33. 大蔵古城跡
34. 丸山古墳
35. 慈眼山瀬戸口遺跡
36. 上ノ馬場遺跡
37. 中尾原遺跡
38. 大迫遺跡
39. 中尾古墳群
40. 城山古墳
41. 平島遺跡
42. 平島古墳群
43. 祇園原遺跡
44. 長迫遺跡
45. 長漕遺跡
46. 尾漕古墳群
47. 石ヶ迫遺跡
48. クビリ遺跡
49. 平島横穴墓群
50. 有田塚ヶ原古墳群
51. 有田塚ヶ原遺跡
52. 町野原遺跡
53. 亀ノ甲古墳
54. 求来里平島遺跡
55. ガニタ古墳群
56. 馬形遺跡
57. 森ノ元遺跡
58. 元宮遺跡
59. 東寺原遺跡
60. 東寺横穴墓群
61. 法恩寺山古墳群
62. 会所山遺跡
63. 会所宮古墳
64. 後山古墳
65. 鳥羽塚古墳
66. 会所宮遺跡
67. 大波羅遺跡
68. 薬師寺山古墳
69. 赤迫遺跡
70. 月隈横穴墓群
71. 永山奈政所跡
72. 史跡咸宜園跡
73. 日田条里飛矢地区
74. 日隈古墳
75. 柳ノ本遺跡
76. 牧原千人塚(牧原遺跡)
77. 大部遺跡
78. 千人塚古墳群
79. 手崎遺跡
80. ロッ原遺跡
81. 惣田遺跡
82. 惣田塚古墳
83. 陣ヶ原遺跡
84. 姫塚古墳
85. 銭湯遺跡
86. 上野第1遺跡
87. 上野第2遺跡
88. 寺内遺跡
89. 護願寺古墳群
90. 長者原遺跡
91. 穴観音古墳
92. 津辻古墳群
93. 隈山遺跡
94. ガランドヤ古墳群
95. 徳瀬遺跡
96. 日田条里郷四郎地区
97. 荻鶴遺跡
98. 星隈横穴墓群
99. 三郎丸古墳
100. 穴原遺跡

第２図　日田盆地の主要遺跡分布図（1/25000）

註23) a友岡信彦編『後迫遺跡』九州横断自動車道建設関係埋蔵文化財発掘調査報告書18　大分県教育委員会　2001年
b若杉竜太編『後迫遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第35集　日田市教育委員会　2002年

註24) 昭和62年度に日田市教育委員会が調査を実施した。（A区）

註25) 永田裕久編「谷ノ久保遺跡」『平成６年度（1994年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　1996年

註26) a土居和幸・行時志郎・松下桂子編「徳瀬遺跡」『平成５年度(1993年度)日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　1995年
b稲村博文・玉永光洋編『徳瀬遺跡』大分県文化財調査報告書第94輯　大分県教育委員会　1996年
c吉田博嗣編『徳瀬遺跡第３次』日田市埋蔵文化財調査報告書第22集　日田市教育委員会　2000年

註27) 渡邉隆行編『今泉遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第37集　日田市教育委員会　2002年

註28) 若杉竜太、渡邉隆行編「本村遺跡２～４次」『平成11・12年度（2000・2001年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　2001・2002年

註29) 土居和幸編「葛原遺跡」『日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅲ』日田市教育委員会　1988年
永田裕久編「葛原遺跡」『平成６年度（1994年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　1996年

註30) 村上久和・友丘信彦・染谷和徳編『佐寺原遺跡・尾溝遺跡群・有田塚ヶ原古墳群』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（９）大分県教育委員会　1998年

註31) a土居和幸編「祇園原遺跡」『平成８年度（1996年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　1998年
b若杉竜太編『平島遺跡Ｄ地点、塔ノ本古墳、祇園原遺跡２次、長迫遺跡Ｃ地点、長迫遺跡Ｄ地点、尾溝遺跡６次』日田市埋蔵文化財調査報告書第28集　日田市教育委員会　2001年

註32) 土居和幸編『平島遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第３集　日田市教育委員会　1990年

註33) 土居和幸・行時志郎・永田裕久編『会所宮遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第11集　日田市教育委員会　1996年

註34) 土居和幸編「長者原遺跡」『日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅰ』日田市教育委員会　1986年
渡邉隆行編「長者原遺跡」『平成12年度（2001年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　2002年

註35) 土居和幸・行時志郎編『惣田遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第８集　日田市教育委員会　1994年

註36) 若杉竜太編「大肥条里中村地区」『平成10年度（1998年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　2000年

註37) 平成14年度に日田市教育委員会が調査を実施した。

註38) 土居和幸編「朝日宮ノ原遺跡」『日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅳ』日田市教育委員会　1989年

註39) 土居和幸編「平島遺跡」『平成９年度（1997年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　1999年

註40) 工事中に発見されている。

註41) 農作業中に発見されている。

註42) 農作業中に発見されている。

註43) 渡邉隆行、若杉竜太編「本村遺跡」『平成12・13年度（2000・2001年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　2000・2001年

註44) 友岡信彦編『夕田遺跡群』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（14）大分県教育委員会　1999年

註45) 行時志郎編『鉄鶴遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第９集　日田市教育委員会　1995年

註46) 土居和幸、若杉竜太編「長迫遺跡」『平成８～10年度（1996～1998年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　1998～2000年

註47) 行時志郎編『西有田赤ハゲ遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第７集　日田市教育委員会　1992年

註48) 行時志郎編『尾溝遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第30集　日田市教育委員会　2001年

註49) 土居和幸編「長者原遺跡」『日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅱ』日田市教育委員会　1987年

註50) 渡邉隆行『内ノ下遺跡・大行事遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第33集　日田市教育委員会　2002年

註51) 小柳和宏編『小迫墳墓群』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（3）大分県教育委員会　1995年

註52) 土居和幸編「尾漕古墳」『平成8・9年度（1996・1997年）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　1998・1999年

註53) 土居和幸編「姫塚古墳」『日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅲ』日田市教育委員会　1988年

註54) 小田富士雄「古代の日田-日田盆地の考古学」『九州文化史研究所紀要』第15号　1970年

註55) 後藤宗俊「第3章古墳時代 2．日田地方の古式古墳」『日田市史』日田市　1991年

註56) 村上久和・友岡信彦・染谷和徳編『日田条里遺跡群・佐寺横穴墓群・大迫遺跡・白岩遺跡・下綾垣遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（6）大分県教育委員会　1997年

註57) 土居和幸・行時志郎・松下桂子編「赤迫遺跡」『平成5年度（1993年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　1995年

土居和幸編「赤迫遺跡」『平成8年（1996年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　1998年

註58) 若杉竜太編『元宮遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書書第25集　2000年

註59) 土居和幸、若杉竜太、渡邊隆行編「天満古墳群」『平成9～11年度（1997～1999年）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　1999～2001年

土居和幸・下村智編『吹上遺跡・天満古墳-範囲確認調査に伴う概要報告』日田市教育委員会　2000年

平成14年度に日田市教育委員会が最終調査を実施し、古墳名を天満古墳から朝日天神山古墳と改めている。

註60) 小柳和宏編『ガランドヤ古墳群』日田市教育委員会　1986年

註61) 賀川光夫編『法恩寺古墳』日田市教育委員会　1959年

註62) 渋谷忠章・村上久和・小柳和宏編『大分の装飾古墳』大分県文化財調査報告書第92輯　大分県教育委員会　1995年

若杉竜太編『穴観音古墳』「平成13年度（2001年）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　2002年

註63) 行時志郎編「平島横穴墓群」『平成7年（1995年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　1997年

註64) 渋谷忠章・吉竹学編『日田市羽野横穴墓群発掘調査概報』大分県教育委員会　1985年

註65) 玉永光洋編『北友田横穴』大分県教育委員会　1993年

註66) 行時志郎編『小迫辻原遺跡発掘調査概報』日田市教育委員会　1990年

註67) 坂本嘉弘編『慈眼山瀬戸口遺跡』大分県教育委員会　1992年

註68) 行時志郎編『長者原田迎遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第5集　日田市教育委員会　1992年

註69) 行時志郎編「ケビリ遺跡」『平成7年（1995年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　1997年

註70) 土居和幸・行時志郎編「慈眼山遺跡」『平成4年度（1992年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　1994年

註71) 行時志郎編『上ノ馬場遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第23集　日田市教育委員会　2000年

註72) 高橋徹・山本悲弘・松本康弘編『日田市高瀬遺跡群の調査4　寺内遺跡・上野第2遺跡』一般国道210号バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書4』大分県教育委員会　2002年

註73) 吉田博嗣編『川原田遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第32集　日田市教育委員会　2001年

註74) 渡邊隆行編「元大原宮宝篋印塔の修理・移築」『平成12年（2000年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　2001年

註75) 田中裕介編『日田市高瀬遺跡群の調査1　誠和神社裏遺跡・後藤家墓地・陣ヶ原辻原遺跡・高瀬深ノ田遺跡』一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書特　大分県教育委員会　1995年

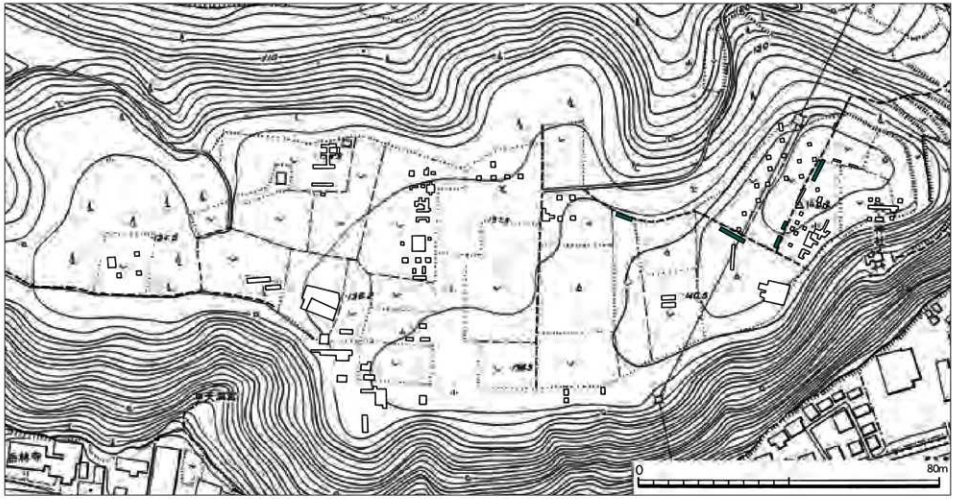
註76) 山路康弘編『山口遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第20集　日田市教育委員会　2000年

註77) 永田裕久、行時志郎、土居和幸、若杉竜太、渡邊隆行編「史跡咸宜園跡」『平成6～11年度（1994～1999）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　1996～2001年

註78) 平成14年度に日田市教育委員会が調査を実施した。

第３章　３次調査の記録

写真１）吹上原台地空中写真（白印は調査位置）



第１図　３次調査の位置（1/2500）　　３次

第１節　調査の概要（第１図）

３次調査は農道拡幅整備工事に先立つ事前の確認調査として実施した。その対象範囲は台地東側の延長約400mで、整備工事にあたっては掘削場所が少ないこともあって、崖面近くの作業上危険な場所や樹木が植栽されて調査不可能な場所、あるいは現在農道として利用されている場所は調査の対象外とした。

調査は地権者の同意を得て昭和60年11月18日より開始し、調査区は東側から１～５トレンチと呼ぶこととした。調査では遺構面までの深さが浅いと想定し、手堀りで表土を除去し、遺構検出作業、遺構の掘り下げ、遺構実測、写真撮影等の各作業を行い、翌年１月25日には埋め戻しを行い全ての作業を終了した。

各トレンチの３次調査で検出した遺構総数は竪穴住居１軒、貯蔵穴４基、土坑４基、ピット21である。こうした調査内容の一部はすでに概報にまとめているが、調査後10年以上の経過が経ってしまい今回の報告に合わせて再度見直しや追加整理によって内容等に変更が生じたため、本報告をもって正式な報告とする。

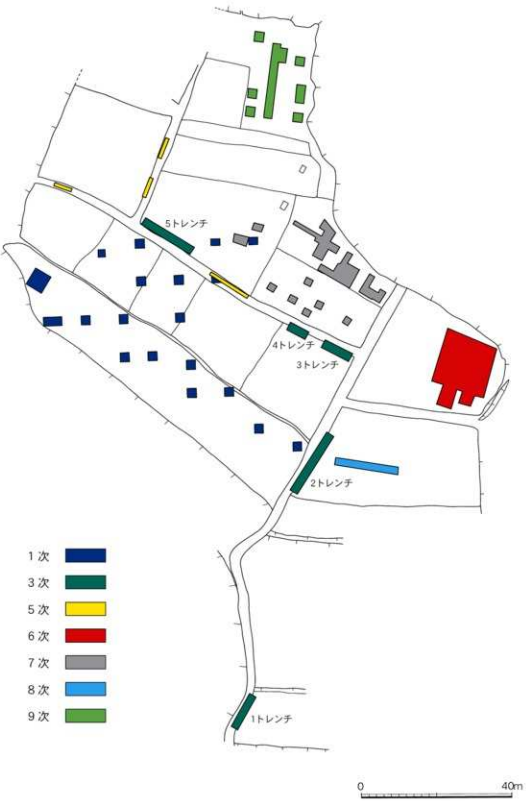
３次調査の報告に関する平成14年度の組織体制は、以下のとおりである。

調査責任者　後藤元晴（日田市教育委員会教育長）
調査事務　後藤　清（同文化課長）、田中伸幸（同文化課文化財係長兼埋蔵文化財係長）、園田恭一郎（同文化課主査）
報告書担当　土居和幸（同文化課主査）
整理作業員　宇野富子、梶原ヒトエ、川原君子、安元百合、和田ケイ子
協力者　行時志郎（現、日田市経済部農政課主任）、若杉竜太（同文化課主事）、渡邊隆行（同文化課主事）

なお、報告書に掲載した挿図・図版に携わった関係者は、次のとおりである。

遺物実測　土居和幸
製　　図　土居和幸、藤野美音（同文化課調査補助員）、高木麻奈美（有限会社雅企画）
遺物写真　長谷川正美（有限会社雅企画）

写真２）３次調査参加者



第２図　３次調査区の位置図（1/500）

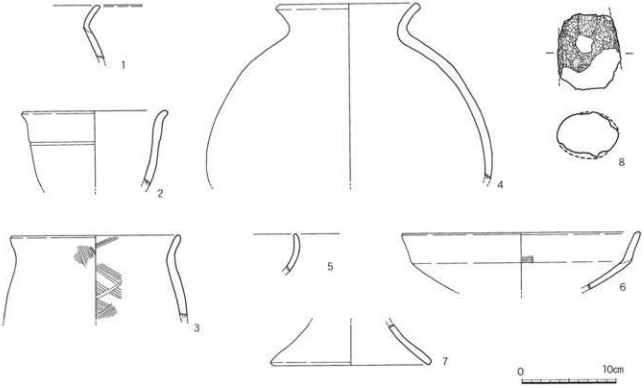
第２節　調査の内容

１．１トレンチの調査（第２・３図）

このトレンチは農道建設予定地に２ｍ×10ｍの調査区を設定して行なった。トレンチは台地北側の崖面に近く、地山面は１ｍほど掘り下げて確認したが、後世の削平を受けていたこともあって遺構の検出までにはいたらなかった。トレンチ地山面は地形に沿うように、トレンチ南側から北側に向って緩やかな傾斜が認められた。地山は黄褐色土を呈し、表土から地山までは一層で、土器片や石器などの遺物が混入していた。以下、周辺およびトレンチ内から出土した遺物を掲載する。

１～３は甕である。１は器壁が薄く、口縁部は「く」字状に外反する。外面はタタキ後ナデ調整が施されている。布留式甕である。２は胴部から口縁部までほぼ直線的に伸び、口縁部が小さく如意状に外反する小型の甕である。口縁下に一条の沈線を巡らせる。復原口径12.4cmを測る。胎土に金雲母を含むことから搬入品である。３は長胴甕で、口縁部は小さく、「く」字状に外反する。内外面ともハケ仕上げ。復原口径17.8cmを測る。４は壺で、頸部は細く、口縁部は短く、「く」字状に外反する。復原口径15.1cmを測る。５は碗である。口縁端部は丸く仕上げられ、内湾する。６は高坏の坏部で、口縁部は直立する。復原口径25.2cm。７は高坏の脚部であろう。８は石斧である。残存部には敲打痕が残り、研磨の跡は認められない。

写真３）１トレンチ調査作業風景



第３図　１トレンチ出土土器・石器実測図（1/4・1/3）

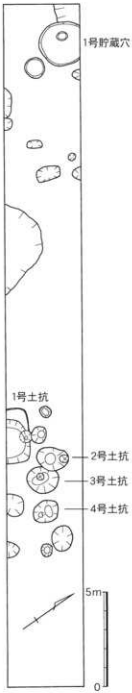
2．2トレンチの調査（第4・5図）

1トレンチ東側約60mの地点の農道建設予定地に2m×18mのトレンチを設定した。このトレンチの場所は吹上原台地にあって西側の比較的平坦な場所から東側の高い場所へと上がっていく傾斜地にあたる。こうした地形のためトレンチ西側が低く、東側が高くなっており、その比高差は約80cmを測る。このため東側は表土から遺構面までは約20cmと浅かったが、西側は土砂の堆積が厚く、また後世の攪乱層が広がっていたため遺構検出作業には時間を要した。

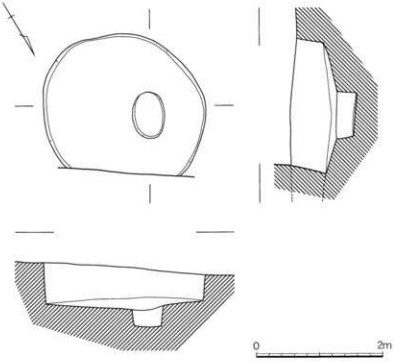
このトレンチでの遺構の分布状況については第5図に示すとおり全体的に希薄で、トレンチの西側と東側にまとまるように検出した。また、表面での土器の散布は少なかったものの、攪乱が著しいトレンチ西側からは表土層中に多くの土器片の混入が認められた。地山土は東側が暗茶色土で、西側に向うにつれて攪乱層下は黄褐色土を呈していた。この2トレンチで確認した遺構は貯蔵穴1基、土坑4基、ピット7である。

なお、以下に各遺構毎にまとめることとするが、今回の本報告ではすでに概要報告（昭和60年度、市教委発行の『日田地区遺跡群発掘調査概報⑷』）と異なる遺構名称を用いていたので、変更分についてのみ、下記のとおり示すこととする。

概　報	本報告	概　報	本報告
2号貯蔵穴	→2号土坑	2号土坑	→3号土坑
1号土坑	→3号土坑	3号土坑	→4号土坑



第4図　2トレンチ遺構配置図（1/100）

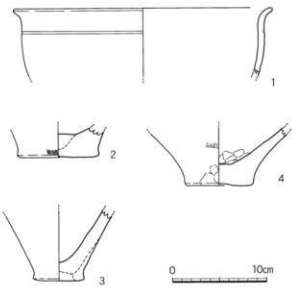


第5図　2トレンチ1号貯蔵穴実測図（1/30）

（1）貯蔵穴

1号貯蔵穴（第5図、第6図1～4、第10図5、図版1・2・11）

この貯蔵穴はトレンチの北側隅で検出し、その一部はトレンチの東側の外へと広がる。平面形はほぼ円形をなし、その規模は径が1m25cm、深さが37cmを測る。床面には東西長が37cm、南北長が25cm、深さが17cmの楕円形の柱穴を有する。この貯蔵穴の存在する周辺は農作物による攪乱を受けていた場所でもあり、遺構上面の削平が著しく、とくに貯蔵穴北側は攪乱が顕著であった。貯蔵穴の壁面はほぼ垂直に立ち上がっており、本来は袋状をなしていたと思われる。埋土は上部に攪乱層の混入が認められたが、攪乱層下には地山土をブロック状に含む茶褐色土が堆積しており基本的には一層である。遺物の出土量は少なく、上部攪乱層と床面付近から土器片や石器が出土した。



第6図　2トレンチ1号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）

遺物は図示可能なものをピックアップしたが、出土した土器の残存状況は悪く調整等の不明瞭な土器が多い。1は板付Ⅱ式の甕の口縁部で、復原口径27.4cmを測る。口縁部は如意状に外反し、口縁部下には一条の沈線を巡らせている。2～4は甕の底部である。2は外に張り出す平底で、底径6.8cmを測る。3も外に張り出す平底をなし、胴部へは直線的に伸びる。復原底径5.4cmを測る。4は上げ底で、復原底径8.6cmを測る。

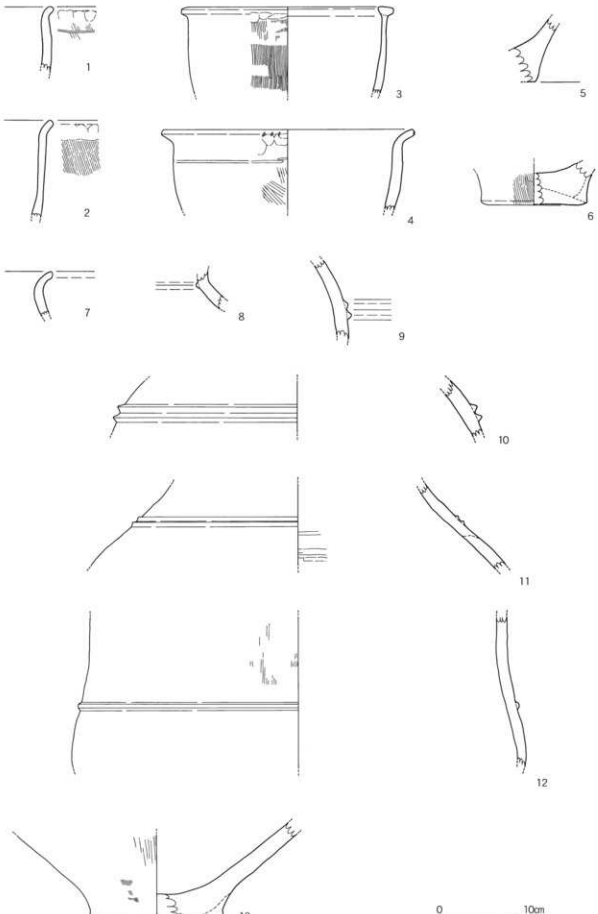
石器は1点出土している。第10図の5は磨石で、両面中央付近に研磨痕が残る。また、裏面中央部や側面の一部にもわずかに敲打痕が認められる。

（2）土坑

総数4基の土坑を検出したが、いずれも近い場所に認められ、切り合い関係にあるものもある。これら土坑の平面形は楕円形や隅丸方形もしくは隅丸長方形プランをなし、なかには二段掘りのものも見受けられる。遺構の残存状況は決して良いとはいえない。これら4基のうち、1号土坑からはまとまった遺物が出土している。

1号土坑（第7図、第8図1～13、図版2・3・11）

この土坑はトレンチ中央よりやや東側で検出した。また、土坑の南側壁面ではピットとの重複が認められる。土坑の平面形は隅丸方形もしくは隅丸長方形を呈すると考えられ、その半分はトレンチ外へと広がっている。土坑北側は浅い二段掘りをなしており、規模は東西長が1m41cm、南北長が70cm＋α、深さが40cmを測る。土坑内の埋土状況は断面観察によれば大きく三層に分けられ、上から茶褐色土（Ⅰ層）、黒色土（Ⅱ層）、灰褐色土（Ⅲ層）、地山土をブロック状に含む黄褐色土（Ⅳ層）の順に堆積しており、Ⅰ・Ⅲ層中にブロック状に黒色土（Ⅱ層）が認められた。このうち、



第８図　２トレンチ１号土坑出土土器実測図（1/4）

系の壺である。９は胴部最大径の上位にシャープな「M」字状突帯を巡らせる。10は厚みがあり、肩部に「M」字状突帯を巡らせている。11は肩部に小さな「M」字状突帯を巡らせる。12は直立気味の胴部上部に一条の「コ」字状突帯を巡らせている。突帯による復原のため、全体的に内傾する可能性もある。13は厚みのある底部で、外に張り出す平底をなす。１・８の土器の胎土には金雲母を含むことから搬入品で、13の土器は色調や焼成から搬入品であろう。

２号土坑（第７図、第９図１～３、図版３・11）

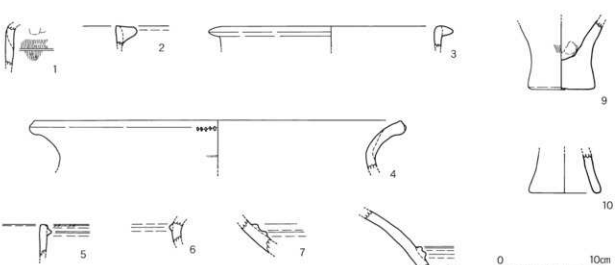
この土坑は１号土坑のすぐ東側で検出し、３号土坑を切る。平面形は楕円形をなし、規模は東西長が84㎝、南北長が61㎝、深さが19㎝を測る。埋土は大きく二層に分けられ、上層には黒色土、下層には地山土（黄色粘土）をブロック状に顕著に含む黒褐色土が堆積していた。遺物は下層に認められ、同じく炭化物も含んでいた。遺物の出土量は全体的に少なく、図示した土器のほかに黒曜石製の石器なども出土している。

図示できる遺物は少ない。１～３は甕である。１は口縁部上部を欠くが、形状からして口縁部が如意状に外反する板付Ⅱ式の甕であろう。口縁部下には一条の沈線を巡らせている。２・３は三角状の突帯を張付けた亀ノ甲タイプの甕である。口縁部は「L」字状をなす。２は厚みをもち、３は口縁端部が尖り気味で、復元口径25.8㎝を測る。

３号土坑（第７図、第９図４～８、図版３・11）

この土坑は２号土坑に切られている。平面形は不整形な円形をなし、規模は径が約80㎝、深さが42㎝を測る。埋土の堆積状況は一層で、地山土（黄色粘土）をブロック状に含む黒褐色土を呈する。この層には少量の土器片のほかに炭化物も含んでいる。

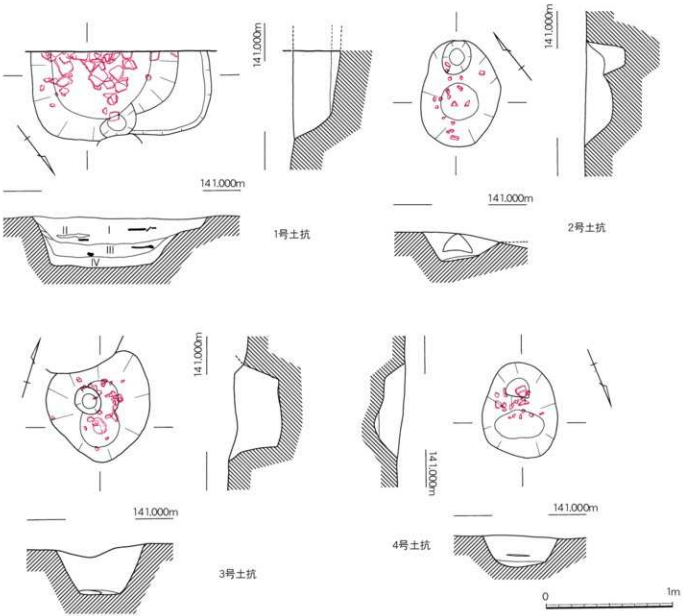
図示できる遺物は少ない。５は東九州の下城式土器系統の甕で、口縁部はほぼ垂直に直立し、口縁端部外面には小さな刻目が施されている。また端部下半には三角突帯を一条巡らせている。４・６～８は壺である。４は口縁部が「く」字状に大きく外反する。端部付近は肥厚で、端部上半部は跳



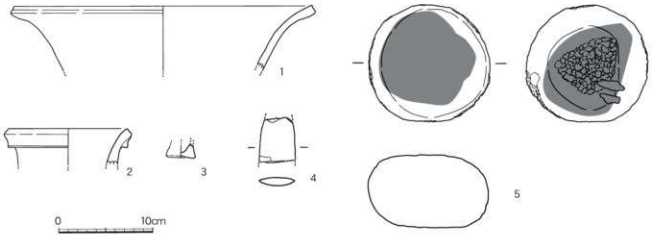
第９図　２トレンチ２～４号土坑出土土器実測図（1/4）

土坑上面から中程にかけてのⅠ～Ⅲ層中に遺物が集中して認められ、さらにこれらの層中には多くの炭火物を含んでいる。

土器片は大きいものが目立つが、完形品と成り得る土器はない。１～６は甕である。１～２・４は口縁部が如意状に外反する板付Ⅱ式の甕である。１は口縁部が短く、小さく外反する。端部は丸みを持ち、胴部はやや厚手で、口縁部下には一条の沈線を巡らせている。沈線のすぐ下に胴部最大径がある。２は口縁端部のつくりがシャープで、胴部は直線的に伸びている。外面にはハケを残す。４は口縁部が大きく外反し、口縁端部下半には小さな刻目が施されている。口縁部下には一条の沈線を巡らせており、胴部最大径が口縁部下位にある。胴部外面にはススが付着する。復原口径26.2を測る。３は口縁が肥厚で、「T」字状をなし、胴部は直線的である。復原口径22.4cmを測る。５・６は底部である。５・６とも厚みをもち、６は平底をなす。７～13は壺である。７は小型の壺の口縁部で、短く「く」字状に外反する。８は頸部内面に丸みのある一条の突帯を巡らせている。豊前



第７図　２トレンチ１～４号土坑実測図（1/30）



第10図　2トレンチ出土土器（1/4）と出土石器（1/3）

ね上げ状をなし、丸みを持つ端部下半には刻目が施されている。復原口径38.6cmを測る。6は頸部内面に小さな一条の三角突帯を巡らせている。豊前系の壺である。7は肩部に「M」字状突帯を巡らせている。8は胴部上面に丸みをもつ「M」字状突帯を巡らせている。7は石英を多く含んでおり、搬入品であろう。

4号土坑（第7図、第9図9・10、図版3・12）

この土坑は3号土坑のすぐ南側で検出した。平面形は楕円形をなし、東側は二段掘りを呈する。規模は東西長が74cm、南北長が59cm、深さが25cmを測る。埋土の堆積状況は3号土坑と同様に地山土（黄色粘土）をブロック状に含む黒褐色土を呈する一層である。この層中には少量の土器片のほかに、炭化物が含まれている。

図示可能な遺物を2点掲載した。9は甕の底部で、外に張り出し厚みを持つ。底はほぼ平坦な平底をなしている。復原底径7cmを測る。10は小型の器台で、復原底径10cmを測る。

（3）トレンチ内出土遺物（第10図1～4、図版12）

この2トレンチからは農作物の攪乱によって、トレンチ西側を中心に土器片等が多く出土している。掲載する土器のほかには、姫島産黒曜石の剥片などが出土している。

1・2は壺である。1は広口壺の口縁部である。口縁部は肩部から外傾しながら直線的に伸びて、肥厚な口縁部上面では大きく外反する。復原口径32.2cmを測る。2は小型の長頸壺の口縁部で、豊前地域の土器である。小さく外反する口縁下には垂れ下がり気味の一条の三角突帯を張付け巡らせる。復原口径12.4cmを測る。3はミニチュア土器の底部である。底径3.1cmを測る。1は中期後半、2は中期末頃と考えられる。

4ははっきりしないが石剣の一部であろう。先端部や基部などを欠く。研磨痕跡も残らないほどに磨耗が極度に著しく、稜も明瞭に残っていない。

3．3トレンチの調査（第11図）

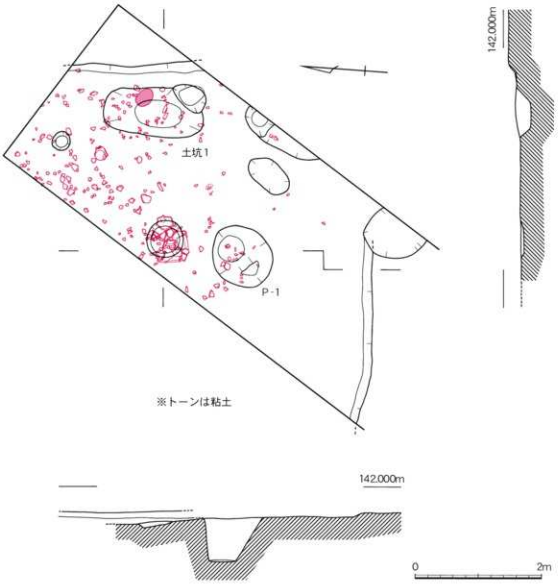
２トレンチ東側約20mの地点の農道建設予定地に、２m×８mのトレンチを設定した。このトレンチの場所は吹上台地にあって東側の最も高い場所にあたる。このため畑地の耕作による削平も著しく、遺構の保存状態も決して良好ではなかった。遺構は調査区の北側で竪穴住居１軒を、南側で貯蔵穴１基をそれぞれ確認した程度で、遺構の密度は低い。このトレンチでの地山は暗茶色土であった。

第11図　3トレンチ遺構配置図(1/100)

（1）竪穴住居

1号竪穴住居（第11～13図、図版４～６・12）

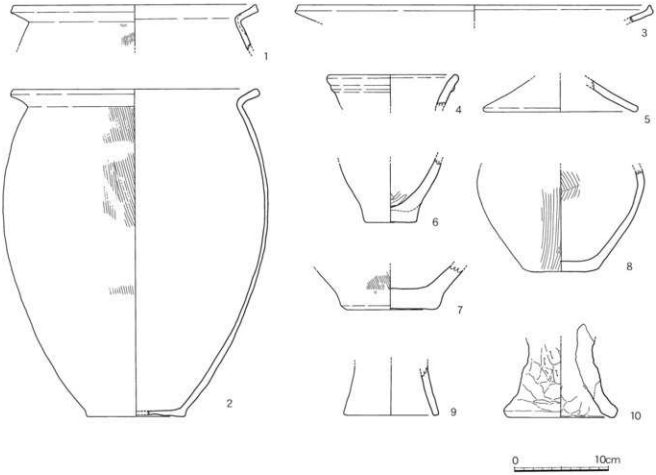
この住居では南側と東側の２つの壁面を検出した。トレンチ調査のため全体プランは十分に確認できないが、方形もしくは長方形プランと考



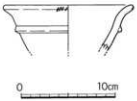
第12図　3トレンチ１号竪穴住居実測図（1/40）

えられる。竪穴住居の規模は東西長が２m40cm＋α、南北長が２m60cm＋α、深さが30cmを測る。大きさからＰ－１が主柱穴の一部と、土坑１が南面土坑と推定される。この南面土坑からは粘土ブロック塊が検出されている。埋土は大きく三層に分けられ、上面から暗茶褐色土（Ⅰ層）、黒褐色土（Ⅱ層）、地山土を含む灰褐色土（Ⅲ層）である。Ⅱ層は炭化層で、またⅢ層下部には炭化ブロック層がそれぞれ見受けられる。竪穴住居の床面は貼床をなし、遺物は比較的まとまって出土している。

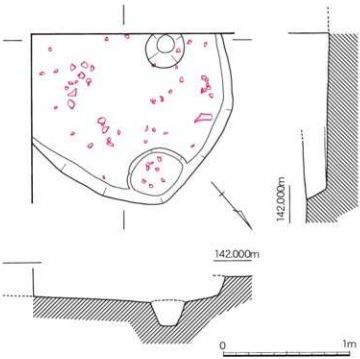
竪穴住居の床面近くから出土した土器を掲載する。１～３は甕である。１は口縁部が「く」字状に外反し、口縁端部を跳ね上げている。外面はハケによる仕上げ。復原口径25.8cmを測る。２も口縁部が「く」字状に外反するが、口縁端部は長く跳ね上げている。復原口径38cmを測る。３は口縁部が肥厚で、「く」字状に大きく外反する。胴部最大径は胴部の上位にあり、胴部は薄く成形している。底部はやや上げ底気味の平底をなす。外面はハケによる仕上げ。口径26.3cm、底径10.4cm、器高34.7cmを測る。４は豊前系の長頸壺の口縁部である。口縁部は緩やかに外傾し、口縁端部は丸味を帯びている。口縁部下には小さな丸みを持つ突帯を巡らせている。５は蓋で、復原口径16.4cmを測る。６は小さな壺の底部である。平底をなし、復原底径5.6cmを測る。７は厚みをもつ。外面にハケの痕跡を残す。復原底径９cmを測る。８は短頸もしくは無頸壺であろう。口縁部を欠く。底部は平底をなし、底径7.8cmを測る。内外面ともにハケ仕上げ。９・10は器台である。９は器壁が厚く、焼成は不良である。復原底径12cmを測る。10は復原底径10cmを測る。



第13図　３トレンチ１号竪穴住居出土土器実測図（1/4）



第14図　3トレンチピット1
出土土器実測図（1/4）



第15図　3トレンチ1号貯蔵穴実測図（1/30）

（2）貯蔵穴

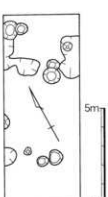
1号貯蔵穴（第15図、図版7・12）

この貯蔵穴はトレンチの南側隅で検出し、一部はトレンチの外へと広がる。平面形はほぼ円形をなし、その規模は径が1m70cm、深さが20cmを測る。床面には小ピットが存在するものの、この貯蔵穴に伴うものかどうかはっきりとはしない。埋土は一層で、黄褐色の地山土をブロック状に含む灰褐色土である。貯蔵穴からの出土遺物は少なく、床面付近に弥生土器小片がわずかに残っていた程度ある。

（3）ピット

ピット1（第12・14図、図版12）

1号竪穴住居内で検出したピットで、規模は径が65cm、深さ7cmを測る。このピット内からは小型の甕が出土している。甕は底部付近は欠くものの胴部は外傾し、口縁部は如意状に外反する。口縁端部下半には細い刻目が施されており、その下位には垂れ気味の一条の三角突帯を巡らせている。復原口径は13.4cmを測る。

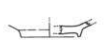


第16図　4トレンチ
遺構配置図（1/100）

4．4トレンチの調査（第16・17図、図版8）

3トレンチ北側約5mの地点の農道建設予定地に、2m×5mのトレンチを設定した。このトレンチも3トレンチと同様に畑地の耕作による削平が著しかった。遺構は第16図に示すとおり、ピット9個を確認したのみで遺構の密度は低いといえる。しかも、トレンチ内から出土した遺物のほとんどが弥生土器小片で、その数量は少なく図示できるものはほとんどない。遺構面の地山は暗茶褐色土である。

このトレンチ内から出土した遺物を1点掲載する。1は青磁椀の底部である。底部の高台は削りだし、無釉とする。復原底径6.3cmを測る。



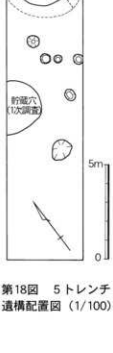
第17図　4トレンチ
出土土器実測図（1/4）

5．5トレンチの調査（第18図）

このトレンチは4トレンチ北側約25mの地点の農道建設予定地に2m×15mの調査区として設定した。このトレンチでは畑地の耕作による削平は余り受けていなかった。検出遺構は第18図に示すとおり、散発的な状況で遺構の密度は薄く、部分的に撹乱が見受けられた。表土から地山面までは約30cmと浅く、表土層中からの土器片などの遺物は余り認められなかった。検出した遺構は貯蔵穴3基、ピット6個で、このうち貯蔵穴1基は第1次調査において調査済みであったので、今回は対象外とした。このトレンチの地山は暗茶色土であった。

（1）貯蔵穴

検出した2基の貯蔵穴はいずれも袋状貯蔵穴である。トレンチ内のすでに調査済みの1次調査分も袋状貯蔵穴であり、類似した貯蔵穴が分布する。2基の貯蔵穴については、当初の想定よりも深く、また時間もなかったことから、両貯蔵穴ともベルト壊さずそのままにして埋め戻しを行なった。



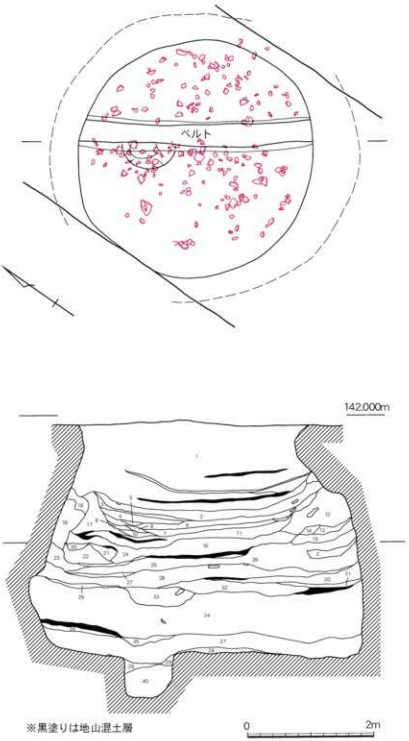
第18図　5トレンチ遺構配置図（1/100）

1号貯蔵穴（第18～21図、第24図2～8、10　図版9・10・12～15）

この貯蔵穴は西側の一部がトレンチ外へと広がるが、平面形は円形をなすと考えられる。断面は袋状をなし、上部から中程は壁面の崩落が見受けられる。床面中央やや北側には径56cm、深さ41cmを測るピットが伴う。貯蔵穴の規模は検出面で径が2m50cm、深さが2m45cm、床面の径が3m36cmを測る。埋土は大きく4層に分けられ、貯蔵穴内からは多量の土器が出土している。なお、遺物の取り上げは層毎に行ったが、整理段階で混在してしまい、中層以下の遺物は明記することができない。

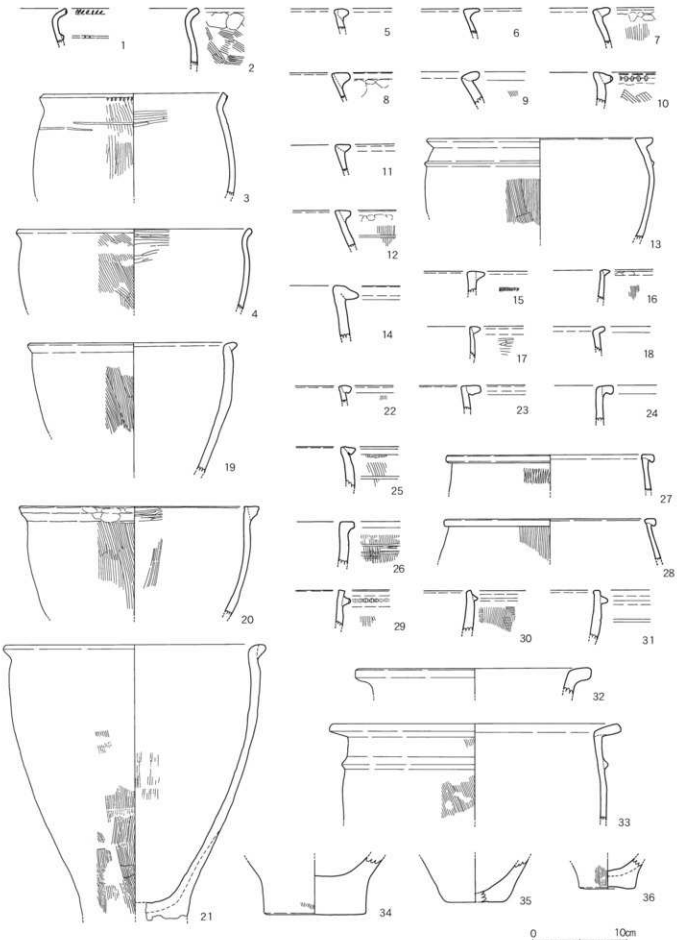
第20図1～36は甕である。1～4は口縁部が如意形に外反する板付Ⅱ式の甕である。1は口縁端部下半に刻目を施す。2は口縁下に三角突帯を巡らせ、口縁端部と突帯に刻目を施す。3は口縁部下に一条の沈線を巡らす。復原口径19.8cmを測る。4は口縁端部が丸みをもつ。復原口径24.4cmを測る。6～28は口縁部が「L」字状をなす土器である。5～14は口縁部を三角状に張付け、内傾する。5は口縁部が丸みをもつ。6は口縁部の作りが薄く、端部がシャープである。7・9は端部が上方を向く。12は口縁部下に一条の沈線を巡らせる。13は口縁部下に三角突帯を巡らせる。口径23.8cmを測る。10・14は口縁端部が下がり、10は口縁端部に刻目を施している。15～17は口縁部を三角状に張付け、直立もしくは外傾する。16・17は薄く仕上げられている。18～21・26は口縁部に丸みを持つ三角もしくは「コ」字状に張付け、口縁端部は水平または上方に向き、直立もしくは内傾する。19は口縁部が短く、胴部は厚みを持つ。口径22.1cmを測る。20は「コ」又は三角状突帯で、口径25.2cmを測る。21は口縁部が肥厚し、復原口径27.8cmを測る。26は口縁部下に一条の沈線を巡らせる。22～25・27・28は口縁部に三角もしくは「コ」字状に張付け、接合下部に凹みが残り、直立もしくは内傾する。25は口縁部下に一条の沈線を巡らせる。27は復元口径22cmを測る。28は復原口

径22.4cmを測る。上層出土。29～31は口縁下に一条の突帯を巡らせる下城式土器である。29はシャープな突帯端部に刻目を施す。31は口縁下に一条の沈線を巡らせる。32・33は肥厚な口縁部が「く」字状に外反する。32は復元口径24.9　を測る。33は口縁部下に一条の三角突帯を巡らせている。復元口径33cmを測る。上層出土。32～34は底部である。32は厚みのある平底をなす。底径11.2cmを測る。35は丸みを持つ平底をなす。復原底径6.6cmを測る。36は小型で、上げ底をなす。復原底

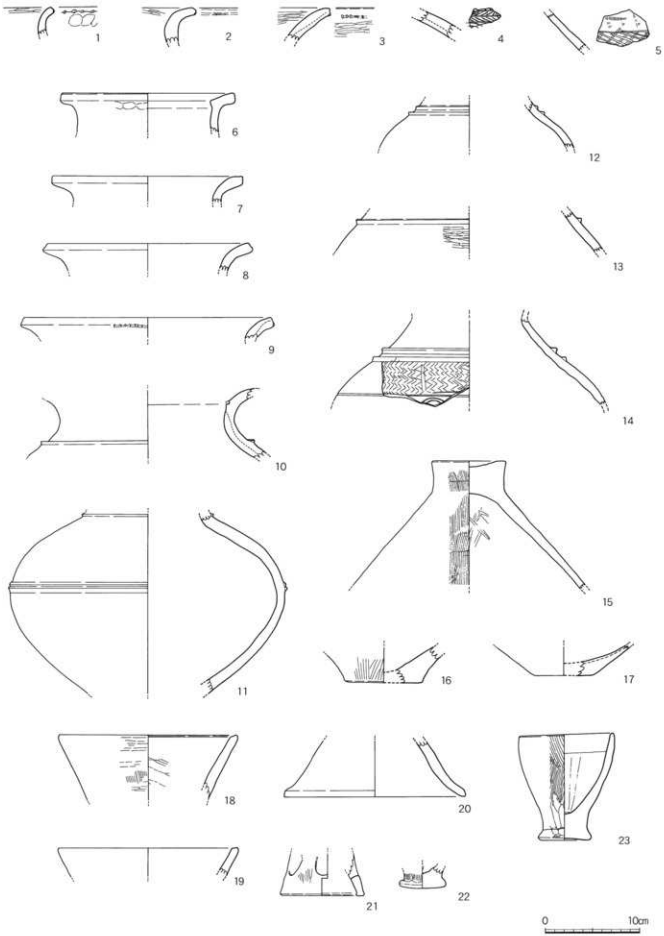


(層　序)
上　層　1層　茶褐色(地山土含む)
中　層　2層　暗茶褐色(炭化物を多く含む)
3層　暗茶褐色粘質土
4層　明灰茶褐色土
5層　暗茶褐色土
6層　暗茶褐色粘質土
7層　明黄白色土
8層　暗茶褐色土
9層　明茶褐色粘質土(粘性強)
10層　明茶褐色粘質土(粘性弱)
11層　明白色粘質土
12層　茶褐色粘質土
13層　灰褐色粘質土
14層　明灰褐色粘質土
15層　12層と同じ
16層　13層と同じ(炭化物を多く含む)
17層　暗茶褐色粘質土
18層　明茶褐色粘質土
19層　茶褐色粘質土(地山ブロック含む)
20層　暗茶褐色粘質土(地山ブロック含む)
21層　20層と同じ
22層　黄褐色粘質土
23層　20層と同じ
24層　明灰茶褐色粘質土(炭化物を多く含む)
25層　灰褐色粘質土(炭化物を多く含む)
26層　暗灰褐色粘質土
27層　茶褐色土(地山ブロック含む)
28層　24層と同じ(炭化物を多く含む)
29層　27層と同じ
30層　茶褐色粘質土(地山ブロック含む)
31層　暗灰褐色粘質土
32層　明灰褐色粘質土(炭化物を多く含む)
33層　明黄褐色粘質土(炭化物を多く含む)
下　層　34層　灰褐色粘質土(炭化物を多く含む)
35層　黄茶褐色粘質土
36層　暗茶褐色粘質土
最下層37層　灰茶褐色粘質土
38層　暗灰褐色粘質土
39層　36層と同じ
40層　37層と同じ

第19図　5トレンチ1号貯蔵穴実測図（1/30）



第20図　5トレンチ1号貯蔵穴出土土器実測図1（1/4）



第21図　5トレンチ1号貯蔵穴出土土器実測図2（1/4）

径6㎝を測る。3・4・11・22・24・27・35・36は金雲母を含み、8は石英を含むことから搬入品であろう。

第21図の1～14は壺である。1は小さな口縁部が外湾し、口縁部下半に小さな刻目を施す。内外面ともにミガキ調整。2は「く」字状に大きく外反する口縁部の端部に小さな刻目を施す。3は緩やかに外反する口縁部の端部下半に小さな刻目が施されている。上層出土。4は肩部に沈線文、羽状文、重孤文が描かれている。5は肩部に沈線文と格子目文が描いている。6～9は口縁部が「く」字状に外反する。6は口縁部が肩部からほぼ垂直に立ち上がり「L」字状に外湾する。復元口径18.5㎝を測る。上層出土。7・8は端部付近が肥厚し、7は端部を上方にわずかにつまみ上る。7は復元口径20㎝、8は22.2㎝をそれぞれ測る。9は口縁端部下半に小さな刻目を施す。復原口径25.8㎝を測る。10は肩部と頸部内面にそれぞれ一条の三角突帯を巡らせる。11は胴部最大径が胴部中央よりやや上位にあり、「M」字状突帯を巡らせ、肩部にも三角突帯を巡らせている。胴部最大径29㎝を測る。12は肩部に二条の三角突帯を、13は一条の三角突帯をそれぞれ巡らせている。14は肩部に二条の三角突帯を巡らせ、その下位に羽状文、沈線文、重孤文を描く。18・19は長頸壺の口縁部である。口縁部は直線的に外傾し、端部はわずかに上を向く。内外面とも丁寧なミガキが施されている。18は復原口径18.9㎝を測る。19は復原口径19.1㎝を測る。16・17は底部である。16は復原底径8.2㎝、17は復原底径5.8㎝を測る。7・17は石英を多く、1・11は金雲母を含む、19は砂礫を多く含むことから、それぞれ搬入品であろう。

20は蓋であろう。復元径19.2㎝を測る。21は小型の器台である。4方向に楕円状の透しが見られる。23はミニチュア土器である。グラス状を呈し、底部は外に張り出す厚みのある上げ底で、端部は丸く仕上げられ、口縁部はほぼ直立する。口径10㎝、器高11.2㎝、底径5.6㎝を測る。

石器は第24図に8点を図示した。2は石庖丁である。半分を欠く。安山岩製。3～5は石斧である。3は一部研磨痕を残すが、大半は敲打痕が残る。4は抉入状片刃石斧で、両端や側面の一部を欠く。5は大半が欠損し、研磨痕をわずかに残す磨製石斧である。6・7は共に砥石である。6は欠損が著しく研磨面が一面のみ残る。8も下半が欠損し、研磨面が四面残る。両側面には細い研磨痕が認められる。8は磨製石剣である。先端部を欠くが、現存長23.2㎝と長い。断面は菱形をなす。また基部には約2.5㎝幅にわたってパティナの違いが両面に認められることから、本来木製の柄が装着されたまま廃棄されたのであろう。9は拳大の磨石で、両面中央付近に研磨痕が残る。

2号貯蔵穴（第22・23図、第24図1・9、第25図1、図版9・10・15・16）

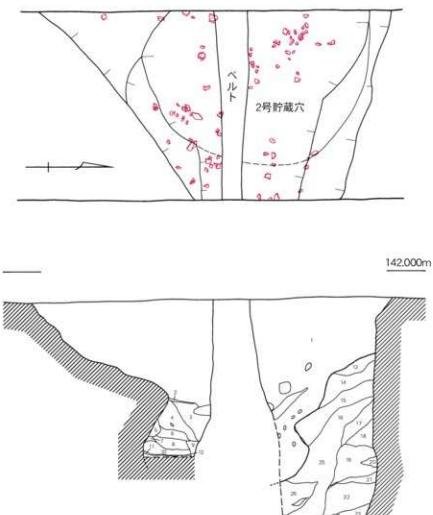
この貯蔵穴は遺構検出段階では確認できず、掘り下げ中に第22図に示すとおりのプランや断面を把握できた。しかしながらこの貯蔵穴は、それ以前の堆積土（13層以下）を切るように掘られていた。そのため調査では貯蔵穴以前の堆積土の状況も確認すべく一部を2.5m以上掘り下げたが、ベルトを残したまま行っていたため危険と判断し完掘までには至っていない。この堆積土については地山土が主体となって埋没していて何らかの自然な堆積の可能性が考えられ、また一方では部分的な状況ではなく東西方向へと伸びている様子も窺えることから人為的な溝等の可能性も否定できず、性格については今後の周辺調査に期待したい。

さて、2号貯蔵穴は西側の一部がトレンチ外へと広がるが、平面形は円形をなすと推定される。断面は袋状をなし、その規模は検出面での径が2m30㎝、深さが約2mを測る。北側の壁面が崩落

しており、埋土は数層に分けられる。貯蔵穴内からは多くの土器片等が出土している。

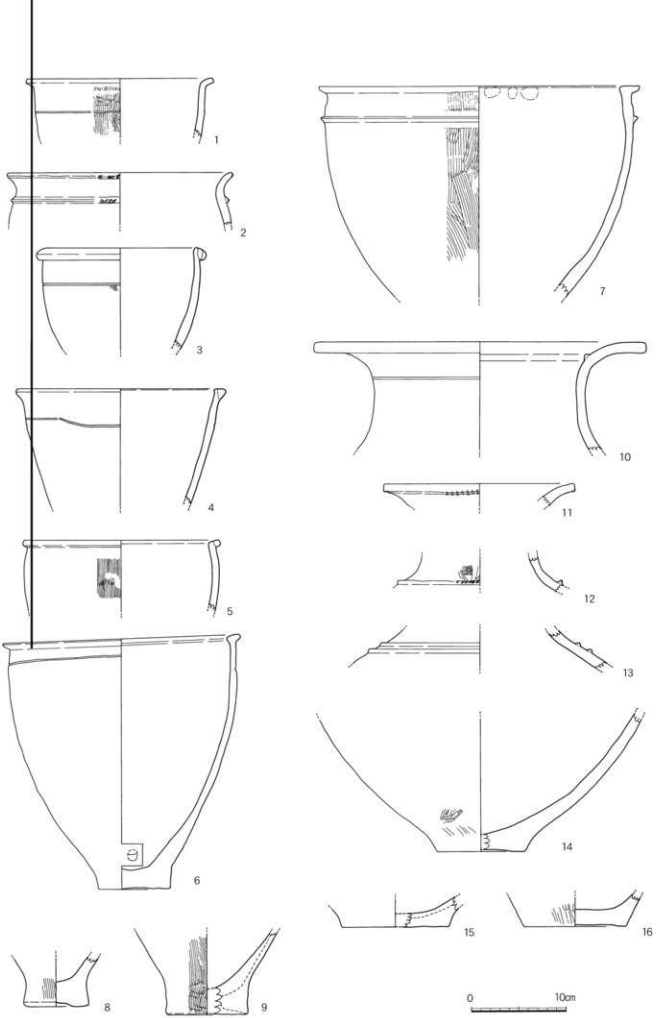
第23図の１～９は甕である。１・２は口縁部が如意状に外反する。１は口縁下に一条の沈線を施す。復元口径19.5cmを測る。２は口縁下に三角突帯を巡らせ、口縁端部と突帯に刻目を施す。３～７は口縁部が「L」字状に外反する復原口径23.4cmを測る。３は丸みを持つ口縁端部が垂れ下がり、口縁部下に一条の沈線を巡らせる。復原口径17.6cmを測る。４は胴部が直線的である。復原口径22.2cmを測る。５・６とも口縁端部が上方を向き、５は復原口径20.8cm、胴部最大径20.6cmを測る。６は口縁部下に一条の沈線を巡らせ、底部は上げ底気味としている。底部付近に穿孔１穴を穿つ。口径25.1cmを測る。７は口縁部下に三角突帯を巡らせる。復原口径33.8cmを測る。

10～16は壺である。10は口縁部が直角に屈曲し、内面に一条の三角突帯が巡る。復元口径35.1cmを測る。11は口縁部の端部下半に刻目を施す。復原口径20.2cmを測る。12は肩部に刻目を施し

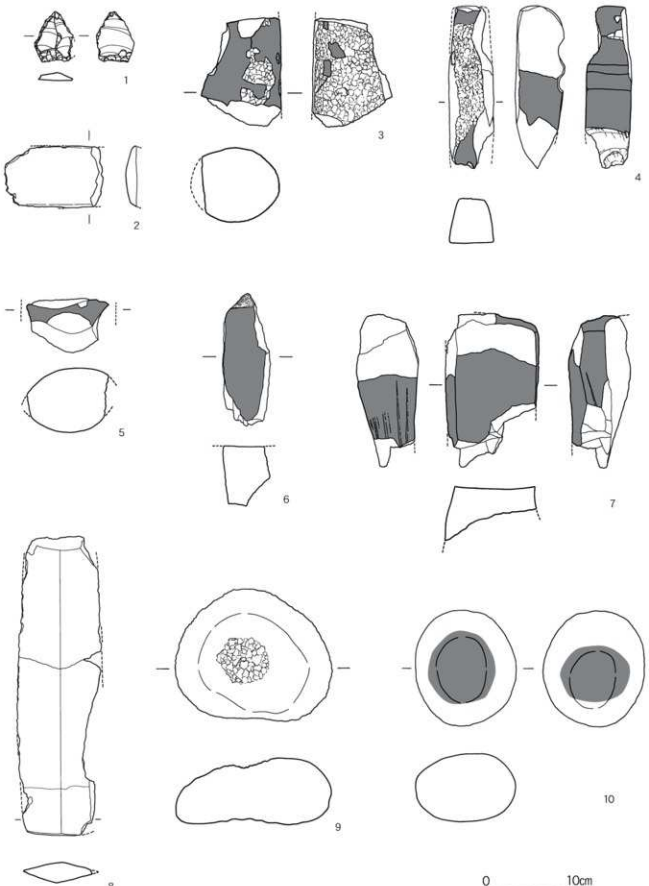


(層　序)
2号貯蔵穴埋土
1層　明茶褐色土
2層　暗灰褐色土
3層　暗灰黄土
4層　灰茶褐色土
5層　暗茶褐色粘質土
6層　5層と同じ
7層　茶褐色土（地山土）
8層　暗灰黄粘質土
9層　7層と同じ（地山混土）
10層　灰黄粘質土
11層　炭化層
12層　暗灰色粘質土
堆積土
13層　混土（赤味強い）
14層　混土（黒味強い）
層　混土（灰色強い）
層　混土（黒味強い）
17層　15層と同じ
層　16層と同じ
層　混土（灰色・黒味強い）
層　地山（茶褐色土）
層　20層と同じ
22層　19層と同じ
層　20層と同じ
24層　明赤色土（地山土）
層　18層と同じ
26層　灰褐色土
27層　灰色粘質土

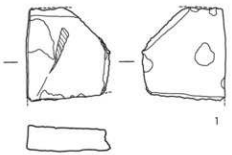
第22図　５トレンチ２号貯蔵穴実測図（1/30）



第23図　5トレンチ2号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）



第24図　5トレンチ1・2号貯蔵穴出土石器実測図（1/2・1/3）

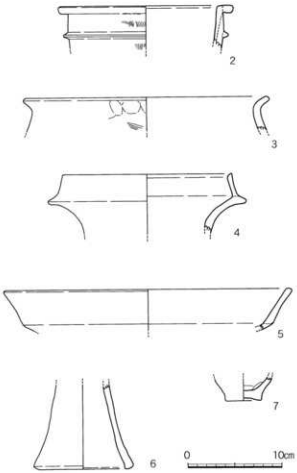


た三角突帯が巡る。13は肩部に二条の三角突帯が巡る。14～16は底部である。14は上げ底気味で、復原底径9.2cmを測る。15・16は平底で、15は復原底径11.2cm、16は復原底径10.8cmを測る。

第24図1はドリルで、9は叩石である。第25図1は、粘土板である。

表採遺物（第25図）

2・3は甕である。2は口縁部が「L」字状をなし、口縁部下に一条の三角突帯を巡らせる。復原口径18.4cm。3は口縁部が如意状に外反する。復原口径26cmを測る。4は壺である。復原口径17.8cmを測る。5は高坏である。復原口径30.4cm。6は器台、7はミニチュア土器である。底部は上げ底気味。



第25図　5トレンチ2号貯蔵穴出土土製品・表採土器実測図（1/3・1/4）

第3節　小　結

3次調査区は台地東側の一段高い場所が対象となった。これまでに報告したように、各トレンチで確認した遺構の密度は台地中央部と比較すると希薄である。しかも、これまでの1次調査の結果をも踏まえると、貯蔵穴の分布が目立っている。吹上遺跡での弥生集落としての全体像については今後予定の報告のまとめに譲るとして、ここでは発見された各遺構の時期についてまとめておく。

まず、前期の遺構としては5トレンチ1・2号貯蔵穴が上げられる。ともに板付Ⅱ式や所謂亀ノ甲タイプの甕が出土しており、前期末から中期初頭の時期が考えられる。2トレンチ1・2号土坑などもほぼ同時期と推定される。こうした遺構出土の土器は量的には北部九州系の土器が目立つが、豊前地域の影響を受けた壺や、東九州の影響を受けた下城式の甕も散見でき、周防灘沿岸域の土器文化の影響も少なからずあったことが理解される。

次に、唯一竪穴住居と判断した3トレ1号竪穴住居は、跳ね上げ口縁の甕に豊前地域の長頸壺などがセットとして出土していることから、中期末から後期初頭の時期が考えられる。

第１表　３次調査出土土器観察表

掲図番号	区名	遺構名	種別	器種	法量				調整		胎土	焼成	色調		備考
					口径	胴部径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第３図-1	１Ｔ	表採	土師	甕	－	－	－	－	タタキ後ナデ	ナデ	ＡＢＣＤＥＨ	良	黄褐色	黄褐色	
第３図-2	１Ｔ	表採	弥生	甕	(15.4)	－	－	(8.1)	ハケ	ナデ	ＢＧＨ	良	暗茶色	暗茶色	沈線が巡る
第３図-3	１Ｔ	表採	弥生	甕	(17.8)	－	－	(8.8)	ハケ後ナデ	ハケ	ＡＢＣＤＥＨ	良	暗茶褐色	暗茶褐色	
第３図-4	１Ｔ	表採	弥生	壺	(15.1)	(30.1)	－	(18.7)	ナデ	不明	ＡＢＣＤＥＨ	良	明茶褐色	明茶褐色	
第３図-5	１Ｔ	表採	弥生	鉢	－	－	－	－	ナデ？	ナデ？	ＡＣＤＥＨ	良	黄褐色	黄褐色	
第３図-6	１Ｔ	表採	弥生	高杯	(25.2)	－	－	(6.1)	ナデ	ハケ後ナデ	ＡＢＣＤＥＨ	良	黄褐色	黄褐色	
第３図-7	１Ｔ	表採	弥生	高杯	－	－	(16.4)	(4.5)	ハケ後ナデ	ナデ	ＡＢＣＤＥＨ	良	黄褐色	黄褐色	
第６図-1	２Ｔ	１号貯蔵穴	弥生	甕	(27.4)	－	－	(7.3)	ナデ？	ナデ	ＡＢＣＤＥＨ	良	暗茶褐色	暗茶褐色	沈線が巡る
第６図-2	２Ｔ	１号貯蔵穴	弥生	甕	－	－	(6.8)	(6.1)	ハケ後ナデ	ナデ	ＡＢＣＤＥＨ	良	暗茶褐色	黒褐色	
第６図-3	２Ｔ	１号貯蔵穴	弥生	甕	－	－	(5.4)	(7.5)	不明	不明	ＡＢＣＤＥＨ	良	明茶褐色	暗褐色	
第６図-4	２Ｔ	１号貯蔵穴	弥生	甕	－	－	(8.6)	(3.1)	ハケ	ナデ	ＡＢＣＤＥＨ	良	明褐色	明褐色	
第８図-1	２Ｔ	１号土坑	弥生	甕	－	－	－	－	ハケ後ナデ	ナデ	ＡＣＧＨ	良	赤褐色	黄褐色	沈線が巡る
第８図-2	２Ｔ	１号土坑	弥生	甕	－	－	－	－	ハケ	ナデ	ＡＢＣＤＨ	良	黄褐色	黄褐色	
第８図-3	２Ｔ	１号土坑	弥生	甕	(22.4)	－	－	(9.2)	ハケ	ナデ	ＡＢＣＤＥ	良	黄褐色	黄褐色	
第８図-4	２Ｔ	１号土坑	弥生	甕	(26.2)	－	－	(8.6)	ハケ後ナデ	ナデ？	ＡＢＤＨ	良	暗茶色	黒褐色	沈線が巡る
第８図-5	２Ｔ	１号土坑	弥生	甕	－	－	－	－	不明	不明	ＡＢＣＤＥＨ	良	明赤褐色	明赤褐色	
第８図-6	２Ｔ	１号土坑	弥生	甕	－	－	(11.2)	(4.4)	ハケ	ナデ？	ＡＢＣＤＥＨ	良	明赤褐色	明赤褐色	
第８図-7	２Ｔ	１号土坑	弥生	壺	－	－	－	－	不明	不明	ＡＢＣＤＥＨ	良	黄褐色	黄褐色	
第８図-8	２Ｔ	１号土坑	弥生	壺	－	－	－	－	ナデ	ナデ	ＢＥＨ	良	褐色	暗褐色	
第８図-9	２Ｔ	１号土坑	弥生	壺	－	－	－	－	ナデ	ナデ	ＡＢＣＤＥ	良	赤褐色	赤褐色	Ｍ字突帯
第８図-10	２Ｔ	１号土坑	弥生	壺	－	－	－	(5.5)	ナデ	ナデ	ＡＢＣＤＥＨ	良	灰褐色	淡褐色	三角突帯
第８図-11	２Ｔ	１号土坑	弥生	壺	－	－	－	(8.6)	ナデ	ミガキ後ナデ	ＡＢＣＨ	良	淡褐色	淡褐色	三角突帯
第８図-12	２Ｔ	１号土坑	弥生	壺	－	(48.2)	－	(15.9)	ナデ？	ナデ？	ＡＢＣＥＨ	良	灰褐色	淡灰褐色	コ字突帯
第８図-13	２Ｔ	１号土坑	弥生	壺	－	－	(13.6)	(9.2)	ハケ	ナデ	ＡＢＣＤＥ	良	明橙褐色	灰褐色	
第９図-1	２Ｔ	２号土坑	弥生	甕	－	－	－	－	ハケ	不明	ＡＢＤＥＨ	良	茶褐色	黄褐色	沈線が巡る
第９図-2	２Ｔ	２号土坑	弥生	甕	－	－	－	－	ナデ？	ナデ？	ＡＢＤＥＨ	良	黒褐色	明褐色	
第９図-3	２Ｔ	２号土坑	弥生	甕	(25.8)	－	－	(2.3)	不明	不明	ＡＢＣＤＥＨ	良	明褐色	明褐色	
第９図-4	２Ｔ	３号土坑	弥生	壺	(38.6)	－	－	(5.1)	ハケ後ナデ	ミガキ	ＡＢＣＤＥＨ	良	灰褐色	灰褐色	口縁部刻目あり
第９図-5	２Ｔ	３号土坑	弥生	甕	－	－	－	－	不明	不明	ＡＢＣＤＥＨ	良	明茶褐色	明茶褐色	口縁部刻目 三角突帯巡る
第９図-6	２Ｔ	３号土坑	弥生	壺	－	－	－	－	ナデ	ナデ	ＡＢＥ	良	灰褐色	灰褐色	
第９図-7	２Ｔ	３号土坑	弥生	壺	－	－	－	－	ナデ？	ナデ？	ＢＨ	良	明黄褐	黒褐色	Ｍ字突帯
第９図-8	２Ｔ	３号土坑	弥生	壺	－	－	－	－	ミガキ	ナデ	ＡＢＤＥＧＨ	良	明茶色	明茶色	Ｍ字突帯
第９図-9	２Ｔ	４号土坑	弥生	甕	－	－	(7.0)	(7.2)	ハケ後ナデ	ナデ	ＡＢＤＥＨ	良	橙褐色	暗茶褐色	
第９図-10	２Ｔ	４号土坑	弥生	器台	－	－	(7.6)	(5.2)	ナデ	ナデ	ＡＢＣＤＥＨ	良	橙褐色	橙褐色	
第10図-1	２Ｔ	表採	弥生	壺	(32.2)	－	－	(6.8)	ナデ	ナデ	ＢＣＤＨ	良	明橙褐色	明橙褐色	
第10図-2	２Ｔ	表採	弥生	壺	(12.4)	－	－	(3.7)	ナデ？	ナデ？	ＡＢＣＤＥＨ	良	橙褐色	橙褐色	
第10図-3	２Ｔ	表採	弥生	ミニ	(17.8)	－	－	(8.8)	ハケ後ナデ	ハケ	ＡＢＣＤＥＨ	良	暗茶褐色	暗茶褐色	
第13図-1	３Ｔ	１号住居	弥生	甕	(25.8)	－	－	(4.4)	ハケ	ナデ	ＡＢＣＤＨ	良	明黄白色	明黄白色	
第13図-2	３Ｔ	１号住居	弥生	甕	26.3	28.0	10.4	34.7	ハケ	ナデ？	ＡＣ	不良	茶褐色	灰褐色	

神図番号	区名	遺構名	種別	器種	法量				調整		胎土	焼成	色調		備考
					口径	胴部径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第13図-3	3 T	1 号住居	弥生	甕	(38.0)	－	－	(1.8)	不明	不明	ABCEH	良	暗茶褐色	黒褐色	
第13図-4	3 T	1 号住居	弥生	壺	(13.4)	－	－	(3.2)	ナデ	ナデ	ABCDE	良	明橙褐色	明橙褐色	
第13図-5	3 T	1 号住居	弥生	蓋	(16.4)	－	－	(3.4)	ナデ	ナデ	ABCDEH	良	暗茶褐色	暗茶褐色	
第13図-6	3 T	1 号住居	弥生	壺	－	－	(5.6)	(6.3)	ナデ	ナデ	ABCDE	良	赤褐色	褐色	
第13図-7	3 T	1 号住居	弥生	壺	－	－	(9.0)	(4.3)	ハケ	ナデ	ABCDEH	良	茶褐色	茶褐色	
第13図-8	3 T	1 号住居	弥生	無頸壺	－	(17.8)	7.8	(10.8)	ハケ	ハケ	ABCDE	良	赤褐色	黒褐色	
第13図-9	3 T	1 号住居	弥生	器台	－	－	(10.0)	(5.3)	不明	不明	ABCDEH	良	橙褐色	橙褐色	
第13図-10	3 T	1 号住居	弥生	器台	－	－	(12.0)	(8.0)	指押え	指押え	ACDE	良	暗茶色	暗茶色	
第14図-1	3 T	ピット-1	弥生	甕	(13.4)	－	－	(4.8)	ナデ	ナデ	ABCH	良	黒褐色	黒褐色	
第17図-1	4 T	表採	白磁碗	碗	－	－	(6.3)	(1.5)	－	－	－	精	淡緑色	淡緑色	
第20図-1	5 T	1 号貯蔵穴	弥生	甕	－	－	－	－	ナデ	ナデ	ABCDH	良	淡赤褐色	淡赤褐色	口縁部に刻目 突帯に刻目
第20図-2	5 T	1 号貯蔵穴	弥生	甕	－	－	－	－	ハケ	ミガキ	ABCH	良	黒褐色	灰褐色	
第20図-3	5 T	1 号貯蔵穴	弥生	甕	(19.8)	(21.4)	－	(10.9)	ハケ	ミガキ	BCG	良	赤褐色	灰褐色	
第20図-4	5 T	1 号貯蔵穴	弥生	甕	(24.4)	(24.0)	－	(8.5)	ハケ	ミガキ 後ナデ	BGH	良	赤褐色	黒褐色	
第20図-5	5 T	1 号貯蔵穴	弥生	甕	－	－	－	－	ナデ	ナデ	ABDH	良	黒褐色	黒褐色	
第20図-6	5 T	1 号貯蔵穴	弥生	甕	－	－	－	－	ナデ	ナデ	CH	良	淡褐色	淡褐色	
第20図-7	5 T	1 号貯蔵穴	弥生	甕	－	－	－	－	ハケ	ナデ	BCDH	良	淡褐色	淡褐色	
第20図-8	5 T	1 号貯蔵穴	弥生	甕	－	－	－	－	ナデ	ナデ	BH	良	灰褐色	黒褐色	
第20図-9	5 T	1 号貯蔵穴	弥生	甕	－	－	(13.6)	(9.2)	ハケ	ナデ	ABCDE	良	明橙褐色	灰褐色	
第20図-10	5 T	1 号貯蔵穴	弥生	甕	－	－	－	－	ハケ	ナデ	ACH	良	灰褐色	灰褐色	口縁部に刻目
第20図-11	5 T	1 号貯蔵穴	弥生	甕	－	－	－	－	ハケ	ナデ	BCGH	良	淡褐色	淡褐色	
第20図-12	5 T	1 号貯蔵穴	弥生	甕	－	－	－	－	ハケ	ミガキ	ABCH	良	暗茶褐色	橙褐色	沈線が巡る
第20図-13	5 T	1 号貯蔵穴	弥生	甕	23.8	24.2	－	10.8	ハケ	ミガキ 後ナデ	ABCDH	良	灰褐色	淡褐色	三角突帯
第20図-14	5 T	1 号貯蔵穴	弥生	甕	－	－	－	－	ナデ	ナデ	ABCDH	良	淡褐色	淡褐色	
第20図-15	5 T	1 号貯蔵穴	弥生	甕	－	－	－	－	ハケ	ミガキ	ACH	精	明橙褐色	明橙褐色	
第20図-16	5 T	1 号貯蔵穴	弥生	甕	－	－	－	－	ハケ	ミガキ	ACH	良	黒褐色	黒褐色	
第20図-17	5 T	1 号貯蔵穴	弥生	甕	－	－	－	－	ミガキ	ミガキ	ACH	良	赤褐色	赤褐色	
第20図-18	5 T	1 号貯蔵穴	弥生	甕	－	－	－	－	ナデ	ナデ	ABCDH	良	淡褐色	淡褐色	
第20図-19	5 T	1 号貯蔵穴	弥生	甕	22.1	－	－	(13.7)	ハケ	ミガキ	ABCDE	良	黄褐色	赤褐色	スス付着
第20図-20	5 T	1 号貯蔵穴	弥生	甕	25.2	－	－	(11.6)	ハケ	ミガキ	ACDH	良	淡茶褐色	灰茶褐色	
第20図-21	5 T	1 号貯蔵穴	弥生	甕	(27.8)	－	－	(28.7)	ハケ	ミガキ	ABCDEH	良	赤褐色	明黄褐色	スス付着
第20図-22	5 T	1 号貯蔵穴	弥生	甕	－	－	－	－	ハケ	ナデ	BGH	良	淡褐色	淡褐色	
第20図-23	5 T	1 号貯蔵穴	弥生	甕	－	－	－	－	ナデ	ナデ	ABCDEH	良	橙褐色	淡茶褐色	
第20図-24	5 T	1 号貯蔵穴	弥生	甕	－	－	－	－	ナデ	ナデ	BGH	良	淡褐色	淡褐色	
第20図-25	5 T	1 号貯蔵穴	弥生	甕	－	－	－	－	ハケ	ミガキ	H	精	灰褐色	灰褐色	沈線が巡る
第20図-26	5 T	1 号貯蔵穴	弥生	甕	－	－	－	－	ハケ	ミガキ	ABCDH	良	灰褐色	黒褐色	沈線が巡る
第20図-27	5 T	1 号貯蔵穴	弥生	甕	(22.0)	－	－	(3.9)	ハケ	ナデ	ABGH	良	灰褐色	灰褐色	
第20図-28	5 T	1 号貯蔵穴	弥生	甕	(22.4)	－	－	(4.3)	ハケ	ナデ	ABGH	良	黒褐色	黒褐色	
第20図-29	5 T	1 号貯蔵穴	弥生	甕	－	－	－	－	ハケ	ナデ	ACH	良	淡褐色	淡褐色	突帯に刻目
第20図-30	5 T	1 号貯蔵穴	弥生	甕	－	－	－	－	ハケ	ミガキ	ABCH	良	淡茶褐色	淡茶褐色	突帯あり

神図番号	区名	遺構名	種別	器種	法量				調整		胎土	焼成	色調		備考
					口径	胴部径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第20図-31	5 T	1 号貯蔵穴	弥生	甕	－	－	－	－	ナデ	ナデ	ABCDEH	良	白褐色	白褐色	突帯、沈線あり
第20図-32	5 T	1 号貯蔵穴	弥生	甕	(24.9)	－	－	(2.8)	ハケ後ナデ	ナデ	ABCDH	精	黒褐色	黒褐色	
第20図-33	5 T	1 号貯蔵穴	弥生	甕	(30.0)	－	－	(10.2)	ハケ	不明	ABCDH	良	明黄褐色	明黄褐色	三角突帯
第20図-34	5 T	1 号貯蔵穴	弥生	甕	－	－	11.2	(5.8)	ハケ	ナデ	ABDEGH	良	茶褐色	黄灰褐色	
第20図-35	5 T	1 号貯蔵穴	弥生	甕	－	－	(6.6)	(4.6)	ナデ	ナデ	ABGH	良	明黄褐色	黒褐色	
第20図-36	5 T	1 号貯蔵穴	弥生	甕	－	－	(6.0)	(3.2)	ハケ	不明	ABGH	精	明褐色	灰褐色	M字突帯
第21図-1	5 T	1 号貯蔵穴	弥生	壺	－	－	－	－	ナデ	ミガキ	BGH	良	淡褐色	淡褐色	口唇部に刻目
第21図-2	5 T	1 号貯蔵穴	弥生	壺	－	－	－	－	ナデ	ミガキ	ABCH	良	橙褐色	橙褐色	口唇部に刻目
第21図-3	5 T	1 号貯蔵穴	弥生	壺	－	－	－	－	ミガキ	ミガキ	CDEH	精	赤褐色	赤褐色	口唇部に刻目
第21図-4	5 T	1 号貯蔵穴	弥生	壺	－	－	－	－	ミガキ	ミガキ	ABCDH	精	茶褐色	茶褐色	羽状文・重弧文
第21図-5	5 T	1 号貯蔵穴	弥生	壺	－	－	－	－	ハケ後ナデ	ミガキ	ABCH	精	褐色	赤褐色	肩部に格子目文
第21図-6	5 T	1 号貯蔵穴	弥生	壺	(18.5)	－	－	(4.2)	ナデ	ナデ	ABCDEH	良	灰褐色	黄褐色	
第21図-7	5 T	1 号貯蔵穴	弥生	壺	(20.0)	－	－	(2.7)	ナデ	ナデ	BH	良	淡赤褐色	灰褐色	
第21図-8	5 T	1 号貯蔵穴	弥生	壺	(22.2)	－	－	(2.9)	ミガキ	ミガキ	ABCH	良	淡白褐色	淡白褐色	
第21図-9	5 T	1 号貯蔵穴	弥生	壺	(25.8)	－	－	－	ナデ	ナデ	ABCDEH	良	茶褐色	茶褐色	口唇部に刻目
第21図-10	5 T	1 号貯蔵穴	弥生	壺	－	－	－	(7.2)	ミガキ	ミガキ	ABCH	良	赤褐色	暗茶色	三角突帯
第21図-11	5 T	1 号貯蔵穴	弥生	壺	(29.0)	－	－	(19.0)	ミガキ	ナデ	BGH	良	暗褐色	灰褐色	M字突帯
第21図-12	5 T	1 号貯蔵穴	弥生	壺	－	－	－	(5.1)	ミガキ	ナデ	ABCDEH	良	暗茶褐色	明灰褐色	コ字突帯
第21図-13	5 T	1 号貯蔵穴	弥生	壺	－	－	－	(4.3)	ミガキ	ミガキ	ACDEH	良	黒褐色	明茶褐色	
第21図-14	5 T	1 号貯蔵穴	弥生	壺	－	－	－	(14.3)	ミガキ	ミガキ	ABCH	良	茶褐色	淡茶褐色	羽状文・重弧文
第21図-15	5 T	1 号貯蔵穴	弥生	壺	－	－	(7.8)	(13.2)	ハケ	ミガキ	ABCDEH	良	黄褐色	褐色	
第21図-16	5 T	1 号貯蔵穴	弥生	壺	－	－	(8.2)	(3.7)	ミガキ	ナデ	ABCDEH	良	暗茶色	明灰褐色	
第21図-17	5 T	1 号貯蔵穴	弥生	壺	－	－	(5.8)	(3.0)	ナデ？	ナデ	BH	良	赤褐色	黒褐色	
第21図-18	5 T	1 号貯蔵穴	弥生	壺	(18.9)	－	－	(6.9)	ハケ後ミガキ	ミガキ	CH	精	赤褐色	赤褐色	
第21図-19	5 T	1 号貯蔵穴	弥生	壺	(19.1)	－	－	－	ナデ	ナデ	H	良	淡黄白色	淡黄白色	
第21図-20	5 T	1 号貯蔵穴	弥生	壺	(19.2)	－	－	(6.0)	不明	不明	ABCEH	良	黒褐色	暗褐色	
第21図-21	5 T	1 号貯蔵穴	弥生	台付鉢	－	－	(8.8)	(4.5)	ミガキ	ナデ	GH	良	黒褐色	明茶色	
第21図-22	5 T	1 号貯蔵穴	弥生	ミニ	－	－	4.9	(2.3)	ハケ	不明	ABC	良	暗褐色	黄褐色	
第21図-23	5 T	1 号貯蔵穴	弥生	ミニ	(10.0)	－	(5.6)	(11.2)	ハケ	ミガキ	ABCDEH	良	暗茶褐色	暗茶褐色	
第23図-1	5 T	2 号貯蔵穴	弥生	甕	(19.5)	－	－	(6.4)	ハケ	ナデ	ABCDH	良	黒褐色	明茶褐色	沈線が巡る
第23図-2	5 T	2 号貯蔵穴	弥生	甕	(23.4)	－	－	(5.5)	ハケ後ナデ	ナデ	ACDE	精	赤褐色	明橙褐色	口唇部、突帯に刻目
第23図-3	5 T	2 号貯蔵穴	弥生	甕	(17.6)	－	－	(10.8)	ハケ	ナデ	ACDEH	良	黒褐色	黒褐色	沈線が巡る 1 号貯蔵穴と接合
第23図-4	5 T	2 号貯蔵穴	弥生	甕	(22.2)	－	－	(12.4)	ハケ	ナデ	CDH	良	暗茶褐色	淡褐色	沈線が巡る
第23図-5	5 T	2 号貯蔵穴	弥生	甕	(20.8)	(20.6)	－	(7.5)	ハケ	ミガキ	ABCDEH	良	黒褐色	黒褐色	
第23図-6	5 T	2 号貯蔵穴	弥生	甕	25.1	－	7.6	26.9	ハケ	ナデ	ACDEH	良	茶褐色	茶褐色	沈線が巡る
第23図-7	5 T	2 号貯蔵穴	弥生	甕	(33.8)	－	－	(22.2)	ハケ	ミガキ	ABCDEH	良	淡茶褐色	黄褐色	三角突帯
第23図-8	5 T	2 号貯蔵穴	弥生	甕	－	－	6.8	(5.1)	ハケ	ナデ	ABCDEH	良	赤褐色	灰褐色	
第23図-9	5 T	2 号貯蔵穴	弥生	甕	－	－	(8.6)	(8.6)	ハケ	ミガキ	ABCH	良	赤褐色	赤褐色	
第23図-10	5 T	2 号貯蔵穴	弥生	壺	(35.1)	－	－	(11.4)	不明	不明	ABCDE	良	明黄褐色	明黄褐色	
第23図-11	5 T	2 号貯蔵穴	弥生	壺	(20.2)	－	－	(2.4)	ミガキ	ミガキ	ABCH	精	明茶褐色	黄褐色	口唇部に沈線

神図番号	区名	遺構名	種別	器種	法量				調整		胎土	焼成	色調		備考
					口径	胴部径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第23図-12	5 T	2 号貯蔵穴	弥生	壺	−	−	−	(3.1)	ハケ後ミガキ	ミガキ	ABCDEH	精	黒褐色	黒褐色	三角突帯に刻目
第23図-13	5 T	2 号貯蔵穴	弥生	壺	−	−	−	(2.3)	ナデ	ナデ?	ABCDH	良	茶褐色	明黄褐色	
第23図-14	5 T	2 号貯蔵穴	弥生	壺	−	−	(9.2)	(14.1)	ミガキ	ナデ?	ABCDH	良	黄褐色	暗褐色	1 号貯蔵穴と接合
第23図-15	5 T	2 号貯蔵穴	弥生	壺	−	−	(11.2)	(3.0)	不明	不明	ABGH	良	明灰褐色	黒褐色	
第23図-16	5 T	2 号貯蔵穴	弥生	壺	−	−	(10.8)	(3.2)	ミガキ	ミガキ	ABCDEH	良	黒褐色	黒褐色	
第25図-2		表採	弥生	甕	(18.4)	−	−	(4.6)	ハケ後ナデ	ナデ	AGH	良	黒褐色	明褐色	
第25図-3		表採	弥生	甕	(26.0)	−	−	(3.6)	ハケ後ナデ	ナデ	ABDEGH	良	茶褐色	茶褐色	
第25図-4		表採	弥生	壺	(17.8)	−	−	(6.3)	ナデ	ナデ	ABCDEH	良	黄褐色	黄褐色	
第25図-5		表採	弥生	甕	(30.4)	−	−	(4.3)	ナデ	ナデ	ABGH	良	橙褐色	暗茶褐色	
第25図-6		表採	弥生	器台	−	−	(8.8)	(9.0)	不明	ナデ	ABCDH	良	黄褐色	黒褐色	
第25図-7		表採	弥生	ミニ	−	−	(3.8)	(2.4)	不明	不明	ACDEH	良	黄褐色	黄褐色	

法量の単位はcm.（ ）書きは，現存と復原を表す。
胎土：A角閃石　B石英　C長石　D赤色粒子　E白色粒子　F黒色粒子　G雲母　H砂粒

第２表　３次調査出土石器観察表

神図番号	区名	遺構名	器種	石材	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	備考
第３図-1	1 T	表採	打製石斧	安山岩	(5.9)	(4.9)	(3.6)	(136.7)	
第10図-2	1 T	３号土坑	石剣	砂岩	(3.4)	(2.8)	(0.65)	(10.0)	
第10図-3	1 T	６号土坑	磨石	(凝灰岩質)	9.1	9.5	5.7	718.8	
第24図-1	5 T	2 号貯蔵穴	石錐	黒曜石	1.9	1.5	0.35	1.1	
第24図-2	5 T	1 号貯蔵穴	石鏃丁	安山岩	(5.1)	(3.2)	(0.6)	(14.4)	
第24図-3	5 T	1 号貯蔵穴	磨製石斧	安山岩	(8.5)	(6.3)	(5.8)	(47.0)	
第24図-4	5 T	1 号貯蔵穴	柱状片刃石斧	安山岩	(12.8)	(3.5)	(3.7)	(25.7)	
第24図-5	5 T	1 号貯蔵穴	磨製石斧	安山岩	−	−	(5.0)	(185.7)	
第24図-6	5 T	1 号貯蔵穴	砥石	砂岩	(10.4)	(3.5)	(4.6)	(240.5)	
第24図-7	5 T	1 号貯蔵穴	砥石	砂岩	(12.0)	(7.2)	(4.9)	(402.5)	
第24図-8	5 T	1 号貯蔵穴	石剣	安山岩	(23.2)	(6.5)	(1.5)	(341.8)	
第24図-9	5 T	2 号貯蔵穴	敲石	(凝灰岩質)	12.3	10.2	5.2	911.0	
第24図-10	5 T	1 号貯蔵穴	磨石	(凝灰岩質)	9.1	7.9	5.4	506.3	

第３表　３次調査出土土製品観察表

神図番号	区名	遺構名	器種	胎土	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	備考
第25図-1	5 T	2 号貯蔵穴	粘土板	ABH	(7.2)	(6.6)	(1.85)	(104.4)	

胎土：A角閃石　B石英　C長石　D赤色粒子　E白色粒子　F黒色粒子　G雲母　H砂粒

図版 1

2 トレンチ遺構検出状況（東から）

2 トレンチ遺構検出状況（西から）

2 トレンチ 1 号貯蔵穴完掘状況（南から）

2 トレンチ 1 号土坑完掘状況（北から）

2 トレンチ 1 ～ 4 号土坑完掘状況（西から）

2 トレンチ 1 ～ 4 号土坑発掘状況（北から）

図版 4

3 トレンチ完掘状況（北から）

3 トレンチ 1 号竪穴住居完掘状況（南から）

３トレンチ完掘状況（南から）

３トレンチ１号竪穴住居発掘状況（南から）

3 トレンチ 1 号竪穴住居遺物出土状況（東から）

3 トレンチ 1 号竪穴住居遺物出土状況（東から）

3 トレンチ 1 号貯蔵穴検出状況（北から）

3 トレンチ 1 号貯蔵穴完掘状況（南から）

４トレンチ遺構検出状況（北から）

４トレンチ完掘状況（南から）

５トレンチ完掘状況（北から）

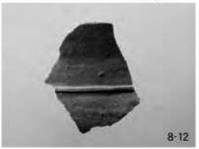
５トレンチ１・２号貯蔵穴完掘状況（北から）

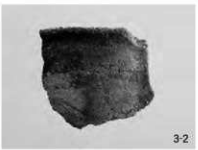
5トレンチ1号貯蔵穴発掘状況（西から）

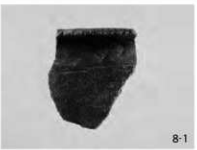
5トレンチ2号貯蔵穴発掘状況（東から）

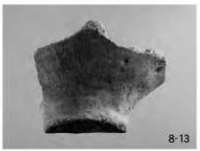
1トレンチ

6-4

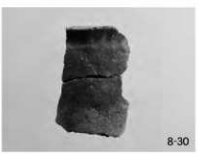

8-12


3-2

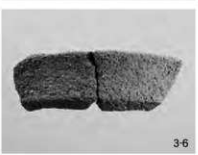

8-1


8-13

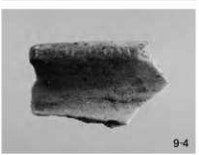
3-4


8-30

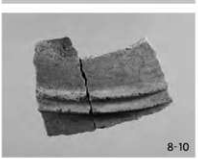
9-3

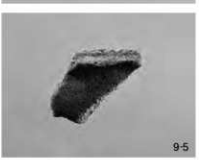

3-6

8-3


9-4

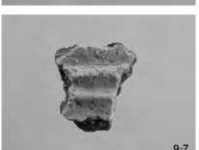
2トレンチ


8-10


9-5

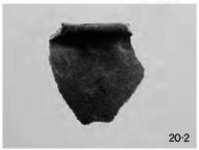
6-1

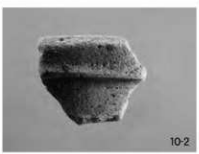
8-11


9-7

9-9

13-1


20-2

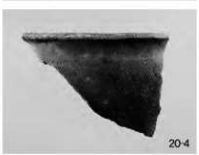

10-2

13-2

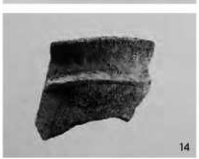
20-3

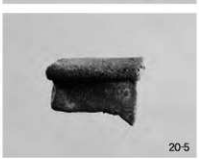
10-3

13-8


20-4

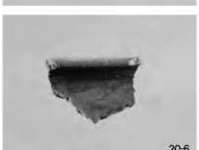
10-4


14

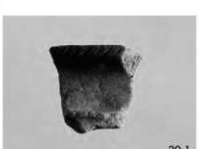

20-5

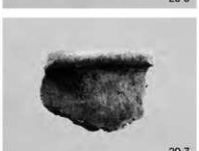
10-5

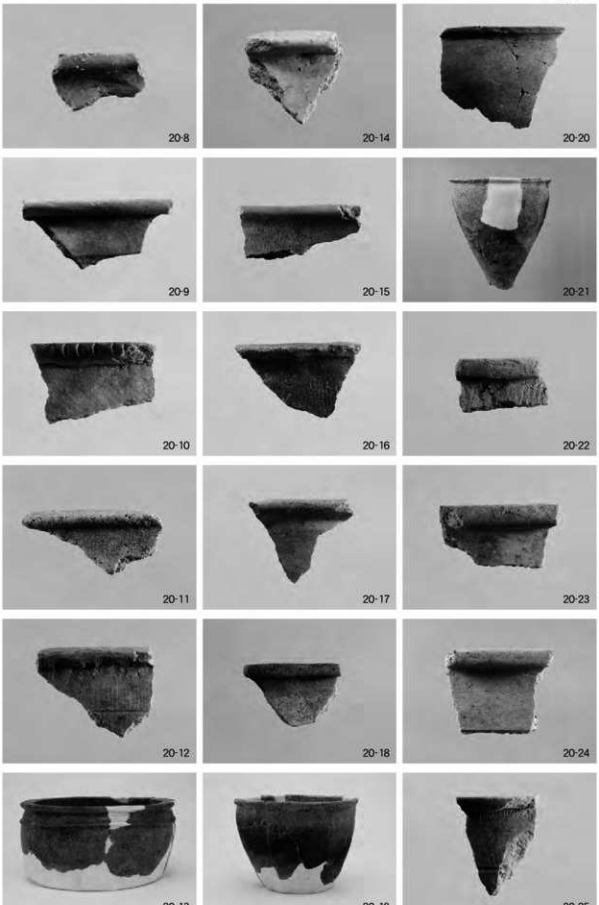
5トレンチ

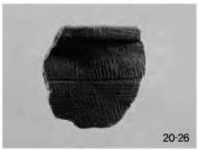

20-6

3トレンチ


20-1

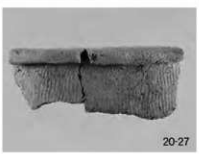

20-7


20-8
20-14
20-20
20-9
20-15
20-21
20-10
20-16
20-22
20-11
20-17
20-23
20-12
20-18
20-24
20-13
20-19
20-25


20-26

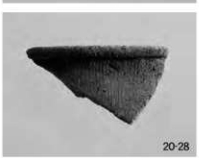
20-34

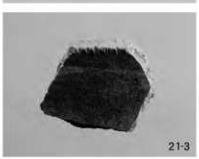
21-11

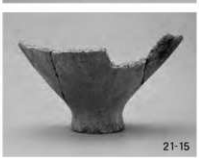

20-27

21-1

21-14


20-28

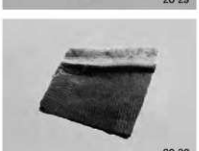

21-3

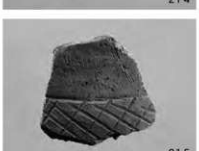

21-15

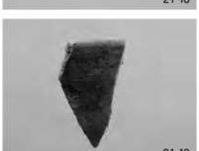
20-29

21-4

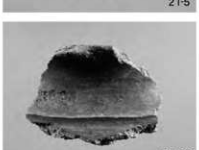
21-16


20-30

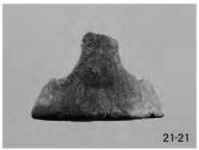

21-5


21-18

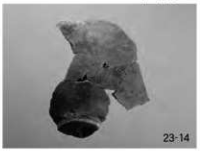
20-31


21-10

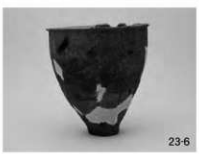
21-20

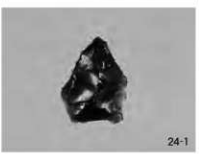

21-21

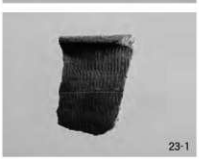
23-5

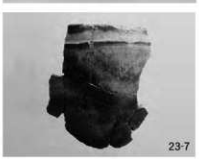

23-14

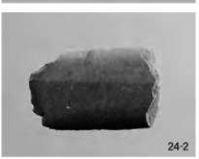
21-22

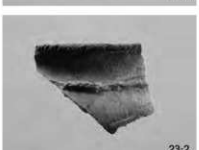

23-6


24-1

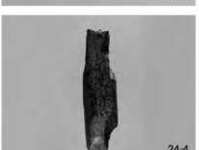

23-1


23-7


24-2


23-2

23-8


24-4

23-3

23-9

24-4

23-4

23-11

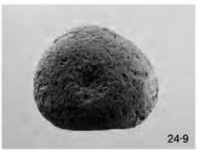
24-4

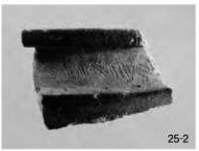
24-6

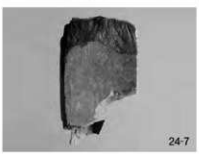
24-8

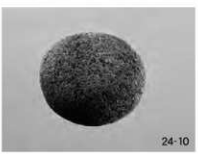
25-1

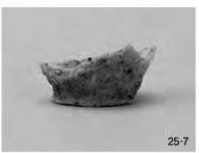
24-6


24-9


25-2


24-7


24-10

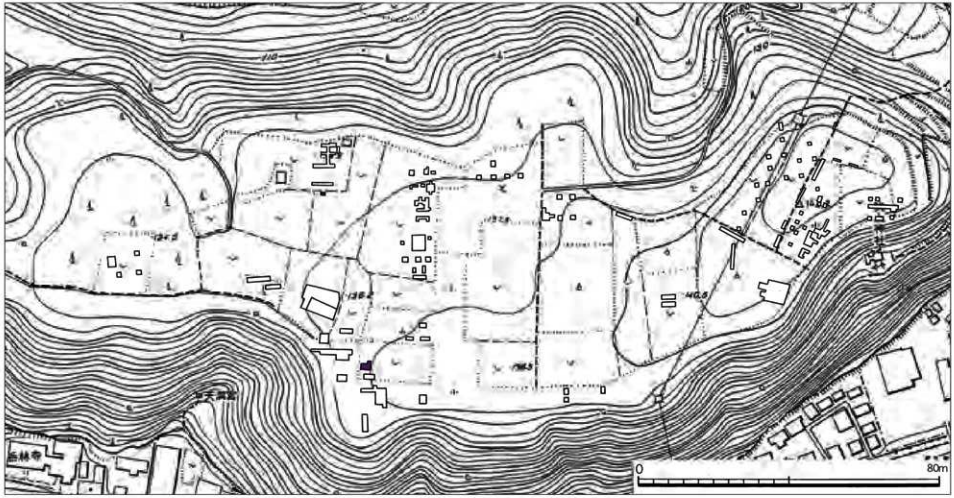

25-7

24-8

25-1

第４章　４次調査の記録

写真１）吹上原台地空中写真（白印は調査位置）



第１図　４次調査の位置（1/2500）　　４次

第１節　調査の概要（第１図）

４次の発掘調査は、昭和61年12月10日に耕作者である横尾竹雄氏がゴボウを作付け中に偶然に甕棺墓を発見し、甕棺内部に人骨が残っているとの通報があり、担当者が現地に出向き確認したところ、成人用甕棺墓が顔をのぞかせ、内部に人骨が散乱していた。そこで、急遽甕棺墓を含めた耕作予定地の緊急な発掘調査を行なうこととなった。調査は土地所有者である相良恒雄氏の承諾と横尾氏の了解を得て、翌年１月16日より発掘調査を実施することとした。

調査では機械を搬入することが出来ないことから手堀りとし、遺構検出作業、遺構の掘り下げ、遺構実測・写真撮影等を行い、２月13日には全ての作業を終了した。この間、甕棺墓以外にも２基の箱式石棺墓から人骨が発見され、九州大学医学部土肥直美、田中良之両助手にその実測、取り上げを依頼し、鑑定を委託した。こうした作業後半には別の地点で新たな甕棺墓が発見され、これも緊急に調査を行うこととし、調査区を１トレンチ、新たな調査区を２トレンチと呼ぶこととした。

１トレンチの調査では土坑８基、甕棺墓1基、箱式石棺墓２基、ピット13を、また2トレンチの調査では甕棺墓1基を検出した。すでに本調査の概要についてはまとめているが、再度見直しや追加整理によって内容等に変更が生じたため、本報告をもって正式な報告とする。

４次調査の報告に関する組織体制は、以下のとおりである。

調査責任者　後藤元晴（日田市教育委員会教育長）

調査事務　後藤　清（日田市教育委員会文化課長）、田中伸幸（同文化課文化財係長兼埋蔵文化財係長）、園田恭一郎（同文化課主査）

調査担当　土居和幸（同文化課主査）

整理作業員　宇野富子、梶原ヒトエ、川原君子、安元百合、和田ケイ子

協力者　行時志郎（現、日田市経済部農政課主任）、若杉竜太（日田市教育委員会文化課主事）、渡邉隆行（同文化課主事）

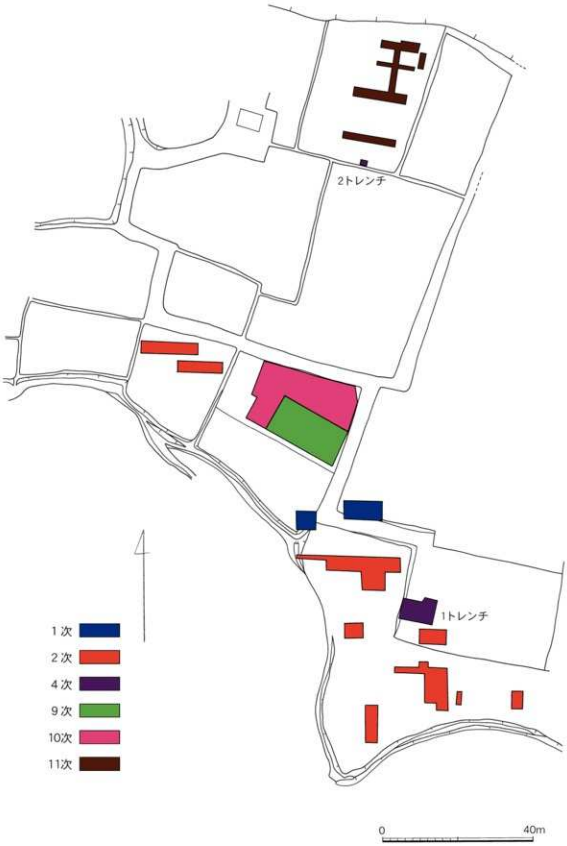
なお、報告書に掲載した挿図・図版に携わった関係者は、次のとおりである。

遺物実測　土居和幸

製　　図　土居和幸、藤野美音（同文化課調査補助員）、高木麻奈美（有限会社雅企画）

遺物写真　長谷川正美（有限会社雅企画）

写真２）１トレンチ作業風景



第２図　４次調査区の位置（1/500）

第２節　調査の内容

１．１トレンチの調査（第３図）

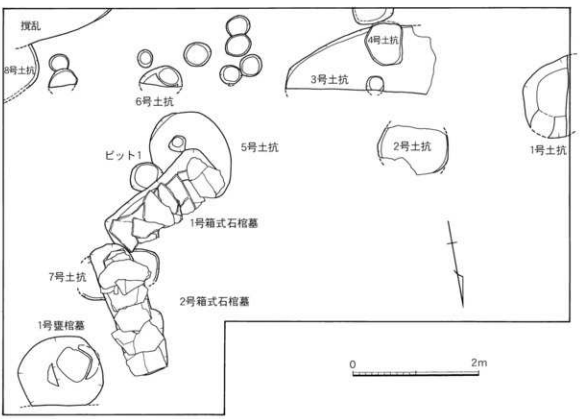
今回の１トレンチは吹上台地のほぼ中央部南側の崖面近くにあたり、一帯は主に畑地として利用されており、ほぼ平坦な地形をなしている。１トレンチ周辺は過去に１・２次調査が行なわれ、甕棺墓や箱式石棺墓など墓地や竪穴住居跡などが確認されていた場所で、このため付近の農道や畑の境界付近には箱式石棺墓に使用されたと考えられる板石や、多くの土器片などが散布していた。

１トレンチではこれまでにも幾度かゴボウ作付けが行なわれていたために遺構の大半は破壊を受けていて、畝状の撹乱溝が東西方向に幾条にも伸びていた。このため、畑の表面には摩滅した土器が散布しており、また遺構面までの表土層中にも多くの土器片等が認められた。こうした状況から、遺構検出作業にはかなりの時間を要することとなった。検出した遺構は箱式石棺墓を除くと、トレンチ北側に集中するかのように検出されたが、いずれも撹乱はひどく良好な状況ではなかった。

また、撹乱によって地山深くまで掘り下げたため、この調査で遺跡の基本層序を確認することができた。それによると、地山面は上位から暗茶褐色土、黄褐色土、赤褐色土の順に堆積が認められた。暗茶褐色土は粘り気を有し、乾くと硬くしまる。黄褐色土も粘性にとんでいるが、暗茶褐色土ほど硬くはない。赤褐色土は粘土層でしまりが強い。という特徴を有している。

以下、各遺構毎にまとめることとするが、本書で変更した遺構名称は次のとおりである。

１号貯蔵穴→１号土坑、４号貯蔵穴→５号土坑、２号土坑→４号土坑、２号貯蔵穴→３号土坑
５号貯蔵穴→８号土坑、３号土坑→６号土坑、３号貯蔵穴→２号土坑、１号土坑→（ピット）



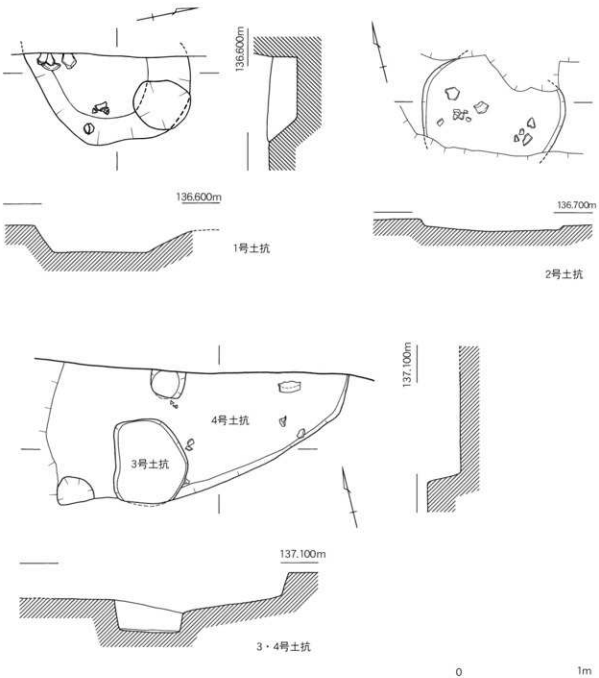
第３図　１トレンチ遺構配置図（1/600）

（1）土坑

総数８基の土坑を確認した。いずれも攪乱のため残存状況は悪く、全容が把握できる土坑はない。土坑のなかには貯蔵穴と考えられるものも見受けられるが、はっきりとしないこともあり土坑として取り扱った。

１号土坑（第４図、第６図１～５、図版１・２・12）

この土坑はトレンチ西側中央で検出した。その半分はトレンチ外へと広がっており、一部攪乱により壊されている。平面形は隅丸方形もしくは隅丸長方形をなすと考えられ、規模は東西が70cm＋



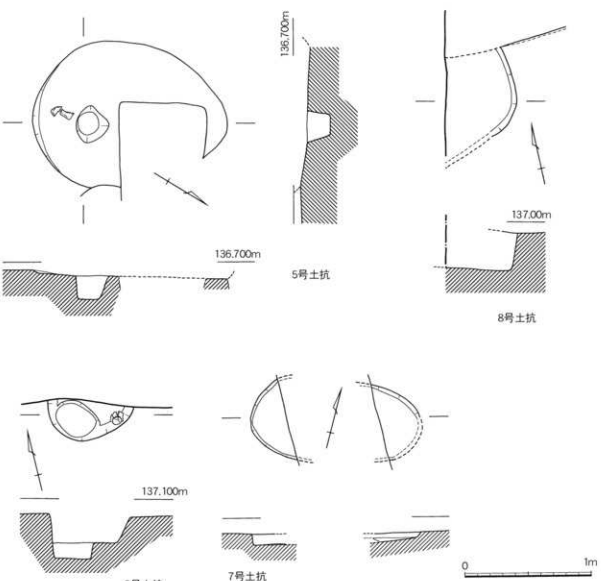
第４図　１トレンチ１～４号土坑実測図（1/30）

α、南北が１m10cm、深さが24cmを測る。遺物は土器片が出土している。

１～４は甕である。１・２の甕は口縁部が内傾し、「L」字状をなす。ともに口縁部下には一条の沈線を巡らせている。１は口縁端部が下がり気味。復原口径17.2cmを測る。２は口縁端部が丸みを帯び、口縁部から胴部にかけて厚みをもつ。復原口径25.8cmを測る。３・４は甕の底部である。３は外に張り出し、上げ底気味で厚みを持つ。底径5.5cmを測る。４は厚みのある平底をなす。底径6.6cmを測る。金雲母を含むことから搬入品であろう。５は壺の底部で、外に張り出し気味。底径13.6cmを測る。

２号土坑（第４図、第６図６・７、図版２・３・12）

この土坑は１号土坑の東側で検出した。平面形は土坑の南と北側を壊されているため、はっきりとしないが円形を呈すると考えられる。規模は径約１m15cm、深さが15cmを測る。土坑の埋土は



第５図　１トレンチ５～８号土坑実測図（1/30）

大きく二層に分けられ、上層には茶褐色土、下層には黒褐色土が堆積しており、下層には炭や焼土を多く含んでいる。遺物の大半はこの下層からの出土である。

6・7とも甕である。6は「コ」字状の突帯を張付けた口縁部が「L」字状をなす。口縁部は内傾し、口縁端部は上がり気味となる。口縁部下には一条の沈線を巡らせているが、途中から「く」字状に下がっている。6は復原口径21.8㎝を測る。7は裾部が外に張り出し、厚みを持つ上げ底をなす。復原底径8.8㎝を測る。

3号土坑（第4図、第6図8～14、図版2）

2号土坑の南側で検出した。遺構の大半は攪乱を受け南側の立ち上がりを残すのみで、平面形ははっきりとしない。規模は深さが26㎝を測る。埋土は暗茶褐色土を呈し、炭や遺物を含んでいる。

8～12・14は甕である。8～11は三角もしくは「コ」字状の突帯を張付けた口縁部が「L」字状をなし、内傾気味である。8・9は口縁部に三角状突帯を張付けている。10・11は口縁端部がやや丸みをもつ。12は胴部下半部である。14は肥厚な口縁部が「く」字状に屈曲し、口縁部下に一条もしくは二条の沈線を巡らせている。復原口径30㎝を測る。13は壺の胴部であろう。胴部最大径付近に小さな三角突帯を二条巡らせる。これらの遺物のほかにも、図示はしていないが跳ね上げ口縁の甕なども出土している。

4号土坑（第4図、第6図15・16、図版2・12）

この土坑は3号土坑と重複するが、切り合い関係は確認出来なかった。遺構の南側は攪乱により壊されている。平面形は楕円形を呈し、規模は東西68㎝＋α、南北60㎝、深さが20㎝を測る。

15・16は甕である。15は短い口縁が「く」字状に外反する。16は「コ」字状の突帯を張付けた口縁部が「L」字状をなす。口縁端部は上がり気味となる。復原口径13.4㎝を測る。

5号土坑（第5図）

この土坑は3号土坑の東側で検出した。1号箱式石棺墓に切られており、また攪乱によって遺構の残存状況は良くなくかった。平面形ははっきりとしないが円形をなすものと考えられ、規模は径約1m50㎝＋α、深さは10㎝を測る。埋土は一層で、地山の黄褐色土をブロック状に含む暗茶褐色土である。遺構の床面にピット1つが存在するが伴うものかはっきりしない。遺物は床面直上から土器小片が出土している。

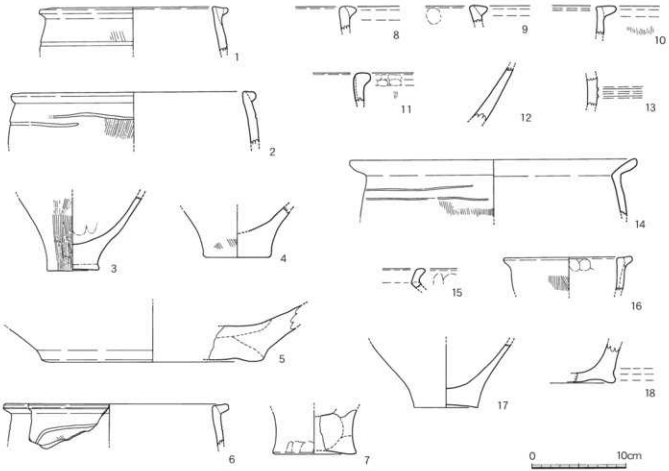
6号土坑（第5図、第6図17）

5号土坑の南側で検出した。遺構の北側が攪乱によって壊されているため、平面形ははっきりとしないが円形もしくは楕円形をなすと考えられる。また、ピットの掘り込みが認められるが前後関係はつかめていない。規模は深さが23㎝を測る。遺物は図示したほかに土器片が出土している。

第6図17は甕の底部である。厚みのある上げ底をなす。底径6.7㎝を測る。

7号土坑（第5図）

この土坑は5号土坑の北側で検出した。2号箱式石棺墓に切られており、遺構の残存状況は良く



第６図　１トレンチ１～４号・６号土坑、ピット１出土土器実測図（1/4）

なかった。平面形は楕円形を呈し、規模は東西が１m35cm、南北が65cm、深さが13cmを測る。埋土は一層で黒褐色土に地山の黄褐色土がブロック状に混入している。遺物は土器小片がわずかに出土している。

８号土坑（第５図）

この土坑は調査区の東側隅で検出した。遺構は調査区外へと広がっており、全容がはっきりしないため土坑として取り扱った。規模は深さが29cmを測る。埋土は大きく２層に分けられ、上層が暗茶褐色土、下層が黒褐色土で、上層には地山の黄褐色土をブロック状に含んでいる。遺物は土器小片が出土している。

（２）ピット

ピット１（第３図、第６図18、図版12）

７号土坑と２号箱式石棺墓と切り合い関係にあり、７号土坑を切り、２号箱式石棺墓に切られる。規模は径約50cm、深さ11cmを測る。

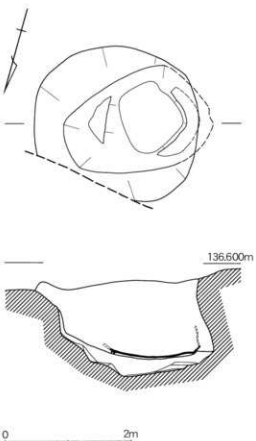
第６図18は甕の底部で、外に張り出した上げ底をなす。

（3）甕棺墓

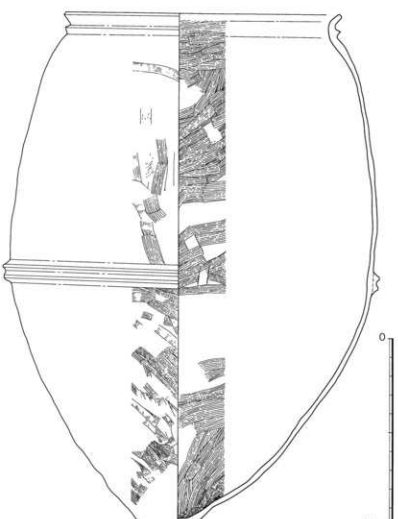
1号甕棺墓（第7・8図、図版4・13）

この甕棺墓は、すでに耕作者が農作物作付けの際に甕棺の大部分を破壊してしまい、甕棺内部に残っていた人骨のみを墓壙内に埋めていたものである。そのため、甕棺墓の状況や人骨の埋葬方法等については確認が出来ていない。原位置を保つ一部甕棺のスタンプによると、この甕棺墓の主軸方向はN－67°－Eで、棺の傾斜角度は45°と推定される。墓壙の規模は長軸長が1m29cm＋α、短軸長が1m20cm＋α、深さは61cmを測る。また、本甕棺の蓋石と思われる安山岩の板石が残っており、蓋石には黄褐色粘質土による目貼りの痕跡と赤色顔料の塗布が認められた。したがって、この甕棺墓は単棺と考えることができる。棺内部からの副葬遺物の出土はなかった。

第8図に示す甕棺の口縁部は肥厚で短く、「く」の字状に外反する。口唇部はやや丸味を持ち、口縁部下には一条の三角突帯を巡らせている。最大径は胴部中位にあり、一条の「M」字状突帯を巡らせている。底部はレンズ状に近い平底である。棺内面には赤色顔料の痕跡が一部残っている。調整は内外面ともハケにより仕上げられている。器高は1m9cm、口径は59.8cm、口縁内径は54.5cm、胴部最大径は73cm、復原底径は11.8cmをそれぞれ測る。



第7図　1トレンチ1号甕棺墓実測図（1/30）



第8図　1トレンチ1号甕棺実測図（1/8）

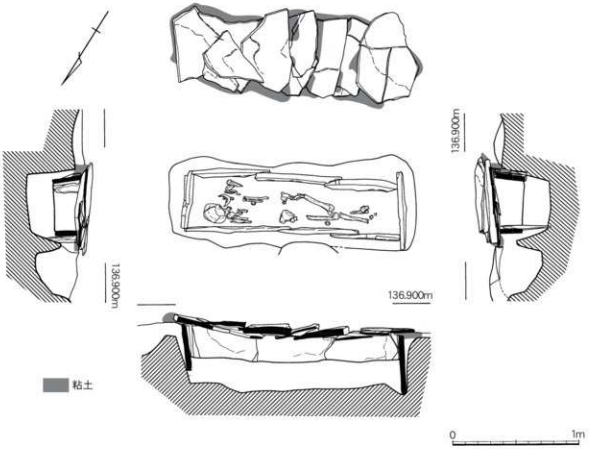
（4）箱式石棺墓

主軸を異にし、切り合い関係にある２基の箱式石棺墓を検出した。両者ともに蓋石を甲重ねとしており、棺内にはそれぞれ１体づつの人骨が埋葬されていた。人骨の詳細については後の分析編に委ねるが、１号は成年女性、２号は成年男性と推定されている。

１号箱式石棺墓（第９図、図版５～８）

この箱式石棺墓は１号甕棺墓同様に農作物を作付けによって、蓋石と墓壙の一部が壊されていた。墓の東側は２号箱式石棺墓に切られており、主軸方向はN－64°－Eにとる。蓋石は７枚の板石を用い西側から順次甲重ねしている。側壁には南北ともに３枚の板石を、小口には東西ともに１枚の板石をそれぞれ用いて構築している。なかでも西側の小口の板石は厚みがあり、棺構築の際には東側小口や両側壁より一段深く掘り下げて立てている。蓋石には粘土による丁寧な目張りがなされており、側壁は両小口により挟まれている。石材は安山岩を用いている。墓壙は隅丸長方形を呈し、規模は長さ１m95cm、幅76cmを測る。板石には安山岩の石材を使用している。

棺内には人骨１体分が残っており、頭部を北東側とし、頭部の床が少し高くなるように床面の成形が施されている。内法は長軸１m64cm、頭位で41cm、足位で36cm、深さは50cmを測る。赤色顔料による塗布は頭骨部分に認められたが、側壁、小口、蓋石などにはその痕跡は残っていなかった。また、副葬品等の遺物の出土もない。



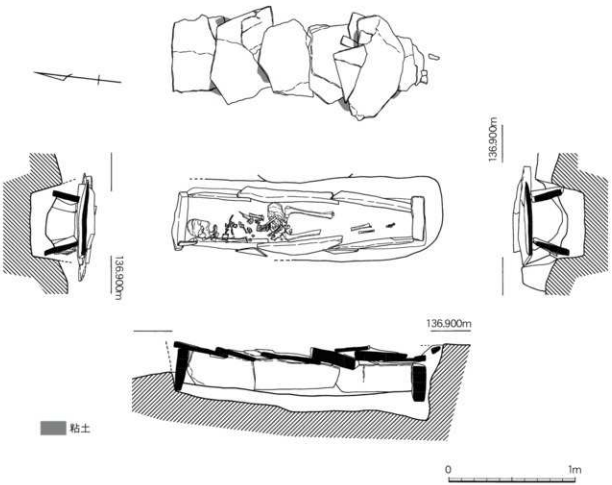
第９図　１トレンチ１号箱式石棺墓実測図（1/30）

２号箱式石棺墓（第10・11図、図版５・６・９・10）

２号箱式石棺墓は１号箱式石棺墓の頭部付近を切ってつくられている。この墓も１号墓同様に農作物を作付けの際に墓壙の一部は壊されていたが、蓋石下部の石棺の残りは比較的良好であった。墓の主軸方向はＮ－８°－Ｗをとる。蓋石は７枚の板石使用し、南側から順次甲重ねしている。小口は南北ともに１枚の板石を、側壁は東西ともに３枚の板石を用いて構築している。また、西側側壁の板石の隙間には小さな板石を配しており、両小口により挟まれている。棺の蓋石と側壁の間、側壁と側壁の間、側壁と床面の間には丁寧に粘土による目貼りが施されている。また床面や側壁内側、蓋石内側には赤色顔料の塗布が顕著に認められた。墓壙は隅丸長方形を呈し、規模は長さ２ｍ15㎝、幅67㎝を測る。頭の位置の幅がわずかに広くなっている。板石には安山岩の石材を使用している。

写真３）２号箱式石棺墓

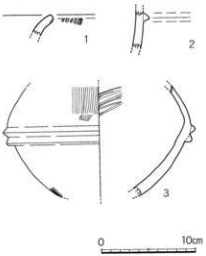
棺内には人骨１体が納められており、頭部を除く骨の残存状況は極めて良好であった。人骨は頭部を北側となるように安置しており、その際に墓壙の床面は頭部が高く成形が行なわれて



第10図　１トレンチ２号箱式石棺墓実測図（1/30）

いる。棺の内法は長軸１m81cm、頭位37cm、足位20cm、深さ29cmを測る。また、人骨の全身には赤色顔料の付着が認められた。棺内には副葬品なかった。

この２号箱式石棺墓の棺内や墓壙の掘方からは土器片が数点出土しているので図示する。１は板付Ⅱ式系統の甕である。短い口縁部は小さく如意状に外反し、口縁端部下半には刻目が施されている。２ははっきりしないが甕であろう。口縁部下と思われる位置にシャープな三角突帯を一条巡らせている。３は壺である。胴部最大径の下位に断面三角形の「M」字状突帯を巡らせている。胴部復原最大径19.4cmを測る。いずれの土器も本来７号土坑などの遺物と考えられる。

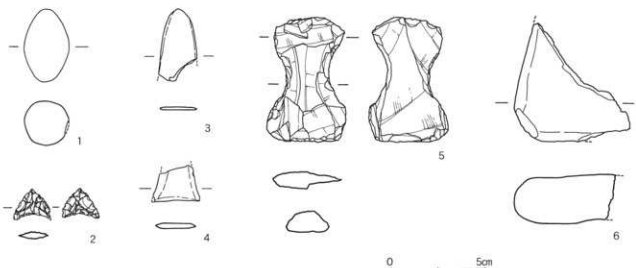


第11図　１トレンチ２号箱式石棺墓出土土器実測図（1/4）

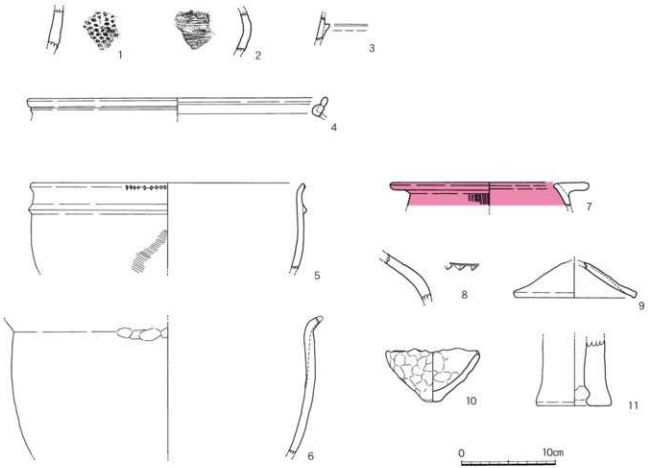
出土土製品・石器（第12図、図版３・12）

１は土製の投弾である。長さが2.9cm、幅が1.7cm、厚さが1.8cm、重さが7.6ｇを測る。３号土坑より出土。

石器は２～６である。２は打製石鏃である。脚部の抉りが浅く、全体的に幅広である。丁寧な二次加工が施されている。脚部の一部を欠く。長さ1.4cm、幅1.8cm、厚さ0.2cm、重さ0.7ｇを測る。石材は安山岩製。３号土坑より出土。３・４は磨製石鏃である。３は基部を欠く。先端部はやや丸みをもち、薄く仕上げられている。表採品である。４は先端部を欠く。基部の抉りは浅く、直線的である。３号土坑より出土。５は打製石斧である。撥形をなし、丁寧な加工により刃部を造りだしている。長さ6.6cm、幅4.1cm、厚さ1.1cm、重さ38.5ｇを測る。２号土坑より出土。６は磨石である。大半を欠損するが、一面のみに研磨痕が残り、浅く窪んでいる。１号土坑より出土。重さ356.5ｇを測る。



第12図　１トレンチ出土土製品・石器実測図（1/2）



第13図　1トレンチ出土縄文土器・表採土器実測図（1/4）

出土縄文土器（第13図1～4、図版12）

1は深鉢である。外面には横位方向に楕円押型文が施されている。胎土に金雲母を含むことから搬入品であろう。2は粗製の鉢である。内外面とも条痕による仕上げ。1号土坑より出土。3は粗製の深鉢であろう。小型で、外面に上向きの一条の突帯が巡る。トレンチ内出土。4は精製の浅鉢である。復原口径31.6cmを測る。トレンチ内出土。1は縄文時代早期、2～4は縄文時代晩期の所産である。

1トレンチ出土土器（第13図5～11、図版13）

このトレンチ内や周辺からは多くの土器片が出土し、また採集されている。代表的な遺物のみを掲載する。5～7は甕である。5は板付Ⅱ式の甕である。口縁部が如意状に外反し、口縁端部下半に刻目を施し、口縁部下に一条の三角突帯を巡らせる。復元口径28.6cmを測る。6も板付Ⅱ式の甕である。口縁端部を欠くものの、如意状に外反する。7は須玖式土器である。口縁部が鍬先状をなし、全面に朱が塗布されている。復元口径21cmを測る。8は壺である。肩部に沈線文、鋸歯文が施されている。9は蓋であろう。復原口径12.9cmを測る。10は鉢形の手捏ね土器である。口径9.9cmを測る。11は器台である。器壁は厚く、ほぼ直立する。復原径7.8cmを測る。

2．2トレンチの調査（第14図）

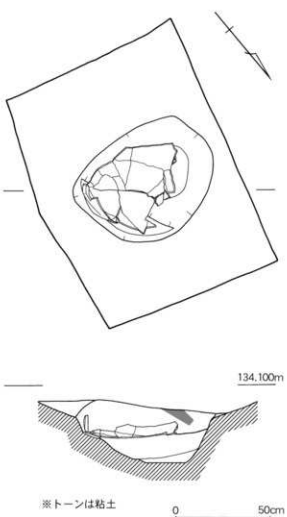
前述したように1トレンチを調査中に甕棺墓が発見されたため、2トレンチとして設定し急遽発掘調査を行なった。調査にあたっては墳墓が広がる可能性もあることから広範囲の設定も考えたが、調査費も時間も少なくなっていたので拡張することは断念し、発見された甕棺墓のみを記録保存すべき最小範囲内でのトレンチ設定にて行なった。

1．甕棺墓

1号甕棺墓（第14・15図、図版11・13）

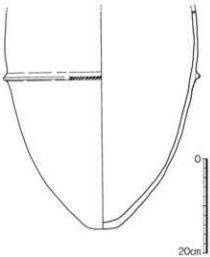
1トレンチより北へ120mの位置において検出したが、墓壙と甕棺の大半は削平を受け撹乱状況にあった。墓壙は現状で東西が77cm、南北が59cm、深さが30cmを測る。かろうじて棺の下の部分が残っていたので、主軸方向はN－66℃－Wと推定される。棺の傾斜角度はほとんどなく、ほぼ水平に近い。赤色顔料の塗布は認められず、また副葬遺物の出土はなかった。この甕棺は取り上げ後に周辺に散乱する土器を採集し接合したが、口縁部および棺の半分以上が欠く状況にあることから、今回の発見以前に棺上部は失われていたものと考えられる。単棺なのか合せ口式なのかはっきりとはしない。

甕棺は砲弾状のプロポーションをなし、口縁部付近を欠く。底部は不安定なレンズ状なし、胴部最大径は胴部中央より上位にあると考えられる。その下位には刻目を施した「コ」字状の突帯を一条巡らせている。器高40.8cm、胴部最大径46cmを測る。

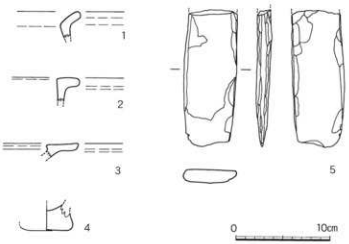


第14図　2トレンチ1号甕棺墓実測図（1/30）

第4図　2トレンチ作業風景



第15図　２トレンチ１号甕棺実測図（1/8）



第16図　２トレンチ出土土器・石器実測図（1/4・1/2）

２．２トレンチ出土土器（第16図、図版13）

このトレンチから出土した土器数は少なく、代表的な遺物のみを掲載する。１・２は甕である。１は口縁部が「く」字状に屈曲し、口縁端部は丸みを帯びている。２は口縁部は平坦で、「L」字状をなす。３は高坏である。口縁部が鍬先状をなす。４は小型の甕の底部である。全体的に丸みを帯び、厚みを持つ上げ底で、底径5.6cmを測る。５は扁平石斧である。長さ7.2cm、幅2.7cm、厚さ7.5cm、重さ26.1ｇを測る。表採品。

第３節　小　結

４次調査では甕棺墓や箱式石棺墓といった墳墓と土坑などの遺構が検出された。１トレンチ１号甕棺墓については短く屈曲する口縁部や不安定なレンズ底の特徴を有しており、こうした特徴は市内平島遺跡Ｄ地点３号墓や草場第２遺跡70号に類似する。特に胴部最大径が胴部中央下位にあり、そこに突帯を巡らせ、内外面ともにハケによる調整を行なっている点などは草場第２遺跡70号墓とほぼ同一と言える。これまではこの甕棺は後期前半の時期と判断していたが、北部九州編年の三津式よりは新しい時期のものと考えた方がよさそうで、後期後半以降と推定する。一方、やや地点が異なる２トレンチ１号甕棺墓については口縁部を欠くため年代の特定は難しいが、レンズ底をなしている点は１トレンチ１号甕棺墓と同時期もしくは後出するものと考えられる。

次に１号甕棺墓に隣接する箱式石棺墓２基については、調査区南側の１・２次調査などでも甕棺墓や箱式石棺墓などの墓域が検出されていて、その関連する墓域の可能性がある。しかも、先の平島遺跡や草場第２遺跡の例でも箱式石棺墓と甕棺墓がセットをなすことからして、両箱式石棺墓の時期は１号甕棺墓と近い時期に営まれたものと考えておきたい。

また、土坑については、１～４号は如意形の板付Ⅱ式系統の土器は見当たらないものの、三角もしくは「コ」字状の突帯を持つ甕や「く」字状の亀ノ甲タイプの甕が目立つ。よって、前期末～中期初頭の時期に比定されよう。

第１表　４次調査出土土器観察表

掲図番号	区名	遺構名	種別	器種	法量				調整		胎土	焼成	色調		備考
					口径	胴部径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第6図-1	１Ｔ	１号土坑	弥生	甕	(17.2)	－	－	(4.5)	ハケ後ナデ	ナデ	ＡＢＣＤ	良	黄褐色	黄褐色	沈線が巡る
第6図-2	１Ｔ	１号土坑	弥生	甕	(25.8)	－	－	(5.5)	ハケ	ナデ	ＡＢＣＤＨ	良	赤褐色	赤褐色	
第6図-3	１Ｔ	１号土坑	弥生	甕	－	－	5.5	(7.8)	ハケ	ナデ	ＢＣＤＨ	良	茶褐色	黒褐色	
第6図-4	１Ｔ	１号土坑	弥生	甕	－	－	6.6	(5.3)	ハケ	ナデ?	ＢＧＨ	良	赤褐色	黄褐色	
第6図-5	１Ｔ	１号土坑	弥生	壺	－	－	21.4	(5.9)	ナデ	ナデ	ＢＣＤＥ	良	黒褐色	暗茶色	
第6図-6	１Ｔ	２号土坑	弥生	甕	(21.8)	－	－	(4.0)	ハケ	ナデ	ＡＢＣＤＨ	良	淡褐色	黄褐色	沈線が巡る
第6図-7	１Ｔ	２号土坑	弥生	甕	－	－	8.8	(4.7)	ナデ	ナデ	ＡＢＤＨ	良	暗茶褐色	茶褐色	
第6図-8	１Ｔ	３号土坑	弥生	甕	－	－	－	－	ナデ	ナデ	ＡＢＤＨ	良	黒褐色	茶褐色	
第6図-9	１Ｔ	３号土坑	弥生	甕	－	－	－	－	ナデ	ナデ	ＡＢＤＨ	良	赤褐色	赤褐色	
第6図-10	１Ｔ	３号土坑	弥生	甕	－	－	－	－	ハケ	ナデ	ＡＢＣＤＥＨ	良	淡褐色	淡暗色	
第6図-11	１Ｔ	３号土坑	弥生	甕	－	－	－	－	ハケ	ナデ	ＢＧＨ	不良	黄褐色	黄褐色	
第6図-12	１Ｔ	３号土坑	弥生	甕	－	－	－	－	不明	不明	ＢＧＨ	良	白褐色	白褐色	
第6図-13	１Ｔ	３号土坑	弥生	壺	－	－	－	－	不明	不明	ＡＣＤＨ	良	淡黄褐色	黒茶色	三角突帯
第6図-14	１Ｔ	３号土坑	弥生	甕	30.0	－	－	(6.2)	ナデ	ナデ	ＡＢＤ	良	淡褐色	淡褐色	沈線が巡る
第6図-15	１Ｔ	４号土坑	弥生	壺	－	－	－	－	ナデ	ナデ	ＡＢＣＥＨ	良	暗茶色	暗茶色	
第6図-16	１Ｔ	４号土坑	弥生	甕	(13.4)	－	－	(3.6)	ハケ	ナデ	ＡＢＣＨ	良	暗茶褐色	茶褐色	
第6図-17	１Ｔ	６号土坑	弥生	甕	－	－	6.7	(6.8)	不明	ナデ	ＡＢＣＨ	良	茶灰褐色	黒褐色	
第6図-18	１Ｔ	ピット１	弥生	甕	－	－	－	－	ナデ	ナデ	ＡＢＣＨ	良	淡灰褐色	淡褐色	
第8図-1	１Ｔ	１号甕棺墓	弥生	甕	－	－	－	－	ハケ	ハケ	ＡＢＣＨ	良	黄褐色	黄褐色	頸部に三角突帯 胴部にＭ字突帯
第11図-1	１Ｔ	２号石棺墓	弥生	甕	－	－	－	－	ナデ	ナデ	ＡＢＣＤＥ	良	暗茶色	暗茶色	口縁端部に刻目
第11図-2	１Ｔ	２号石棺墓	弥生	甕	－	－	－	－	ナデ	ナデ	ＡＢＣＨ	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第11図-3	１Ｔ	２号石棺墓	弥生	壺	－	(19.4)	－	(11.6)	ハケ	ハケ	ＡＢＣＤＥ	良	赤褐色	茶褐色	
第13図-1	１Ｔ	５号土坑	縄文	深鉢	－	－	－	－	不明	不明	ＢＧＨ	良	暗茶褐色	暗茶褐色	楕円押型文
第13図-2	１Ｔ	１号土坑	縄文	鉢	－	－	－	－	ナデ	ナデ	ＡＢＣＤＥＨ	粗製	茶褐色	黒褐色	
第13図-3	１Ｔ	表採	縄文	深鉢	－	－	－	－	ナデ	ナデ	ＡＢＨ	粗製	黒褐色	黒褐色	
第13図-4	１Ｔ	表採	縄文	浅鉢	(31.6)	－	－	(2.0)	不明	不明	ＢＣＤＨ	粗製	暗灰褐色	暗灰褐色	
第13図-5	１Ｔ	表採	弥生	甕	(28.6)	－	－	(9.1)	ハケ	ナデ	ＡＢＣＤＥ	良	茶褐色	黄褐色	口縁端部に刻目
第13図-6	１Ｔ	表採	弥生	甕	－	(33.0)	－	(14.1)	ハケ後ナデ	ナデ	ＡＢＣＤＥＨ	良	黒褐色	黄褐色	
第13図-7	１Ｔ	表採	弥生	甕	(21.0)	－	－	(2.6)	ヘラ研磨	ナデ	ＡＢＣＤＥ	良	赤褐色	赤褐色	丹塗り
第13図-8	１Ｔ	表採	弥生	壺	－	－	－	－	ミガキ	ミガキ?	ＡＢＣＤＥ	良	暗茶色	暗茶褐色	頸面文あり
第13図-9	１Ｔ	表採	弥生	蓋	(12.9)	－	－	(3.7)	ナデ	ナデ	ＡＢＣＤＥＨ	良	赤褐色	灰褐色	
第13図-10	１Ｔ	表採	弥生	手捏	9.9	－	1.7	5.6	指押え	指押え	ＡＢＣＤ	良	白黄褐色	白黄褐色	
第13図-11	１Ｔ	表採	弥生	器台	－	－	(7.8)	(7.1)	不明	不明	ＡＢＣＤＥＨ	良	明黄褐色	明橙褐色	
第15図-1	２Ｔ	１号甕棺墓	弥生	甕	－	(40.8)	－	(46.0)	不明	不明	ＡＣＤＥＨ	良	明褐色	茶褐色	内面に赤色顔料
第16図-1	２Ｔ	一括	弥生	甕	－	－	－	－	ナデ	ナデ	ＡＤＨ	良	灰黄褐色	灰黄褐色	
第16図-2	２Ｔ	一括	弥生	甕	－	－	－	－	ナデ	ナデ	ＡＢＣＥＨ	良	灰黄褐色	灰黄褐色	
第16図-3	２Ｔ	一括	弥生	高杯	－	－	－	－	不明	不明	ＡＢＣＤＨ	良	白黄色	白黄色	
第16図-4	２Ｔ	一括	弥生	甕	－	－	5.6	(2.7)	不明	不明	ＡＢＣＤＥＨ	良	赤褐色	灰黄褐色	

法量の単位はcm。（　）書きは、残存と復原を表す。
胎土：Ａ角閃石　Ｂ石英　Ｃ長石　Ｄ赤色粒子　Ｅ白色粒子　Ｆ黒色粒子　Ｇ雲母　Ｈ砂粒

第２表　４次調査出土石器観察表

神回番号	区名	遺構名	器　種	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備　考
第12図-2	1Ｔ	３号土坑	打製石斧	安山岩	1.4	1.8	0.2	0.7	
第12図-3	1Ｔ	表採	磨製石斧	緑泥片岩	(2.8)	(1.5)	(0.15)	(1.0)	
第12図-4	1Ｔ	３号土坑	磨製石斧	緑泥片岩	(1.4)	(1.8)	0.2	(0.8)	
第12図-5	1Ｔ	２号土坑	打製石斧	片岩	6.6	4.1	1.1	38.5	
第12図-6	1Ｔ	１号土坑	磨石	(凝灰岩質)	(8.8)	(8.5)	(3.8)	(356.5)	
第10図-5	2Ｔ	表採	扁平石斧	粘板岩	(7.2)	(2.7)	(7.5)	(26.1)	

第３表　４次調査出土土製品観察表

神回番号	区名	遺構名	器　種	胎　土	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備　考
第12図-1	1Ｔ	５号土坑	粒　状	ＡＢＣＨ	2.9	1.7	－	7.6	

胎土：Ａ角閃石　Ｂ石英　Ｃ長石　Ｄ赤色粒子　Ｅ白色粒子　Ｆ黒色粒子　Ｇ雲母　Ｈ砂粒

1トレンチ遺構検出状況（北西から）

1トレンチ遺構検出状況（南から）

１トレンチ遺構検出状況（北東から）

１トレンチ１～４号土坑発掘状況（北から）

１トレンチ２号土坑発掘状況（北から）

１トレンチ２号土坑遺物出土状況

1トレンチ1号甕棺墓発掘状況（東から）

1トレンチ1号甕棺墓発掘状況（東から）

１トレンチ１・２号箱式石棺墓検出状況（東から）

１トレンチ１号箱式石棺墓人骨検出状況（西から）

1トレンチ1・2号箱式石棺墓人骨出土状況（南から）

1トレンチ2号箱式石棺墓人骨調査風景

1

4

7

2

5

8

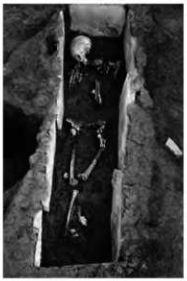
3

6

1トレンチ1号箱式石棺墓（西から）

図版 8

9



12

15

10

13

16

11

14

1トレンチ1号箱式石棺墓（西から）

1

4

7

2

5

8

3

6

1トレンチ2号箱式石棺墓（南から）

9

12

15

10

13

16

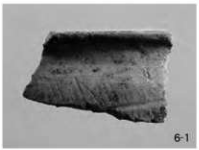
11

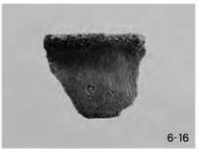
14

1トレンチ2号箱式石棺墓（南から）

2トレンチ1号甕棺墓発掘状況（東から）

2トレンチ1号甕棺墓発掘状況（南から）

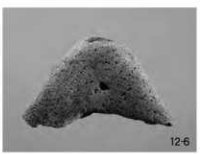

6-1


6-16

12-5

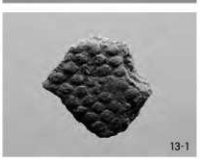
6-2

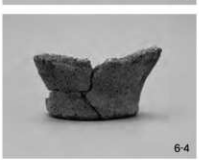
6-18

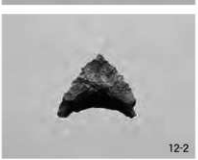

12-6

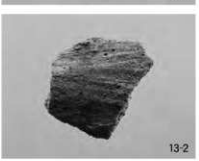
6-3

12-1


13-1


6-4


12-2

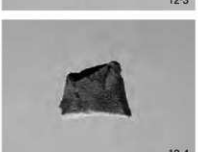

13-2

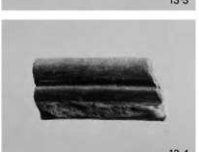
6-5

12-3

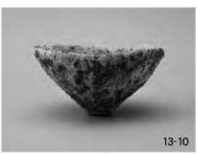
13-3

6-6


12-4

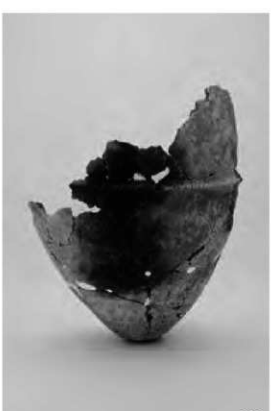

13-4

13-6


13-10

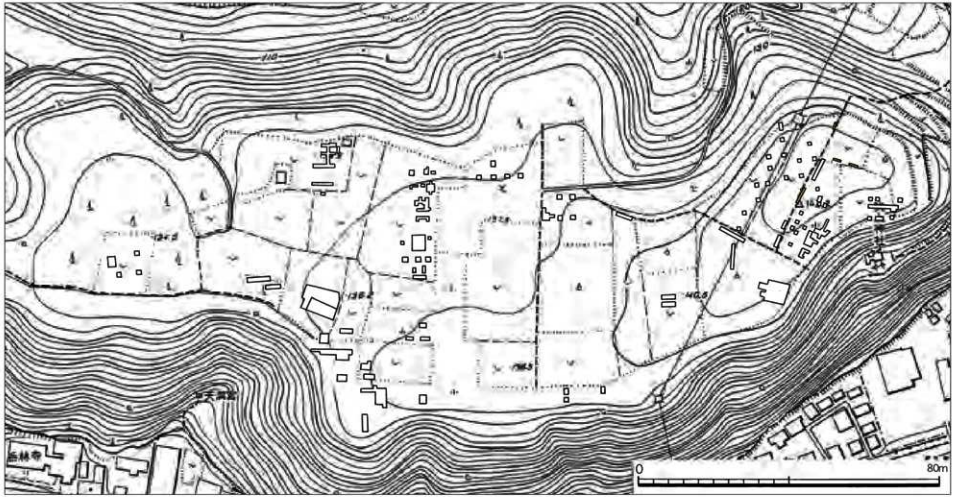
16-5

8-1


15-1

第５章　５次調査の記録

写真１）吹上原台地空中写真（白印は調査位置）



第１図　５次調査の位置（1/2500）　　５次

第１節　調査の概要（第１図）

５次調査は、昭和60年度に整備した農道が狭小で車両がすべりやすいことから、再度農道の幅員を広げ、一部コンクリート舗装・砂利敷の工事を行いたいとの話が地元の農地所有者から持ち上がり、この工事に先立つ事前の確認調査として実施した。その対象範囲は３次調査で実施した範囲と重複するため、３次調査で確認調査を行わなかった区域に絞り実施した。

調査は地権者の同意を得て、平成３年２月４日～５日に実施した。調査地点については、農道北東側で北・東方向にL字に分岐した位置から、東側農道奥より１・２トレンチ、北側が３トレンチ、それより西側を４トレンチに設定した。４本のトレンチの総面積は25㎡である。調査では、機械（バックホウ）を使って掘り下げ、遺構検出の後、写真撮影、平板測量を行い遺構の状況を記録した後、埋め戻し作業を随時行っていった。

各トレンチの５次調査で検出した遺構総数は、貯蔵穴と推測される遺構が4基、ピット５個であった。この調査内容については、すでに平成２年度発行の『日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅴ』に簡略に記しているが、今回の報告で正式な報告とする。

５次調査の報告に関する組織体制は、以下のとおりである。

調査責任者　後藤元晴（日田市教育委員会教育長）
調 査 事 務　後藤　清（同文化課長）、田中伸幸（同文化課文化財係長兼埋蔵文化財係長）、園田恭一郎（同文化課主査）
調 査 担 当　行時志郎（日田市経済部農政課主任）
整理作業員　宇野富子、梶原ひとえ、川原君子、安元百合、和田ケイ子
協　力　者　土居和幸（日田市教育委員会文化課主査）、若杉竜太（同文化課主事）、渡邊隆行（同文化課主事）

なお、報告書に掲載した挿図・図版に携わった関係者は、次のとおりである。

遺 物 実 測　行時志郎
製　　図　藤野美音(同文化課調査補助員)
遺 物 写 真　長谷川正美(有限会社雅企画)

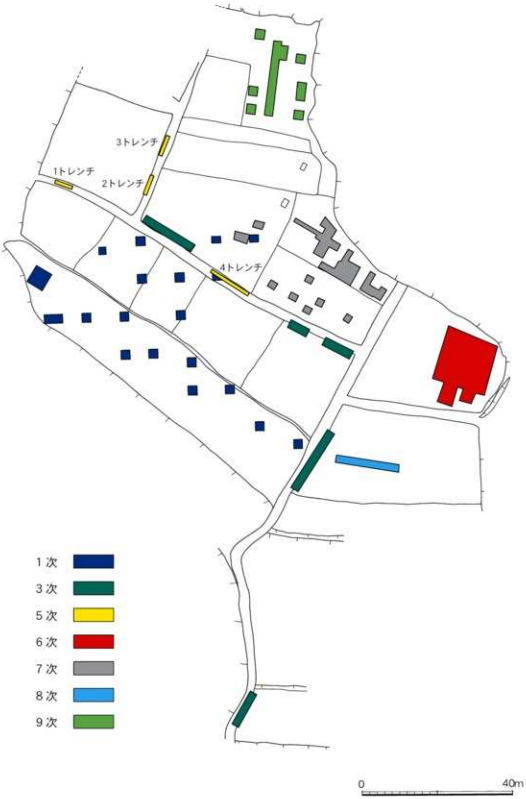
第２節　調査の内容

１．１トレンチの調査（第２図）

農道内に１m×５mのトレンチを設定した。このトレンチの位置は３次調査区５トレンチの東側にあたる。掘り下げた結果、深さ約0.5mほどのところで黄褐色の地山面が検出された。トレンチ中央よりやや西よりの位置で直径約1.5mの平面円形プランを呈する貯蔵穴と見られる遺構が１基確認された。このトレンチ内からの遺物の出土はなかった。

２．２トレンチの調査（第２・３図、図版１）

農道内に１m×５mのトレンチを設定した。このトレンチの位置は３次調査区５トレンチと１トレンチの丁度間にあたる。掘り下げた結果、１トレンチと同様に深さ約0.5mほどのところで黄褐色の地山面が検出された。トレンチ東端で平面隅丸方形プランを呈すると推測される貯蔵穴と見られる遺構が1基確認されるとともに、トレンチ中央でも直径約1.5mほどの平面円形プランを呈する



第２図　５次調査区の位置図（1/500）

と推測される貯蔵穴と見られる遺構がそれぞれ確認された。また、この他柱穴と見られるピットが6個確認されている。

このトレンチ内からは、土器片が十数点出土しているが、図示可能な遺物を掲載する。1は高坏の口縁部と考えられる。胴部から口縁部にかけてはキャリパー型にやや内湾しながら直口気味に延びる。口縁端部は厚ぼったいにも拘わらずシャープで丁寧なつくりで、胴部内外面とも横方向の磨きを施している。焼成は非常に良好で、内外面には丹が塗付されている。復元口径約16.4cmを測る。2は甕底部である。底部は厚みがあり、底面はやや上げ底状を呈する。内底面には指頭圧痕がみられる。外面は2次焼成を顕著に受ける。復元底径約9.1cmを測る。

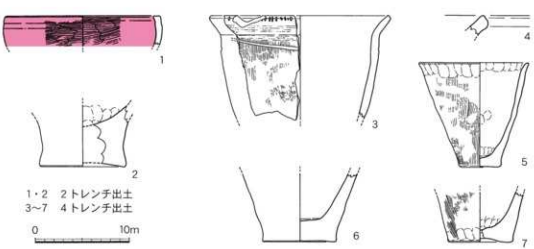
3．3トレンチの調査（第2図）

農道内に1m×5mのトレンチを設定した。このトレンチは3次調査区の北側にあたる。掘り下げた結果、トレンチ南側では約0.5mほどのところで地山面が検出されたが、北側は深くなり約1mほど掘り下げてようやく地山面を検出することができた。地形的には、このトレンチ北側付近から北東方向に向かって緩やかに傾斜していることから、もともと緩斜面であったところに畑を造成する際に埋めて平坦にしたものと推測される。このトレンチ内からは、遺構や遺物の出土はなかった。

4．4トレンチの調査（第2・3図、図版1）

農道内に1m×10mのトレンチを設定した。このトレンチは3次調査区の5トレンチと4トレンチの丁度間にあたる。掘り下げた結果、深さ約0.5mほどのところで黄褐色の地山面が検出された。トレンチ北端で直径約1.5mほどの平面隅丸方形プランを呈すると推測される貯蔵穴と見られる遺構が1基確認されたが、他に遺構と見られるものは検出されなかった。

このトレンチ内からは数10点の土器片が出土しているが、図示可能な遺物を掲載する。3は甕口縁部片である。口縁部は如意状に外反し、胴部はあまり膨らまない。頚部下には1条の沈線、口縁端部は刻目を施す。口縁部付近は横方向のナデ、頚部下は縦方向のハケ調整が施されている。内面は丁寧なナデ調整が施される。外面は2次調整を受け煤が付着する。復元口径19.2cmを測る。4



第3図　トレンチ出土土器実測図（1/4）

は甕口縁端部片である。端部はやや跳ね上げ状口縁の特徴を呈する。5は小型の甕である。口縁部は如意状を呈し、胴部はあまり膨らまずに底端部に至る。底面はほぼ平坦に仕上げる。口縁部付近には指頭圧痕が顕著に残り、また整形時における粘土の輪積みの跡も消しきれず凹凸が残る。外面は縦方向のハケ調整が顕著に残り、内面指ナデ調整が施される。また、外面は２次焼成を顕著に受ける。復元口径約11.7㎝、器高11.1㎝、底径4.5㎝を測る。６は甕底部片である。底面はわずかに上げ底状を呈する。底端部から胴部へ向かっては、あまり開かず直線的に伸びる。外面２次焼成を受ける。復元底径約7.8㎝を測る。７も甕底部片である。底面は上げ底状を呈する。底端部から胴部にかけては、あまり開かず直線的に伸びる。外面ハケ調整、内底面は指頭圧痕が顕著に残る。外面は２次焼成を受ける。復元底径7.0㎝を測る。

第３節　小　結

５次調査区に設けた４本のトレンチからは、貯蔵穴等と見られる遺構が検出された。各遺構の掘り下げは行っていないものの各トレンチ内から出土した土器を整理すると、如意状口縁部や厚みのある底部の特徴を持つ甕などが主体であり、これらは弥生時代前期末から中期初頭にかけての遺物と考えられる。また、３次調査区からも貯蔵穴の中から同様な時期の遺物が出土していることから見ても、今回の調査区で検出された遺構の時期は、トレンチ内から出土した遺物の時期と判断してよいと考えられる。

今回の調査区で確認された貯蔵穴は、先にも触れたように３次調査区で確認された貯蔵穴群の時期と同様の時期と判断されるものであり、貯蔵穴の占地範囲が台地東端付近まで広がっていたことが窺えた。

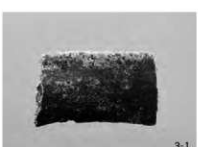
第１表　５次調査出土土器観察表

挿図番号	区名	遺構名	種別	器種	法量				調整		胎土	焼成	色調		備考
					口径	胴部径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第３図-1	２T	一括	弥生	高杯	(16.4)	－	－	－	ミガキ	ミガキ	ＡＢＣＤ	良	淡灰白色	淡灰白色	内外面丹塗り
第３図-2	２T	一括	弥生	甕	－	－	(9.1)	－	ナデ	ナデ	ＡＢＣＤ	良	淡灰褐色	淡黒褐色	
第３図-3	４T	一括	弥生	甕	(19.2)	－	－	－	ハケ	ナデ	ＡＢＣＤ	良	淡茶灰色	淡茶灰色	外面煤付着
第３図-4	４T	一括	弥生	甕	－	－	－	－	ナデ	ナデ	ＡＢＣＤＧ	良	淡茶灰色	淡茶灰色	
第３図-5	４T	一括	弥生	甕	(11.7)	－	(4.5)	11.1	ハケ	ナデ	ＡＢＣＤ	良	淡灰褐色	淡黄灰色	
第３図-6	４T	一括	弥生	甕	－	－	(7.8)	－	ナデ	ナデ	ＡＢＣＤ	良	淡黄灰色	淡灰白色	
第３図-7	４T	一括	弥生	甕	－	－	(7.0)	－	ハケ	ナデ	ＡＢＣＤ	良	淡茶褐色	淡灰褐色	

法量の単位は㎝。（　）書きは、残存と復原を表す。
胎土：Ａ角閃石　Ｂ石英　Ｃ長石　Ｄ赤色粒子　Ｅ白色粒子　Ｆ黒色粒子　Ｇ雲母　Ｈ砂粒

2 トレンチ完掘状況（西から）

2 トレンチ　　4 トレンチ



報 告 書 抄 録

ふりがな	ふきあげ
書　　名	吹上Ⅰ
副 書 名	3～5次調査の調査報告
巻　　次	
シリーズ名	日田地区遺跡群発掘調査報告／日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	3/42
編著者名	土居和幸・行時志郎・下村　智
編集機関	日田市教育委員会
所 在 地	〒877-8601　日田市田島2-6-1
発行年月日	2003年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
吹上遺跡	大分県日田市 大字渡里・吹上・ 友田	44204-6	651090	130°55′00	33′19	19851118 ～19860125 19870116 ～19870213 19910204 ～19910205	3次 930㎡ 4次 51.7㎡ 5次　25㎡	農道建設 農作物作付け 農道建設

所要遺跡名	種別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特記事項
吹上遺跡	集落跡	縄文時代		縄文土器	
		弥生時代	竪穴住居跡1軒、貯蔵穴12基、土坑12基、甕棺墓2基、箱式石棺墓2基	弥生土器、石器、土製品	大型成人用甕棺墓1基
		古墳時代		土師器	
		中　　世		白磁	

吹上遺跡１次調査中に発行した発掘調査速報新聞

吹上 Ⅰ

－３～５次調査の記録－
日田地区遺跡群発掘調査報告３
日田市埋蔵文化財調査報告書第42集

平成15年３月31日

発　行　日田市教育委員会
大分県日田市田島2-6-1
印　刷　尾花印刷有限会社
大分県日田市田島本町8-8